

根古谷台遺跡

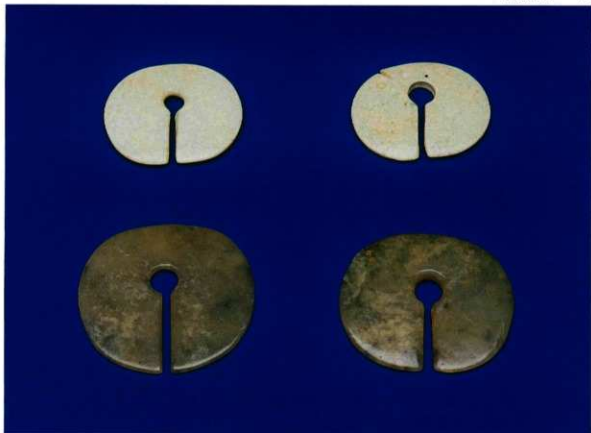
(縄文時代編)

平成30年3月

宇都宮市教育委員会



根古谷台遺跡遠景（北西上空から）



(1) 珠状耳飾（上：100号墓坑、下：117号墓坑）



(2) 管玉・丸玉・小玉（左2列：101号墓坑、右2列：114号墓坑）

発刊にあたって

根古谷台遺跡の発掘調査は、市営の霊園墓地造成に先立つ調査として、昭和57年4月に開始しました。当初計画では、対象面積約6万㎡を造成計画に沿って5ヵ年で調査することとしました。調査開始から4年次目（昭和60年度）までは、古墳時代の集落跡と円墳群が確認されましたが、記録保存を行い、計画どおり墓地造成を進めてまいりました。ところが最終年度の5年次目（昭和61年度）に至り、予想もしていなかった縄文前期の大規模集落跡が確認され、昭和62年度まで調査を延長することとなりました。

この縄文前期の集落跡は、2ヵ年の調査の結果、これまでにあまり例のない特異な建物跡と多数の墓坑から構成されていることが判明し、いくつかの墓坑からは全国的にも極めて希少な耳飾りや首飾りの玉類が出土しました。この成果は学会からも大きく注目され、研究者のみならず一般の多くの人びとの関心を引き起こすことになりました。これを受け宇都宮市は、墓地造成計画を変更し、この重要遺跡の保存を決定し、昭和63年5月、根古谷台遺跡として国史跡の指定を受け、恒久的保存が保証されるに至りました。さらに平成4年2月には、史跡公園「うつのみや遺跡の広場」として開園し、遺跡の積極的な活用を進めているところです。

本書は、昭和57年4月から昭和62年12月までの約6年間におよんだ発掘調査の内、国指定史跡として保存された根古谷台遺跡の中核部分を成す縄文前期に関する調査報告書となります。

最後になりましたが、このように全国的な注目を集めた重要遺跡にも関わらず、発掘調査の終了からその成果報告までに30年以上もの年月を費やしてしまいましたことに深くお詫び申し上げるとともに、長期にわたってご指導いただきました皆様に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成30年3月30日

宇都宮市教育委員会教育長 水越 久夫

例 言

- 1 本書は、昭和61年4月～昭和62年12月に実施した宇都宮市上町町に所在する根古谷台遺跡発掘調査の縄文時代に関する報告書である。
- 2 発掘調査は宇都宮市教育委員会が主体となり、次頁に示したとおりの調査団組織に基づき実施したものである。
- 3 もともと本遺跡は、市営霊園（聖山公園）造成に伴う記録保存のための調査ということから、第1次調査地区（昭和57年度）から第4次調査地区（昭和60年度）までは聖山公園遺跡という名称で扱ってきた。ところが最終の第5次調査地区（昭和61・62年度）において、縄文時代前期の大規模な集落跡が確認され、これが国指定史跡として保存されることになったことから、この第5次調査地区に限っては字名をとって根古谷台遺跡と呼ぶことにしたものである。
- 4 発掘調査における測量及び写真撮影等は、津布葉一樹、矢板真雄の協力を得て、梁木誠がこれにあたった。また報告書作成に伴う遺構・遺物の整理及び写真撮影等は、中山真理、渋谷麻友子の協力を得て、梁木がこれにあたった。なお出土遺物の分類・分析等にあたっては、栃木県埋蔵文化財センターの上野修一・亀田幸久両氏から多大なるご指導を賜った。記して感謝の意を表する。
- 5 本書の編集・執筆は、清地良太との協議を踏まえ、梁木がこれにあたった。
- 6 本書作成に伴う事務局体制（平成29年度）は以下のとおりである。

・教育長	水越久夫	・教育次長	水沼忠雄
・文化課長	松本邦夫	・文化課主幹	今平利幸
・文化財保護グループ	君島直人（係長）、中村忠守、近藤 真、竹下 亘、星野治彦、仲沢 隼 清地良太、田中宏迪、齋藤なつ、梁木 誠・渋谷麻友子（副託）		
- 7 発掘調査・整理作業・報告書作成の各過程において、次の方々よりご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略、順不同）

大野憲司、富樫泰時、稲野祐介、佐藤信行、阿部正光、村田晃一、目黒吉明、大越道正、吉田秀亨、森 幸彦、長島雄一、根本信孝、齊藤弘道、阿久津久、桜岡正信、石坂 茂、藤巻幸男、原 雅信、村松和男、岩崎泰一、能登 健、赤山容造、坂口 一、小島敦子、宮田 毅、大塚昌彦、小林良彦、栗原文蔵、谷井 彪、宮崎朝雄、梅沢太久夫、井上 肇、小川良祐、高橋一夫、金子真土、浅野晴樹、細田 勝、黒坂嶺二、大塚孝司、寺内正明、中村誠二、大塚和男、西川 制、奥野麦生、佐々木保俊、荒井幹夫、小出輝雄、新井和之、春成秀爾、西本豊弘、堀越正行、篠原 正、西山太郎、菊地敏記、西村正衛、小林達雄、永嶺光一、大塚初重、河原純之、安原啓示、岡村道雄、佐久間豊、松村恵司、原田昌幸、橋本博文、早川 泉、比田井克仁、小島正裕、江里口省三、小坂井孝修、中西 充、可児通宏、小栗一夫、丹野雅人、岩橋陽一、村田文夫、山本暉久、鈴木保彦、戸田哲也、坂本 彰、石井 寛、長谷川厚、小杉 康、笹沢 浩、宮下健司、郷道哲章、渡辺 誠、石野博信、林部 均、小林行雄、千田剛道、宮本長二郎、田中 琢、水野正好、古田武彦、清水信行、川原由典、海老原都雄、竹澤 謙、岩淵一夫、岩上照朗、田熊清彦、石橋知明、小森紀男、初山孝行、小森哲也、上野修一、芹沢清八、田代 隆、塚本師也、鈴木 実、三澤正善、福田定信、矢島俊雄、木村 等、齊藤 弘、青木健二、亀田幸久、久保田正寿、太田邦夫、井上 巖

■聖山公園遺跡及び根谷谷台遺跡発掘調査団組織

団 長	教育長	後藤一雄
副 団 長	教育次長	鈴木丈夫(昭和57年度)、田中敏夫(昭和58～60年度) 上野 渡(昭和61・62年度)
指 導 機 関		栃木県教育委員会文化課、栃木県立博物館、栃木県文化振興 事業団、文化庁記念物課(昭和61・62年度)
指 導 委 員	国士舘大学教授	大川 清
	早稲田大学教授	久保哲三
	市文化財保護委員	埴 静夫、小堀時蔵、大金宣亮、橋本澄朗
事 務 局 長	社会教育課長	半田 昭(昭和57年度)、加藤悦夫(昭和58～60年度) 塚田隆一(昭和61・62年度)
事務局長補佐	社規教育課長補佐	河越昌司(昭和61・62年度)
事務局次長	文化振興係長	安達光政(昭和57・58年度)、小林錦一(昭和59・60年度)
事務局員	文化振興係	定岡明義、木村光男(昭和57・58年度)、手塚英男、梁木誠、 阿部信弘(昭和59・60年度)、小松俊雄・大塚雅之・赤石澤 亮・神野安伸(昭和61・62年度)
調 査 員 補	市文化財調査員	松本笑悦
	本遺跡調査員	大塚雅之(昭和57年度)、金田信夫、中田秀幸(昭和57年 度)、富川 務(昭和58年度)、津布菜一樹・矢板真雄・河 越清美(昭和61・62年度)
調査補助員	安生ミカ、池田友保、大塚 清、川津ミツエ、小林ミキ、小林マサ、小松寛雄、斎藤 イク、佐藤光子、島崎熊夫、半沢ミネ、福田カネ、福田貴久栄、福田タイ、福田タエ、 堀田一夫、松本恵美子、松本和子、松本トシ、松本トリ、味野和テツ、味野和紀子、 森ヒロ子、谷中一郎、山崎トキ、吉澤良助、吉澤キミイ、渡辺フミ	
整理作業員	上野とも子、金田信夫、中田秀幸、大森八重子、大野節子、鈴木芳子、福田貴久栄、 樋口静子、鈴木道子、賀来孝代、横堀 聡、君島朱美、岡田有希子、大澤順子、齊 藤しのぶ、倉田有子、小林順子、中山真理	

凡 例

- 1 挿図の遺構実測図縮尺は、原則として竪穴住居跡を1/60とし、その他大きさに応じて適宜縮尺
を変えた。また遺物実測図縮尺は、原則として土器は1/3、石器及び玉類は大きさに応じて2/3、
1/2、1/3とした。
- 2 遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。
ローム：L、ローム粒：LR、ロームブロック：LB、鹿沼パミス：KP、炭化物：C
- 3 竪穴住居跡平面図の網掛けは焼土を示す。
- 4 胎土に繊維を含まない土器は、番号の上に○印を付した。

目 次

- ・巻頭カラー図版
- ・発刊にあたって
- ・例言、凡例

第1章 経緯と環境

1 調査の経緯

- (1) 調査に至るまでの経過 1
- (2) 調査の経過 2
- (3) 保存整備の経過 5

2 立地と環境

- (1) 遺跡の立地 7
- (2) 周辺の遺跡 8

第2章 発見された遺構と遺物

1 集落跡の様相

- (1) 集落跡の立地と形状 13
- (2) 住居・建物跡の種類と特徴 13

2 竪穴住居跡..... 19

J1号竪穴住居跡/J2号竪穴住居跡/J4号竪穴住居跡/J5号竪穴住居跡/J6号竪穴住居跡/J7号竪穴住居跡/J8号竪穴住居跡/J10号竪穴住居跡/J11号竪穴住居跡/J12号竪穴住居跡/J13号竪穴住居跡/J14号竪穴住居跡/J15号竪穴住居跡/J16号竪穴住居跡/J17号竪穴住居跡/J18号竪穴住居跡/J20号竪穴住居跡/J21号竪穴住居跡/J22号竪穴住居跡/J23号竪穴住居跡/J24号竪穴住居跡/J25号竪穴住居跡/J26号竪穴住居跡/J27号竪穴住居跡/J28号竪穴住居跡/J29号竪穴住居跡/J30号竪穴住居跡/

3 長方形大型建物跡..... 133

1号長方形大型建物跡/2号長方形大型建物跡/16号長方形大型建物跡/3号長方形大型建物跡/4号長方形大型建物跡/5号長方形大型建物跡/6号長方形大型建物跡/7号長方形大型建物跡/8号長方形大型建物跡/9号長方形大型建物跡/10号長方形大型建物跡/11号長方形大型建物跡/12号長方形大型建物跡/13号長方形大型建物跡/14号長方形大型建物跡/15号長方形大型建物跡

4	方形建物跡	140
	1号方形建物跡/2号方形建物跡/3号方形建物跡/4号方形建物跡/5号方形建物跡/ 6号方形建物跡/7号方形建物跡/8号方形建物跡/9号方形建物跡/10・11号方形建 物跡	
5	掘立柱建物跡	144
	J1号掘立柱建物跡/J2号掘立柱建物跡/J3号掘立柱建物跡/J4号掘立柱建物跡/J 5号掘立柱建物跡/J6号掘立柱建物跡/J7号掘立柱建物跡/J8号掘立柱建物跡/J9 号掘立柱建物跡/J10号掘立柱建物跡/J11号掘立柱建物跡/J12号掘立柱建物跡/J 13号掘立柱建物跡/J14号掘立柱建物跡/J15号掘立柱建物跡/J16号掘立柱建物跡/ J17号掘立柱建物跡/J18号掘立柱建物跡	
6	墓坑・土坑	
	(1) 墓坑	182
	(2) 土坑	188
7	落とし穴状土坑	191
8	遺構外の出土遺物	215
第3章 まとめ		
1	出土土器について	243
2	遺構について	246
3	集落の変遷について	252
付 編		
	宇都宮市根古谷台遺跡試料材(炭化木材) 同定およびリン・カルシウム分析報告 バリノ・サーヴェイ株式会社	255
	宇都宮市根古谷台遺跡試料材 ¹⁴ C年代測定報告 バリノ・サーヴェイ株式会社	260
	宇都宮市根古谷台遺跡出土土類の科学分析結果について （※第四紀地質研究所 所長 井上 巖	261

插图目次

第1图	道跡位置図	1	第51图	J 8号竪穴住居跡出土土器	78
第2图	聖山公園道跡-根古谷道跡道跡配置図	3	第52图	J 10号竪穴住居跡出土土器(1)	79
第3图	うつのみや道跡の広場鳥瞰図	6	第53图	J 10号竪穴住居跡出土土器(2)	80
第4图	宇都宮市周辺の地形区分	7	第54图	J 10号竪穴住居跡出土土器(3)	81
第5图	周辺の縄文道跡	9	第55图	J 11号竪穴住居跡出土土器	82
第6图	根古谷台道跡道跡配置図	15-16	第56图	J 12号竪穴住居跡出土土器	83
第7图	根古谷台道跡縄文時代以降配置図	17-18	第57图	J 16号竪穴住居跡出土土器(1)	84
第8图	J 1号竪穴住居跡平面・断面図	44	第58图	J 16号竪穴住居跡出土土器(2)	85
第9图	J 2号竪穴住居跡平面・断面図	45	第59图	J 13号竪穴住居跡出土土器	85
第10图	J 4号竪穴住居跡平面・断面図	46	第60图	J 14号竪穴住居跡出土土器	85
第11图	J 5号竪穴住居跡平面・断面図	47	第61图	J 17号竪穴住居跡出土土器	86
第12图	J 5号竪穴住居跡断面図	48	第62图	J 18号竪穴住居跡出土土器	86
第13图	J 5号竪穴住居跡変遷図	49	第63图	J 21号竪穴住居跡出土土器	86
第14图	J 6号竪穴住居跡平面・断面図	50	第64图	J 20号竪穴住居跡出土土器(1)	87
第15图	J 7号竪穴住居跡平面・断面図	51	第65图	J 20号竪穴住居跡出土土器(2)	88
第16图	J 7号竪穴住居跡断面図	52	第66图	J 20号竪穴住居跡出土土器(3)	89
第17图	J 8号竪穴住居跡平面・断面図	52	第67图	J 20号竪穴住居跡出土土器(4)	90
第18图	J 8号竪穴住居跡断面図	53	第68图	J 20号竪穴住居跡出土土器(5)	91
第19图	J 10号竪穴住居跡平面・断面図	54	第69图	J 20号竪穴住居跡出土土器(6)	92
第20图	J 10号竪穴住居跡断面図	55	第70图	J 20号竪穴住居跡出土土器(7)	93
第21图	J 11号竪穴住居跡平面図	56	第71图	J 22号竪穴住居跡出土土器(1)	93
第22图	J 11号竪穴住居跡断面図	57	第72图	J 22号竪穴住居跡出土土器(2)	94
第23图	J 12-13号竪穴住居跡平面・断面図	58	第73图	J 23号竪穴住居跡出土土器(1)	95
第24图	J 12-13号竪穴住居跡断面図	59	第74图	J 23号竪穴住居跡出土土器(2)	96
第25图	J 14号竪穴住居跡平面・断面図	60	第75图	J 24号竪穴住居跡出土土器(1)	97
第26图	J 15号竪穴住居跡平面・断面図	60	第76图	J 24号竪穴住居跡出土土器(2)	98
第27图	J 16号竪穴住居跡平面・断面図	61	第77图	J 24号竪穴住居跡出土土器(3)	99
第28图	J 17号竪穴住居跡平面・断面図	62	第78图	J 25号竪穴住居跡出土土器(1)	100
第29图	J 17号竪穴住居跡断面図	63	第79图	J 25号竪穴住居跡出土土器(2)	101
第30图	J 18号竪穴住居跡平面・断面図	64	第80图	J 26号竪穴住居跡出土土器	102
第31图	J 20-21号竪穴住居跡平面・断面図	65	第81图	J 27号竪穴住居跡出土土器	102
第32图	J 20-21号竪穴住居跡断面図・J 20号竪穴住居跡 断面図	66	第82图	J 28号竪穴住居跡出土土器	102
第33图	J 22-23号竪穴住居跡平面・断面図	67	第83图	J 29号竪穴住居跡出土土器	102
第34图	J 20-21号竪穴住居跡断面図	68	第84图	J 1号竪穴住居跡出土土器	103
第35图	J 24号竪穴住居跡平面・断面図	69	第85图	J 2号竪穴住居跡出土土器	103
第36图	J 24号竪穴住居跡断面図	70	第86图	J 4号竪穴住居跡出土土器	104
第37图	J 26号竪穴住居跡平面・断面図	70	第87图	J 5号竪穴住居跡出土土器(1)	105
第38图	J 25号竪穴住居跡平面・断面図	71	第88图	J 5号竪穴住居跡出土土器(2)	106
第39图	J 27号竪穴住居跡平面・断面図	72	第89图	J 5号竪穴住居跡出土土器(3)	107
第40图	J 28号竪穴住居跡平面・断面図	72	第90图	J 6号竪穴住居跡出土土器	108
第41图	J 29号竪穴住居跡平面・断面図	72	第91图	J 7号竪穴住居跡出土土器	109
第42图	J 30号竪穴住居跡平面・断面図	72	第92图	J 8号竪穴住居跡出土土器(1)	110
第43图	J 1号竪穴住居跡出土土器	73	第93图	J 8号竪穴住居跡出土土器(2)	111
第44图	J 2号竪穴住居跡出土土器	73	第94图	J 5号竪穴住居跡出土土器(4)	111
第45图	J 4号竪穴住居跡出土土器	73	第95图	J 10号竪穴住居跡出土土器(1)	112
第46图	J 5号竪穴住居跡出土土器(1)	74	第96图	J 10号竪穴住居跡出土土器(2)	113
第47图	J 5号竪穴住居跡出土土器(2)	75	第97图	J 11号竪穴住居跡出土土器(1)	114
第48图	J 6号竪穴住居跡出土土器(1)	76	第98图	J 12号竪穴住居跡出土土器(1)	115
第49图	J 6号竪穴住居跡出土土器(2)	77	第99图	J 12号竪穴住居跡出土土器(2)	116
第50图	J 7号竪穴住居跡出土土器	78	第100图	J 16号竪穴住居跡出土土器	117
			第101图	J 17号竪穴住居跡出土土器(1)	118

第102図	J11号竪穴住居跡出土石器(2)	119	第155図	掘立柱建物跡出土石器	179
第103図	J13号竪穴住居跡出土石器	119	第156図	1号方形建物跡出土石器	180
第104図	J15号竪穴住居跡出土石器	119	第157図	長方形大型建物跡出土石器	180
第105図	J17号竪穴住居跡出土石器(2)	119	第158図	1号方形建物跡出土石器	181
第106図	J18号竪穴住居跡出土石器	120	第159図	掘立柱建物跡出土石器	181
第107図	J20号竪穴住居跡出土石器(1)	121	第160図	広場北西隅の竪坑群	183
第108図	J20号竪穴住居跡出土石器(2)	122	第161図	100-101-114-117号竪坑玉類等出土状況	184
第109図	J22号竪穴住居跡出土石器	123	第162図	101号竪坑出土玉類	186
第110図	J23号竪穴住居跡出土石器(1)	124	第163図	114号竪坑出土玉類	186
第111図	J23号竪穴住居跡出土石器(2)	125	第164図	100号竪坑出土夾状耳飾	187
第112図	J23号竪穴住居跡出土石器(3)	126	第165図	117号竪坑出土夾状耳飾	187
第113図	J24号竪穴住居跡出土石器	127	第166図	114号竪坑出土土甌	187
第114図	J21号竪穴住居跡出土石器	127	第167図	竪坑出土石器	187
第115図	J28号竪穴住居跡出土石器	127	第168図	広場北西部の土坑群	197
第116図	J29号竪穴住居跡出土石器	127	第169図	土坑平面・断面図(1)	198
第117図	J30号竪穴住居跡出土石器	127	第170図	土坑平面・断面図(2)	199
第118図	J25号竪穴住居跡出土石器	128	第171図	土坑平面・断面図(3)	200
第119図	J26号竪穴住居跡出土石器	128	第172図	土坑平面・断面図(4)	201
第120図	1-2-16号長方形大型建物跡断面図	150	第173図	土坑平面・断面図(5)	202
第121図	1-2-16号長方形大型建物跡断面図	151	第174図	土坑平面・断面図(6)	203
第122図	3号長方形大型建物跡平面・断面図	152	第175図	土坑平面・断面図(7)	204
第123図	4号長方形大型建物跡平面・断面図	153	第176図	土坑平面・断面図(8)	205
第124図	5~9号長方形大型建物跡平面	154	第177図	土坑平面・断面図(9)	206
第125図	5~9号長方形大型建物跡断面図	155	第178図	藩とし穴土坑平面・断面図(1)	207
第126図	10~12号長方形大型建物跡平面	156	第179図	藩とし穴土坑平面・断面図(2)	208
第127図	10~12号長方形大型建物跡断面図	157	第180図	土坑出土石器(1)	209
第128図	13~15号長方形大型建物跡平面	158	第181図	土坑出土石器(2)	210
第129図	13~15号長方形大型建物跡断面図	159	第182図	土坑出土石器(3)	211
第130図	1号方形建物跡平面・断面図	160	第183図	土坑出土石器(1)	212
第131図	2-5号方形建物跡平面・断面図	161	第184図	土坑出土石器(2)	213
第132図	3号方形建物跡平面・断面図	162	第185図	土坑出土石器(3)	214
第133図	4号方形建物跡平面・断面図	163	第186図	遺構外出土石器(1)	216
第134図	6号方形建物跡平面・断面図	164	第187図	遺構外出土石器(2)	217
第135図	7-8号方形建物跡平面・断面図	165	第188図	遺構外出土石器(3)	218
第136図	10-11号方形建物跡平面・断面図	165	第189図	遺構外出土石器(4)	219
第137図	9号方形建物跡平面・断面図	166	第190図	遺構外出土石器(5)	220
第138図	J1号掘立柱建物跡平面・断面図	167	第191図	遺構外出土石器(6)	221
第139図	J2号掘立柱建物跡平面・断面図	168	第192図	遺構外出土石器(7)	222
第140図	J3号掘立柱建物跡平面・断面図	169	第193図	遺構外出土石器(8)	223
第141図	J4~7号掘立柱建物跡平面	170	第194図	遺構外出土石器(9)	224
第142図	J4~7号掘立柱建物跡断面図	171	第195図	遺構外出土石器(10)	225
第143図	J8号掘立柱建物跡平面・断面図	172	第196図	遺構外出土石器(11)	226
第144図	J9号掘立柱建物跡平面・断面図	173	第197図	遺構外出土石器(12)	227
第145図	J10-19号掘立柱建物跡平面・断面図	174	第198図	遺構外出土石器(13)	228
第146図	J11号掘立柱建物跡平面・断面図	175	第199図	遺構外出土石器(14)	229
第147図	J12号掘立柱建物跡平面・断面図	175	第200図	遺構外出土石器(15)	230
第148図	J13号掘立柱建物跡平面・断面図	176	第201図	遺構外出土石器(16)	231
第149図	J14号掘立柱建物跡平面・断面図	176	第202図	遺構外出土石器(17)	232
第150図	J15号掘立柱建物跡平面・断面図	177	第203図	遺構外出土石器(18)	233
第151図	J16号掘立柱建物跡平面・断面図	177	第204図	遺構外出土石器(19)	234
第152図	J17号掘立柱建物跡平面・断面図	178	第205図	遺構外出土石器(20)	235
第153図	J18号掘立柱建物跡平面・断面図	178	第206図	遺構外出土石器(21)	236
第154図	長方形大型建物跡出土石器	179	第207図	遺構外出土石器(22)	237

第208図	遺構外出土石器(23)	238
第209図	遺構外出土石器(24)	239
第210図	根古谷台遺跡の竪穴住居跡	248
第211図	根古谷台遺跡の建物跡	248

第212図	栃木県内の縄文前期住居跡	248
第213図	根古谷台遺跡環状集落想定図	252
第214図	根古谷台遺跡遺構重複関係図	253

表 目 次

第1表	聖山公園遺跡・根古谷台遺跡の年次別調査内容	2	第25表	J25号竪穴住居跡出土石器計測表	132
第2表	周辺の縄文遺跡(1)	10	第26表	J26号竪穴住居跡出土石器計測表	132
第3表	周辺の縄文遺跡(2)	11	第27表	J28号竪穴住居跡出土石器計測表	132
第4表	周辺の縄文遺跡(3)	12	第28表	J29号竪穴住居跡出土石器計測表	132
第5表	J1号竪穴住居跡出土石器計測表	129	第29表	J30号竪穴住居跡出土石器計測表	132
第6表	J2号竪穴住居跡出土石器計測表	129	第30表	長方形大型建物跡出土石器計測表	180
第7表	J4号竪穴住居跡出土石器計測表	129	第31表	1号方形建物跡出土石器計測表	180
第8表	J5号竪穴住居跡出土石器計測表	129	第32表	掘立柱建物跡出土石器計測表	180
第9表	J6号竪穴住居跡出土石器計測表	129	第33表	墓坑出土遺物一覽表	180
第10表	J7号竪穴住居跡出土石器計測表	129	第34表	土坑一覽表(1)	192
第11表	J8号竪穴住居跡出土石器計測表	130	第35表	土坑一覽表(2)	193
第12表	J10号竪穴住居跡出土石器計測表	130	第36表	土坑一覽表(3)	194
第13表	J11号竪穴住居跡出土石器計測表	130	第37表	土坑一覽表(4)	195
第14表	J12号竪穴住居跡出土石器計測表	130	第38表	土坑出土石器計測表	213
第15表	J13号竪穴住居跡出土石器計測表	130	第39表	遺構外出土石器計測表(1)	239
第16表	J15号竪穴住居跡出土石器計測表	131	第40表	遺構外出土石器計測表(2)	240
第17表	J16号竪穴住居跡出土石器計測表	131	第41表	遺構外出土石器計測表(3)	241
第18表	J17号竪穴住居跡出土石器計測表	131	第42表	根古谷遺跡出土縄文土器分類別出土点数	243
第19表	J18号竪穴住居跡出土石器計測表	131	第43表	根古谷台遺跡竪穴住居跡一覽	246
第20表	J20号竪穴住居跡出土石器計測表	131	第44表	根古谷台遺跡方形建物跡一覽	248
第21表	J21号竪穴住居跡出土石器計測表	131	第45表	根古谷台遺跡掘立柱建物跡一覽	249
第22表	J22号竪穴住居跡出土石器計測表	132	第46表	根古谷台遺跡長方形大型建物跡一覽	248
第23表	J23号竪穴住居跡出土石器計測表	132	第47表	根古谷台遺跡方形建物跡一覽	249
第24表	J24号竪穴住居跡出土石器計測表	132	第48表	根古谷台遺跡掘立柱建物跡一覽	250

図 版 目 次

PL1	①遺跡全景(北上空から) ②遺跡全景(南東上空から)	PL7	①J12号竪穴住居跡・炉 ②J13号竪穴住居跡(東から) ③J16号竪穴住居跡(東から) ④J16号竪穴住居跡・炉 ⑤J17号竪穴住居跡(西から、右手前は1号方形建物跡、奥はJ16号竪穴住居跡)
PL2	①遺跡全景(北西上空から) ②遺跡全景(西上空から)	PL8	①J20・21号竪穴住居跡(南東から) ②J20号竪穴住居跡(南東から) ③J20号竪穴住居跡・炉④J21号竪穴住居跡・土器出土状況 ⑤J22号竪穴住居跡(北西から)
PL3	①遺跡全景(上空から) ②遺跡全景(北から)	PL9	①J22～26号竪穴住居跡(北から) ②J23号竪穴住居跡(南から)
PL4	①J1号竪穴住居跡(南から) ②J1号竪穴住居跡・炉 ③J2号竪穴住居跡(南から) ④J2号竪穴住居跡・炉 ⑤J4号竪穴住居跡(西から) ⑥J4号竪穴住居跡・炉 ⑦J7号竪穴住居跡(東から) ⑧J7号竪穴住居跡・炉	PL10	①J23号竪穴住居跡・床確認状況(南から) ②J23号竪穴住居跡・壁溝(南西隅付近) ③J25号竪穴住居跡・土器出土状況 ④J23号竪穴住居跡・土器出土状況 ⑤J24号竪穴住居跡(北東から)
PL5	①J5号竪穴住居跡と遺跡全景(北から) ②J5号竪穴住居跡(南西から) ③J5号竪穴住居跡・柱穴断面④J6号竪穴住居跡(南西から) ⑤J6号竪穴住居跡・遺物出土状況	PL11	①J24号竪穴住居跡・調査風景 ②J24号竪穴住居跡・炉 ③J25号竪穴住居跡(北東から) ④J25号竪穴住居跡・炉 ⑤J26号竪穴住居跡(北から)
PL6	①J8号竪穴住居跡(西から) ②J10号竪穴住居跡(北から) ③J11号竪穴住居跡(西から) ④J18号竪穴住居跡(東から) ⑤J12号竪穴住居跡(東から)		

- ⑥J28号竪穴住居跡(北から) ⑦J29号竪穴住居跡(南東から) ⑧J30号竪穴住居跡(南から)
 PL12 ①1・2・16号長方形大型建物跡(南東から) ②1号長方形大型建物跡他調査風景(北西から) ③1号長方形大型建物跡柱配置(南東から) ④1号長方形大型建物跡・柱穴断面 ⑤2号長方形大型建物跡・柱穴断面
 PL13 ①3・4号長方形大型建物跡(北西から) ②3・4号長方形大型建物跡(南東から) ③3号長方形大型建物跡・柱穴断面 ④5号長方形大型建物跡(北西から) ⑤5号長方形大型建物跡・柱穴断面
 PL14 ①5～7号長方形大型建物跡(北西から) ②10・11号長方形大型建物跡(北西から)
 PL15 ①9号長方形大型建物跡(北西から) ②13号長方形大型建物跡・柱穴 ③13・14号長方形大型建物跡確認(東から) ④13・14号長方形大型建物跡確認(東から) ⑤1号方形建物跡(北西から)
 PL16 ①1号方形建物跡とその周辺(北から) ②3号方形建物跡(南から) ③4号方形建物跡(東から) ④6号方形建物跡(南西から) ⑤J4～7号竪立柱建物跡(西から)
 PL17 ①広場北西側の墓坑群(南東から) ②100号墓坑(北から) ③100号墓坑・袂状耳飾出土状況 ④117号墓坑(東から) ⑤117号墓坑・袂状耳飾出土状況
 PL18 ①101号墓坑・玉類出土状況(南から) ②114号墓坑・玉類出土状況(南から)
 PL19 ①101号墓坑・玉類出土状況 ②114号墓坑・玉類出土状況 ③104号墓坑(南西から) ④104号墓坑・石匙出土状況 ⑤106号墓坑(南西から) ⑥106号墓坑・石匙出土状況 ⑦110号墓坑(南から) ⑧110号墓坑・石匙出土状況
 PL20 ①103号墓坑(南から) ②108号墓坑(南西から) ③115号墓坑(南西から) ④116号墓坑(南から) ⑤広場北西部の土坑群(西から)
 PL21 ①広場内の土坑群・150～160号土坑(南東から) ②広場内の土坑群・170～180号土坑(東から)
 PL22 ①118号土坑(南から) ②123号土坑(南東から) ③160号土坑(南から) ④201号土坑(南東から) ⑤160号土坑(南から) ⑥77号土坑(南東から) ⑦78号土坑(南西から) ⑧87号土坑(南から)
 PL23 ①墓坑出土袂状耳飾(上:100号墓坑、下:117号墓坑) ②101号墓坑出土玉類
 PL24 ①114号墓坑出土玉類・石匙 ②広場北西側の墓坑群出土石器
 PL25 竪穴住居跡出土器(1)
 PL26 竪穴住居跡出土器(2)
 PL27 竪穴住居跡出土器(3)
 PL28 竪穴住居跡出土器(4)
 PL29 竪穴住居跡出土器(5)
 PL30 竪穴住居跡出土器(6)
 PL31 ①J13号竪立柱建物跡出土土器 ②89号土坑出土器 ③J5号竪穴住居跡出土土器(1) ④J5号竪穴住居跡出土土器(2) ⑤J6号竪穴住居跡出土土器 ⑥J11号竪穴住居跡出土土器 ⑦J10号竪穴住居跡出土土器(1) ⑧J10号竪穴住居跡出土土器(2)
 PL32 ①J12号竪穴住居跡出土土器 ②J16号竪穴住居跡出土土器 ③J20号竪穴住居跡出土土器 ④J22号竪穴住居跡出土土器 ⑤J23号竪穴住居跡出土土器 ⑥J24号竪穴住居跡出土土器 ⑦建物跡出土土器 ⑧土坑出土土器
 PL33 竪穴住居跡及び土坑出土土器(石鏃)
 PL34 ①竪穴住居跡・建物跡及び土坑出土土器(石匙等) ②竪穴住居跡出土土器(磨石・凹石類)
 PL35 竪穴住居跡出土土器(磨石・凹石類)
 PL36 ①建物跡出土土器(磨石・凹石類) ②土坑出土土器(磨石・凹石類) ③J23号竪穴住居跡出土土器(石皿・磨石) ④J4号竪立柱建物跡出土土器(石皿)
 PL37 遺構外出土土器(石槍・石鏃)
 PL38 遺構外出土土器(石鏃・石匙)
 PL39 遺構外出土土器(磨石・凹石類)
 PL40 ①遺構外出土土器(磨石・凹石類) ②遺構外出土土器(打製石斧) ③遺構外出土土器(台石等)

第1章 経緯と環境

1 調査の経緯

(1) 調査に至るまでの経過

宇都宮市は、増大する市民の墓地需要に応えるため、昭和39年3月、市北西部の丘陵地に大規模市営霊園として北山霊園を開設した。しかし、その後の経済発展・人口増加等に伴い、市民の墓地需要はますます拡大し、昭和50年代に入るとこの北山霊園も飽和状態となり、市営第2霊園墓地造成計画が浮上することとなった。その結果、最終的に選定されたのが、今回報告する「根古谷台遺跡」を含む市西部上欠町の台地であった。

昭和55年、市建設部局よりこの具体的な造成計画が提示されたのを受け、本教育委員会としては、文化財保護の立場から、以下のような協議を進めてきた。

昭和55年8月 霊園墓地造成計画の地元説明会に前後して、市教育委員会は予定地内の遺跡所在調査を改めて実施し、これをもとに遺跡保存のための庁内協議を進めた。

昭和56年8月 造成計画の具体化、即ち遺跡地への開発が確定的となる中で、「埋蔵文化財の保護と開発に関する基本方向」(宇都宮市教育委員会)を定め、現状保存等の方策をさらに検討した。



第1図 遺跡位置図

- 11月 発掘調査は宇都宮市教育委員会の直営事業として行うこととなり、発掘調査計画策定のための教育委員会独自の現地確認調査を行った。
- 12月 栃木県教育委員会より、遺跡保存及び発掘調査計画策定のための指導を受けた。
- 昭和57年 2月 文化財保護法第57条の3の規定に基づく工事等による埋蔵文化財発掘通知書を提出した。
- 3月 遺跡保存及び発掘調査計画の検討案について学識経験者の指導を受けた。
- 4月 ・発掘調査を担当する新規職員を配置するとともに、事務局体制を整備し、詳細実施計画の策定に着手した。
- ・文化財保護法第98条の2の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知書を提出した。
 - ・埋蔵文化財発掘調査に係わる危険防止対策要綱を定めた。
 - ・外部の指導委員、指導機関等も含めた発掘調査団を組織した。

以上の経過により発掘調査による記録保存のやむなきに至ったが、造成計画においては遺跡活用広場の設置や現状保存地区の拡大などの成果も得られた。なお、造成計画地内（約16ha）には峰台遺跡・峰坪古墳・將軍塚古墳等、複数遺跡が確認されていたが、聖園墓地の名称が「聖山公園」と決定していたことから、当初はこれを遺跡名として調査を進めることとした。

(2) 調査の経過

発掘調査開始にあたっては、遺跡の残存状況等を改めて確認するとともに具体的な造成工事との照合を行い、約6haを調査対象面積とすることとした。発掘調査は造成計画に先行する形で5カ年計画とし、昭和57年4月に着手した。調査経過の全体概要は第1表に示したとおりであるが、最終第5次調査が本報告に係わる根古谷台地区で、遺跡の密度が高いことから2年間を要したものである。

第1表 聖山公園遺跡・根古谷台遺跡の年次別調査内容

調査回数(年度)	調査面積	主な調査内容
第1次調査(昭和57年度)	約1ha	古墳時代後期の竪穴住居跡9軒、土坑敷基、円墳2基及び経塚3基等を調査
第2次調査(昭和58年度)	約8,000㎡	古墳時代後期の竪穴住居跡13軒、土坑5基、溝等を調査
第3次調査(昭和59年度)	約1ha	縄文時代前期の竪穴住居跡3軒、古墳時代後期の竪穴住居跡4軒・円墳1基及び奈良時代の竪穴住居跡4軒等を調査
第4次調査(昭和60年度)	約8,000㎡	古墳時代後期の竪穴住居跡8軒、円墳1基、土坑等を調査
第5次調査(昭和61～62年度)	約8,500㎡	縄文時代前期の竪穴住居跡27軒、長方形大型建物跡15棟、方形建物跡10棟、掘立柱建物跡18棟、土坑340基及び奈良時代の竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡17棟等を調査

第5次調査(根古谷台遺跡)の経過

調査対象地は現状保存した將軍塚古墳の南東側で、墓地造成予定地の最終区画にあたる部分である。結果的には、縄文時代前期の重要集落跡であることから国指定史跡として保存された地区であり、遺跡名称も聖山公園遺跡から切り離し、小字名から「根古谷台遺跡」としたものである。

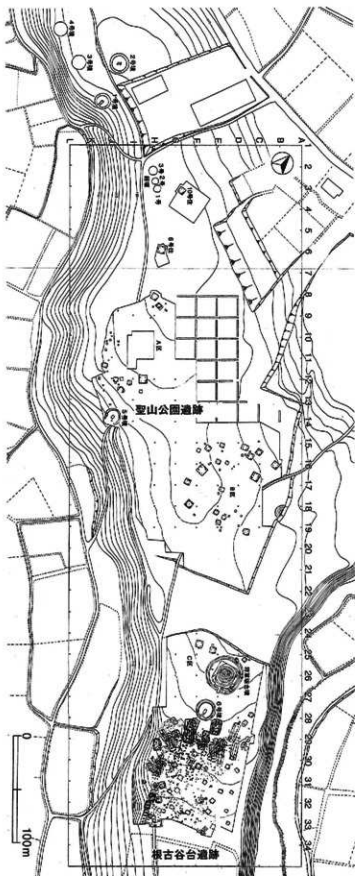
さて本地区に関しては、第3次調査内で実施した外周道路建設に伴う調査により、縄文時代前期と奈良時代の複合集落跡であることが分かっていた。近隣遺跡の調査状況等からは、いずれの時期にしても小規模な集落跡であろうと想定されたことから、最終年次もほぼ予定どおり終了するものと思われた。しかし実際に調査に入ってみると、縄文時代前期の大規模集落跡にあまっていること

が徐々に明らかになり、最終的には約1年間調査を延長する結果となった。以下、この間の調査状況等を時系列でまとめておくことにしたい。

昭和61年4月 奈良時代の遺構の確認。前年度あらかじめ入れたトレンチの土層観察状況や第3次調査の外周道路部分の調査経験等から、表土から黒褐色土層までは重機で排土した。この時点で、竈を有した竪穴住居跡の平面プランがぼんやりと現れたが、さらにプランを明瞭にする必要があることや周辺には掘立柱建物跡が相当数あるものとみられたことなどから、暗褐色土層中位まで手掘りで下げ遺構の確認にあたった。なお、この段階で縄文時代前期の礫群（中央広場の墓坑群）や大型竪穴住居跡の平面プラン等がうっすらと現れていた。

昭和61年5～7月中旬 奈良時代集落跡の調査。竪穴住居跡12軒に関しては、小規模で重複もなかったことから順調に掘り進むことができた。ただし、掘立柱建物跡に関しては、17棟と軒数が多く、重複もみられたことから、建物規模や柱間配置の見極めに予想以上の時間を費やした。なお、この奈良時代の遺構調査を進める中で、縄文土器片や礫の流入がかなり確認され、縄文時代前期の集落跡が広範囲に展開している様相を把握することができた。

昭和61年7月下旬～8月 縄文時代前期の遺構確認。奈良時代の集落跡の調査がほぼ完了するのと前後して、縄文時代前期遺構の確認作業に入った。



第2図 聖山公園遺跡・根古谷台遺跡遺構配置図

奈良時代の確認面のままでは明瞭さに欠けることから、調査区全体を黄褐色土層（ソフトローム）上面まで掘り下げることにした。この結果、縄文時代前期の遺構群が次第に明らかとなり、集落跡は調査区全体に広がるとともに、竪穴住居跡だけでも20数軒以上に及ぶことが確実となった。この時点で、年度内の発掘調査終了はかなり難しい状況となった。

昭和61年9月～10月 竪穴住居跡の調査。平面プランの確認が最も速かった大型の竪穴住居跡（J5号）から調査を開始した。当初、2～3軒が重複しているものとみられたが、ある程度掘り進めた段階で1軒の超大型の竪穴であることが判明した。さらに床面からは、繰り返して建て替えられたことを物語る大小300本以上の柱穴が確認され、組み合わせを見極めながらの調査はかなり難航した。並行して数軒の竪穴住居跡の調査を進めたが、いずれも大なり小なり建て替え痕がみられ、1軒を掘り上げるのにかなりの時間を要することを痛感した。

昭和61年11月～12月 長方形大型建物跡の確認。竪穴住居跡周辺には相当数の土坑があることは分かっていたが、調査の手順としては竪穴住居跡を先に片付けようと考えていた。そこで超大型のJ5号住居跡が一段落した後、主力を1軒となりの比較的大型の竪穴住居跡（J11号）の調査に注いだ。ところが、この住居跡の覆土を中層位まで下げた段階で、やや大きめの柱穴状の平面プランがいくつか現れた。当初、この住居跡の柱穴かとも考えたが、確認面が覆土中であることに加え、住居方向と並びが少しずれることなどが気になった。そこで、あるいは周囲で確認されている土坑と関連するのではないかということから、J11号住居跡の調査を中断し、周辺の確認作業を進めた。

その結果、徐々にではあるが、土坑どうしに一定の繋がりがあらしめることが見えてきたため、これらに切られているという想定のもと、J11号住居跡の調査を再会した。結果的にはこのことが功を奏し、床面近くまで下げた段階で、土坑群を取り囲むような細い溝状の遺構が、覆土を切って存在することに気付いた。再び周辺部にもどり、この溝状遺構の確認に努めたところ、思いがけない大きさの長方形を区画していることが判明した。さらにそれまで混沌としていた土坑群のうちのいくつか、この区画内で2列に並んでいる様子も確認され、1号長方形大型建物跡の認識へとつながった。



1号長方形大型建物跡の確認状況

昭和62年1月～3月 縄文時代前期集落跡の確認。新たな遺構の認識等に時間がかかったこともあり、この時点で調査は来年度（平成62年度）まで延長することに決定した。さらに、長方形大型建物跡の確認を契機として平面における遺構認定作業の重要性が生じたことから、再度、調査地区全面に遺構確認のための整地作業を実施することとした。この結果、竪穴住居跡群に重なるような状況で、長方形大型建物跡あるいは掘立柱建物跡らしきものが相当数存在していることが判明した。さらにこれらの住居・建物跡群が中央の広場を囲むような形で配置している姿も徐々に明瞭となり、この段階で縄文時代前期の大規模で特色ある集落跡にあたったことが間違いないものとなった。

昭和62年4月～8月 住居・建物跡群の調査。集落跡の全体像が見えてきたところで、改めて調査方針を見直し、土坑が集中する広場内には最終段階で入ることとし、まずは住居・建物跡群の調

査を進めることとした。この間、長方形大型建物跡以外に方形建物跡・掘立柱建物跡という新たな遺構の認識もあり、この住居・建物跡群は堅穴住居跡と3種の建物跡で構成されていることが明らかとなった。しかもこれらがかかなり複雑に重複していたことから調査は難航したが、幸い出土遺物量が少なめだったことから、遺構調査に集中できたところもある。なお、西側緩斜面部に遺物等の捨て場があるのではないかということで確認のトレンチを入れたが、発見には至らなかった。

昭和62年9月 墓坑群の調査。住居・建物跡群の調査が一段落すると相前後して広場内の調査に着手した。春の遺構確認作業の段階で、この広場内には300基を超える土坑が存在することが分かっていたが、改めて精査の上遺構番号を付し、集中度の高い北西部一画の土坑群から調査を開始した。本集落跡は遺構の規模やその種類の多さのわりには出土遺物が貧弱であるという印象が強かったため、土坑についても同様であろうと考えていた。ところがこの土坑群の調査に入った途端、複数の土坑から瑛状耳飾りや管玉・丸玉といった貴重な玉類が出土し、縄文時代前期の墓坑群であることが明らかとなった。他にも、副葬されたとみられる石器（石匙や石鏃）を出土する土坑もいくつかみられ、調査もより慎重に進めざるを得なくなった。なおこの発見を契機に、本集落跡を国指定史跡として保存する動きが本格化した。



指導委員会による現地視察（墓坑群）

昭和62年10月～11月 広場の調査。この段階で遺跡の保存はほぼ確定的となった。

ただ、ここで広場内に残る多数の未調査土坑をどう取り扱うかが問題となった。まず大部分が墓坑であるとすれば調査も慎重とならざるを得ず、かなりの期間延長が必要となること。また、遺跡保存ということであれば、掘らずに残すことがある意味では最善であること。一方、すべてを掘らなければ一定の性格付けができない可能性があることなど。結局、様々な協議を重ねた結果、広場を十文字に分割してその四分の一に含まれる土坑を調査し、他は平面プランを図面に残すだけにとどめることとした。

昭和62年12月 遺物の取り上げ、測量図面作成等を終了。最後に遺跡保存のための作業として、遺構内を鹿沼土で埋め、その上全体を黒土で覆土した。

(3) 保存整備の経過

ア 国の史跡指定

本遺跡に関する保存協議が具体的に動き出したのは、縄文時代前期の大規模集落の全容がほぼ明らかにされた昭和62年8月以降であった。その主な経過を記すと以下のとおりである。

昭和62年8月4日 文化庁記念物課及び栃木県教育委員会による現地視察があり、現状保存の可能性について打診される。

同年 8月20日 遺跡の現状保存について本市関係各課（市民生活課・公園緑地課・道路建設課）と協議する。

同年 9月10日 市長・助役・教育長及び関係部課長が現地視察。現状保存の可能性が高まる。

- 同年 10月5日 発掘指導委員会議で遺跡の重要性が指摘され、現状保存が強く要望される。
- 同年 10月29日 文化庁記念物課及び栃木県教育委員会による現地視察が再度あり、国指定史跡の価値がある旨の評価を受ける。
- 同年 11月20日 遺跡の現状保存を決定し、霊園墓地造成計画を変更する。
- 同年 12月11日 国の史跡とすべく指定申請書を提出する。
- 昭和63年1月17日 遺跡の保存整備に関する考え方について本市関係各課（市民生活課・公園緑地課・建築課・設備課・財政課・事務管理課・企画審議室）と協議する。
- 同年 3月下旬 遺跡の保存整備基本構想（市教育委員会事務局案）をまとめる。
- 同年 5月17日 国の史跡として指定される。

イ 史跡公園として整備

国の指定史跡として保存が確定したことを受け、本市では昭和63年度から3か年計画で保存整備事業に取り組むこととし、基本計画策定にあたっては、昭和63年4月1日、文化庁・栃木県及び学識経験者からなる「遺跡の広場保存整備委員会」を設置した。数回に渡った委員会では、遺跡の性格付け・復原建物の在り方・活用方策等、様々な協議を重ねられ、以下のような基本計画が示された。

竪穴住居跡 本遺跡を構成する竪穴住居跡の代表例として、大型のJ5号と中型のJ10号の2軒を復原する。（実際の整備では大型のJ20号が追加され、3軒がとなった。）

長方形大型建物跡 長大で規格性の高いこの建物跡は、本遺跡の特殊性を最も良く示す建物跡である。広場から放射状に延びるような配置上の特色も考慮して1号・7号・12号・13号の4棟を選出し、最も規模の大きい1号を復原する。

この他、ウッドサークルの可能性もあるJ4号掘立柱建物跡・中央広場の景観・墓坑群などをレプリカや平面表示で整備するとともに、遺跡の詳しい解説や出土品の見学等ができるガイダンス施設を隣接地に設置することとした。

以上の基本計画に基づき、平成元年度から保存整備工事に着手し、平成3年3月に史跡公園「うつのみや遺跡の広場」として開園した。子供たちの歴史学習の場としてはもとより、市民の憩いの場としても活用され、現在に至っている。



第3図 うつのみや遺跡の広場鳥瞰図（基本計画より）

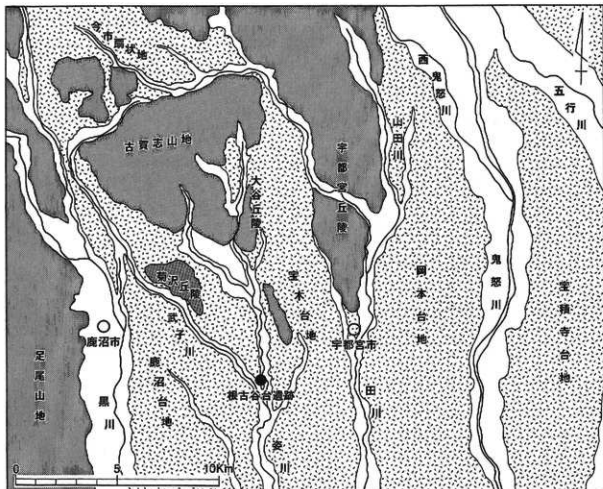
2 立地と環境

(1) 遺跡の立地

本遺跡は栃木県宇都宮市上欠町に所在する。宇都宮市の市街地から西南西に約5kmの地点にあり、西は鹿沼市に接している。一帯は水田耕作を中心とした農村地帯であるが、西方1.5kmには東北自動車鹿沼インターチェンジに直結した鹿沼工業団が控えているのに加え、東方1.5kmには近年宇都宮外環状線道路が整備され周辺開発が加速している。近隣では大型商業施設や大規模な住宅地造成も進行しており、都市化の波は着実に押し寄せてきていると言える。同町内においても道路・河川の整備や平地林の伐採等が進み、旧来の農村景観は大きく変わりつつある。

本遺跡が所在する宇都宮市は栃木県のほぼ中央部で、関東平野の北縁部に位置する。栃木県の地形は西部群馬県寄りの足尾山地、北部日光・那須に連なる帝釈山地、東部茨城県と接する八溝山地、そしてこれらに囲まれる中南部平地との大きく四つに区分することができる。本遺跡が立地するのはこの中南部平地の北部で、北東山間部から平野部への変換点付近である。本遺跡付近の標高は120m前後で、全体には北から南へと緩やかに傾斜している。

宇都宮市周辺の地形を細かく見ると、北東部は帝釈山地或いは足尾山地から伸びた丘陵地（宇都宮丘陵・大谷丘陵など）が形成され、それに続く南部には関東ロームに覆われた台地が発達している。さらにこの台地は南流する河川（黒川・婁川・田川・鬼怒川など）及び沖積低地によって区



第4図 宇都宮市周辺の地形区分

切られ、西から鹿沼台地・宝木台地・岡本台地・宝積寺台地と呼ばれている。本遺跡が立地するのはこのうち最も西に位置する鹿沼台地の東縁部で、姿川と武子川の合流点付近に形成された細長い舌状台地上である。姿川は北西の古賀志山地東麓に源を発し、大谷丘陵西麓部を抜けてほぼ南流している。現在はかなり改修されているが、かつては激しく蛇行する暴れ川で、三日月湖なども多く形成されていたようである。本遺跡が立地する舌状台地東縁部もこの蛇行によって大きく浸食を受けたものとみられる。一方古賀志山地の北西麓部に源を発する武子川は、菊沢丘陵の南西麓を抜けてながら鹿沼台地を横切るように流れ、本遺跡の南方約1kmの地点で姿川に合流している。なお姿川は、本遺跡より約20km南の下野市内で思川に合流、さらに思川は約20km南の泉南端で渡良瀬川に合流し、利根川を介して太平洋に注がれている。ただし、近世における利根川東遷改修以前は、直接東京湾に注いでいたものとみられる。

(2) 周辺の遺跡

第5図は、本遺跡周辺における縄文遺跡（複合遺跡も含め）の分布図である。姿川右岸の鹿沼台地は湧水点による開析谷が発達し、これらに沿って多数の縄文遺跡が確認されている。一方、左岸の宝木台地は市街化が進んでいることもあり、確認された遺跡数は少ないようである。確認された縄文遺跡の時期は、やはり中期が圧倒的に多数であるが、本遺跡と係わる前期も全体の3～4割程度と、一定数を占めている。ここでは、これら縄文前期遺跡の様相を、発掘調査されたものを中心に概観することとしたい。

下台原南遺跡(68)は本遺跡の南1.5km、鹿沼台地の東縁部に位置する。平成5年の道路建設に伴う発掘調査で、岡山式期の竪穴住居跡が2軒確認され、うち1軒は隅丸長方形(6.2×4.7m)の整った形態である。本遺跡北方1.8kmの上欠団地遺跡(34)は中期の大集落跡であるが、昭和62年、南端部の宅地造成に伴う調査で黒浜式期の竪穴住居跡(5.9×4.3m)1軒が確認されている。本遺跡の南南東2.0kmに位置する辻の内遺跡(67)は、姿川左岸での唯一の発掘調査例であるが、黒浜式期の小型(一辺3～4mの隅丸方形)な竪穴住居跡2軒が確認されている。本遺跡南西約4.0kmの稲荷塚遺跡(87)では、昭和58年の運転免許センター建設に伴う調査で、黒浜式期でも新しい段階とみられる竪穴住居跡2軒が確認されているが、規模はやはりいずれも小型(一辺3～4mの隅丸方形)である。このすぐ北に位置する鹿沼流通業務団地内遺跡(77)は、昭和59～62年の調査で明らかにされた遺跡である。前期前半から終末にかけての竪穴住居跡が11軒確認されているが、その内訳は黒浜式期が5軒、諸磯式期が3軒、浮島及び興津式期が2軒、十三善提式期が1軒である。このうち台地縁辺部においてまとまって確認された黒浜式期の4軒(いずれも小型な隅丸長方形もしくは隅丸方形の竪穴住居跡)は同時期とみられ、当時の集落の全体像を窺う上で貴重な調査例となっている。

以上が本遺跡周辺の縄文前期遺跡の概要である。発掘例は決して多いとは言えないが、中小型の竪穴住居跡を中心とした概ね数軒程度の集落が、一般的な在り方であったものと思われる。

(参考文献)

- (独)産業技術総合研究所・地質調査総合センター『宇都宮地域の地質』2010
- 宇都宮市教育委員会『宇都宮市遺跡分布地図』2017
- 栃木県教育委員会『栃木県埋蔵文化財地図』1997
- 鹿沼市『鹿沼市史 資料編 考古』2001



第5図 周辺の縄文遺跡

第2表 周辺の縄文遺跡(1)

No.	県番号	遺跡名	所在地	時期その他
1	3105	根古谷台遺跡	宇都宮市上欠町170	縄文(前・中期)・古墳・奈良 S62発掘
2	3014	樺山遺跡	鹿沼市栃窪1154	縄文・近世
3	2092	輝地窪遺跡	鹿沼市栃窪448	縄文・古墳・平安
4	2093	時内遺跡	鹿沼市栃窪230	縄文(晩期)・奈良平安
5	3020	栃窪石神遺跡	鹿沼市栃窪42	縄文(中期)
6	8796	上の原南遺跡	宇都宮市大谷町1657	縄文
7	3023	大沢入田ノ入遺跡	鹿沼市千渡2087	縄文
8	3022	宝性寺西遺跡	鹿沼市千渡457	縄文(中～晩期)・古墳・平安・中世 H4発掘
9	3026	千渡又四郎遺跡	鹿沼市千渡257	縄文・奈良平安
10	3030	千渡芝崎遺跡	鹿沼市千渡840	縄文・奈良平安
11	3025	吉原遺跡	鹿沼市千渡352	縄文(早期)・古墳・奈良平安・中世
12	3033	飯岡遺跡	鹿沼市千渡161	縄文・平安
13	3032	飯岡北遺跡	鹿沼市千渡2181	縄文(早～後期)・弥生・古墳
14	3035	飯岡南遺跡	鹿沼市千渡44	縄文(早・後期)
15	3174	台ノ内遺跡	宇都宮市飯田町786	縄文
16	3175	下荒針西原遺跡	宇都宮市下荒針町2678	縄文
17	3177	大久保遺跡	宇都宮市下荒針町2964	縄文(早～中期) S44発掘
18	3178	台耕上遺跡	宇都宮市下荒針町3029	縄文
19	3185	長坂天王寺遺跡	宇都宮市下荒針町3925	縄文(前・中期) H11発掘
20	3233	御城田遺跡	宇都宮市下駒生二丁目910	縄文(中・後期)・中世 S56発掘
21	5838	鶴田西の宮遺跡	宇都宮市鶴田町3628	縄文(中期) S44発掘
22	3187	羽黒下団地遺跡	宇都宮市鶴田町1704	縄文
23	3188	上鶴田北遺跡	宇都宮市鶴田町965	縄文・奈良平安
24	3190	長峰遺跡	宇都宮市鶴田町1659	縄文・奈良平安
25	3036	舞台北遺跡	鹿沼市白桑田501	縄文(後期)
26	3039	千渡南原遺跡	鹿沼市千渡1457	縄文
27	3040	岩石北遺跡	鹿沼市茂呂681	縄文(中期)・弥生
28	3038	上筒花遺跡	鹿沼市白桑田599	縄文
29	3181	筒花遺跡	宇都宮市飯田町76	縄文・奈良平安
30	3182	高田遺跡	宇都宮市飯田町177	縄文・古墳
31	3037	舞台南原遺跡	鹿沼市白桑田528	縄文(早～後期)
32	3184	長坂南遺跡	宇都宮市下荒針町3808	縄文(中期)
33	3043	亀甲遺跡	鹿沼市白桑田4	縄文・弥生・奈良平安
34	3192	上欠団地遺跡	宇都宮市上欠町1231	縄文(前～後期) S53・60発掘
35	3193	初瀬遺跡	宇都宮市上欠町1092	縄文(中～晩期)
36	3194	高尾神遺跡	宇都宮市上欠町881	縄文(中期)
37	3195	富士山台遺跡	宇都宮市上欠町1121	縄文・奈良平安
38	8802	砥上東田遺跡	宇都宮市砥上町729	縄文・奈良平安
39	3059	谷瀬溜遺跡	鹿沼市茂呂2557	旧石器・縄文・弥生・古墳
40	3060	茂呂川西遺跡	鹿沼市茂呂1086	縄文・弥生・奈良平安
41	3064	茂呂向山遺跡	鹿沼市茂呂1221	縄文・奈良平安・近世
42	3063	茶之入遺跡	鹿沼市茂呂2065	縄文・奈良平安
43	3069	茂呂松原北遺跡	鹿沼市茂呂1375	縄文・奈良平安・中世
44	3068	山中東遺跡	鹿沼市茂呂1918	縄文・奈良平安・近世
45	3070	茂呂松原南遺跡	鹿沼市茂呂1495	縄文

第3表 周辺の縄文遺跡(2)

No	県番号	遺跡名	所在地	時期その他
46	3071	西茂呂南遺跡	鹿沼市茂呂1893	縄文・奈良平安・中世
47	3075	庚塚遺跡	鹿沼市茂呂415	縄文・奈良平安・近世
48	3072	反川遺跡	鹿沼市茂呂1699	縄文(早・前期)・弥生・奈良平安
49	3074	嶋越遺跡	鹿沼市茂呂487	縄文
50	3052	上台原遺跡	鹿沼市深津2515	縄文・奈良平安・近世
51	3041	関口遺跡	鹿沼市深津2263	縄文(前～後期)・弥生・近世 S44・H7発掘
52	3044	上猪内遺跡	鹿沼市深津1745	縄文・弥生・奈良平安
53	3046	石羽根遺跡	鹿沼市深津911	縄文・奈良平安・近世
54	3077	芝之内遺跡	鹿沼市茂呂243	縄文・古墳・奈良平安
55	3048	下猪内遺跡	鹿沼市深津1429	縄文
56	3102	香掛遺跡	宇都宮市上欠町572	縄文・奈良平安
57	3047	寺田遺跡	鹿沼市深津1260	縄文(中期)・古墳
58	3099	芝原内遺跡	鹿沼市深津750	縄文(中・晩期)
59	3198	下砥上町北遺跡	宇都宮市下砥上町968	縄文・奈良平安
60	3107	宿尻遺跡	宇都宮市上欠町45	縄文・古墳・奈良平安
61	3108	上高野北遺跡	鹿沼市深津59	縄文(後期)
62	3109	上高野南遺跡	鹿沼市深津275	旧石器・縄文(前～後期)
63	3110	下欠北原遺跡	宇都宮市下欠町603	縄文・奈良平安
64	3202	ひのき内遺跡	宇都宮市下砥上町315	縄文・奈良平安
65	3208	下砥上山ノ神遺跡	宇都宮市下砥上町30	縄文
66	3229	自動車教習所裏	宇都宮市蔵3丁目429	縄文(中期)
67	3210	辻の内遺跡	宇都宮市西川田町278	縄文(前・中期)・奈良平安 S63発掘
68	3112	下台原南遺跡	鹿沼市深津332	縄文(前期)・古墳 H5発掘
69	3098	下台原北遺跡	鹿沼市深津699	縄文(中・後期)・中世・近世
70	3151	茂呂向遺跡	鹿沼市茂呂1771	縄文・奈良平安
71	3084	植竹西遺跡	鹿沼市上石川1512	縄文・弥生・奈良平安
72	3083	久保遺跡	鹿沼市上石川1243	縄文(中期)・古墳・奈良平安・中世
73	3095	下赤羽根遺跡	鹿沼市上石川1971	縄文・古墳
74	3090	柴原遺跡	鹿沼市上石川1951	縄文・古墳・奈良平安・中世
75	3156	内野遺跡	鹿沼市南上野町500	縄文
76	3145	大野原北遺跡	鹿沼市上石川2324	縄文(前～後期)・弥生・奈良平安
77	3146	鹿沼流通業務団地内	鹿沼市上石川2333	縄文(早～中期)・奈良平安 S59～62発掘
78	3148	山王後北遺跡	鹿沼市池ノ森673	縄文(前・中期)・弥生
79	3147	下石川大野原遺跡	鹿沼市上石川780	縄文・弥生・奈良平安
80	3097	松の木遺跡	鹿沼市上石川270	縄文・古墳・奈良平安
81	3131	賑久保遺跡	宇都宮市鷺の谷町48	縄文(中～晩期)・古墳
82	3211	辻の内遺跡	宇都宮市西川田町211	縄文・古墳・奈良平安
83	3149	山王後南遺跡	鹿沼市池ノ森916	縄文(前～後期)
84	3150	池ノ森北原北遺跡	鹿沼市池ノ森634	縄文(中期)・弥生・奈良平安
85	3815	山王前南遺跡	鹿沼市池ノ森925	縄文(中期)・奈良平安・近世
86	3817	池ノ森北原南遺跡	鹿沼市池ノ森434	縄文・古墳・奈良平安
87	3140	稲荷塚遺跡	鹿沼市下石川680	縄文(早～晩期)・弥生・奈良平安 S58発掘
88	3801	鳥喰前遺跡	鹿沼市下石川253	縄文(前期)・奈良平安
89	3843	中泉北原遺跡	壬生町中泉	縄文(前・中)・古墳・奈良平安
90	3138	前林遺跡	鹿沼市池ノ森546	縄文・奈良平安・中世

第4表 周辺の縄文遺跡(3)

No	県番号	遺跡名	所在地	時期その他
91	3135	鳥喰遺跡	壬生町上田	縄文・古墳・奈良平安
92	3134	東林遺跡	壬生町上田	縄文・古墳・奈良平安
93	3216	合ノ畑遺跡	宇都宮市幕田町652	縄文・奈良平安
94	3218	東屋敷遺跡	宇都宮市幕田町885	縄文
95	3254	小野潤器北遺跡	宇都宮市西川田南2丁目1592	縄文
96	3221	旭ヶ丘団地北遺跡	宇都宮市兵庫塚1丁目168	縄文(中期)
97	3223	二軒屋遺跡	宇都宮市若松原3丁目1117	縄文・弥生・古墳
98	4189	旭ヶ丘団地遺跡	宇都宮市兵庫塚1丁目1659	縄文
99	8816	兵庫塚三丁目遺跡	宇都宮市兵庫塚二九	縄文・奈良平安
100	3813	藤江愛宕前遺跡	鹿沼市藤江町1521	縄文(中期)
101	3144	大力遺跡	壬生町上田	縄文・古墳
102	3845	金剛地B遺跡	壬生町上田	縄文(前・中)・古墳・奈良平安
103	3856	金剛地A遺跡	壬生町上田	縄文・古墳
104	3819	栃木道西北遺跡	鹿沼市池ノ森190	縄文・奈良平安
105	3818	栃木道東遺跡	鹿沼市池ノ森345	縄文(中期)・奈良平安
106	3844	欠の上遺跡	壬生町中泉	縄文(前～後)・古墳・奈良平安
107	3877	中泉遺跡	壬生町中泉	縄文(中・後期)・古墳・奈良平安
108	3880	西原A遺跡	壬生町上田	縄文(前～後)・古墳・奈良平安
109	3878	篠の内A遺跡	壬生町中泉	縄文(前期)・古墳・奈良平安
110	3899	山の上遺跡	壬生町中泉	旧石器・縄文・古墳
111	3908	宇都宮競馬厩舎内	壬生町羽生田	縄文・弥生・古墳
112	3885	下原A遺跡	壬生町中泉	縄文・古墳・奈良平安
113	3859	上田馬場遺跡	壬生町上田	縄文(晩期)・古墳・奈良平安
114	3854	坂下遺跡	壬生町上田	縄文・古墳・奈良平安
115	3864	上田宿遺跡	壬生町上田	縄文・古墳・奈良平安
116	3866	朝比奈A遺跡	壬生町上田	縄文・古墳・奈良平安
117	3887	五反田遺跡	壬生町北小林	縄文(中期)
118	3888	向原遺跡	壬生町北小林	縄文(中期)・奈良平安
119	3910	安塚東原遺跡	壬生町北小林	縄文・奈良平安
120	3869	外川原遺跡	壬生町安塚	縄文・古墳・奈良平安
121	3874	牛塚遺跡	壬生町安塚	縄文・古墳・奈良平安
122	3890	西南原B遺跡	壬生町安塚	縄文・古墳・奈良平安
123	3895	西南原C遺跡	壬生町安塚	縄文・古墳・奈良平安
124	3875	安塚宿内遺跡	壬生町安塚	縄文(中期)・古墳・奈良平安
125	3894	安塚南原A遺跡	壬生町安塚	縄文・古墳・奈良平安
126	4200	上坪新田遺跡	宇都宮市針ヶ谷1丁目520	縄文・弥生・古墳・奈良平安
127	4202	立海道遺跡	宇都宮市針ヶ谷町978	縄文・古墳・奈良平安
128	4207	見明遺跡	宇都宮市針ヶ谷町929	縄文・弥生・奈良平安
129	4212	並木遺跡	宇都宮市針ヶ谷町841	縄文・古墳・奈良平安
130	8831	二子塚北遺跡	宇都宮市針ヶ谷町418	縄文・弥生
131	4208	天狗原遺跡	宇都宮市さつき2丁目1007	縄文・弥生・古墳
132	4210	赤岩遺跡	宇都宮市針ヶ谷町326	縄文・古墳
133	4218	赤土山遺跡	宇都宮市南町612	縄文・弥生・古墳・奈良平安
134	4213	三ッ矢遺跡	宇都宮市針ヶ谷町807	縄文・奈良平安
135	4216	鳴神遺跡	宇都宮市針ヶ谷町213	縄文・奈良平安

第2章 発見された遺構と遺物

1 集落跡の様相

(1) 集落跡の立地と形状

本遺跡が立地するのは、北西から南東に向かって延びる細長い台地上である。調査地区付近での台地幅は、基底部で約160m、台地上平坦部で約90mを測る。また台地斜面の形状は、北東側が大きく蛇行する姿川の浸食によって崖状を呈するのに対し、南西側は比較的緩やかな傾斜で低地部に至っている。この南西斜面を下れば、約200mで武子川の岸辺に達する。なお、低地部との比高差は、北東側で16m、南西側で12mを測る。

発見された集落跡は、北東側に幅10mほどの未調査地を残すものの、ほぼこの台地上平坦部いっぱいに広がっており、特に傾斜の緩やかな南西側では斜面上端ぎりぎりまで住居・建物等が配された状況も確認できる。本集落跡の南東方向への伸びは未確認であるが、その規模は幅（北東-南西方向）約90mで、長さ（北西-南東方向）は100m以上におよぶと想定できる。

次に集落跡の形状についてであるが、調査地区内から古墳及び奈良時代の遺構を除いたものが第7図である。これを見ると住居・建物跡群が、中央の墓坑・土坑群を囲むように配されている様子が明瞭に窺える。南東側が未確認であり、また北東斜面側には地形的制約もあるが、おそらく住居・建物跡群が環状に配される集落（所謂環状集落）であった可能性が高いと思われる。長大な建物跡などが、中央の墓坑・土坑群に対して放射状に配されているのも、そのことを物語る要因の一つであろう。なお墓坑・土坑群の中心部には住居・建物跡等はなく、概ね円形広場の様相を呈していたものと思われるが、その規模は直径70～80mほどである。

(2) 住居・建物跡の種類と特徴

本集落跡では、所謂竪穴住居跡・掘立柱建物跡とともに新たに2種類の建物遺構の存在を認定し、これらに長方形大型建物跡及び方形建物跡という名称を付した。これら都合4種類の建物遺構の認定については、あくまでも一定の検出面における遺構的な形態差を重視したものであり、機能差まで考慮に入れたものではない。例えば竪穴のものに関しては、ほとんど例外なく炉跡が確認されることからこれまでの慣習に従って住居跡としたが、他の建物遺構が住居以外の機能と断定するものではない。強調したいのは、竪穴住居も含めて形状の異なる4種類の建物が一つの集落を形成したとみられることであり、今後の類例の増加や研究の進展いかんでは、これらの分類や名称にこだわるものではない。なお、今回の調査における検出数は、竪穴住居跡が27軒、長方形大型建物跡が16棟、方形建物跡が11棟、掘立柱建物跡が18棟で、総数は72軒（棟）にのぼった。

ア 竪穴住居跡

ここで竪穴住居跡として分類した遺構は、検出面より一定の深さを有し壁が立ち上がること、ある程度踏み固められた床面を持つこと、屋内に炉跡を有することなどで他の建物跡から区別できるものである。平面形・規模及び支柱数などからさらに分類が可能であるとともに、ほぼ同じ場所で1～数回の建て替えを行っているのも特徴である。なお、この建て替えによって少しずつ拡張されている場合がほとんどであり、平面規模の計測値はほぼ最終段階のものと言える。

イ 長方形大型建物跡

一定の検出面において、2列の柱穴列とそれらを取り囲む溝又は小ピット列が確認できる遺構であり、壁の立ち上がり、踏み固められた床面や炉跡などが検出されないことで、本遺跡内の竪穴住居跡とは区別できるものである。また、検出状況においては後述する方形建物跡や掘立柱建物跡と類似する部分が多いが、規模がいずれも長大であること、隅丸長方形で規格性の高い柱穴列（2列10本）を有することなどから、明確に区分できるものである。さらには中央広場（墓坑・土坑群）に対して長軸を放射状にして配していることや同じ場所で1～数回の建て替えを行っているのも特徴である。なお、外周の溝又は小ピット列が確認できない場合でも、柱穴列が2列10本で規模的・配置的に条件に適合しているものについては、本建物跡として認定した。

ウ 方形建物跡

ほぼ方形に巡る溝又は小ピット列の内側に柱穴が配されるもので、遺構確認の状況は長方形大型建物跡に極めて近く、やはり踏み固められた床面や炉跡などは検出されない。柱穴は4本が基本であるが、検出できないものも多く、検出された場合でも深さが周りの溝や小ピット列と同じか浅いという特徴がみられる。なお、配置的には長方形大型建物跡に付随するような在り方がみられ、主軸方向も中央広場（墓坑・土坑群）に対して放射状となっている。

エ 掘立柱建物跡

検出されるのは主柱穴の配列だけで、長方形大型建物跡や方形建物跡のような周囲を取り囲む施設が確認されないものを総称して掘立柱建物跡とした。柱の配列は基本的に方形もしくは長方形で、まれにはあるが妻側の中間柱が外へ飛び出す所謂亀の子形のものもみられる。配置的には竪穴住居跡の分布範囲に近く、長方形大型建物跡のように中央広場（墓坑・土坑群）に対して主軸を放射状に配す状況も特にはみられない。



第6図 根古谷台遺跡遺構配置圖

- | | |
|-----|------------|
| J1住 | 1号形穴居跡群 |
| J1屋 | 1号形竪穴居跡群跡 |
| 1屋 | 1号及方型穴居跡群跡 |
| 1方 | 1号形跡群跡 |
| 26坑 | 26号形穴居跡群跡 |
| 1溝 | 1号溝跡 |



第7図 根子谷遺跡縄文時代遺構配置図

根子谷遺跡縄文時代遺構配置図
 凡例
 1 凡例
 2 凡例
 3 凡例
 4 凡例
 5 凡例
 6 凡例
 7 凡例
 8 凡例
 9 凡例
 10 凡例
 11 凡例
 12 凡例
 13 凡例
 14 凡例
 15 凡例
 16 凡例
 17 凡例
 18 凡例
 19 凡例
 20 凡例
 21 凡例
 22 凡例
 23 凡例
 24 凡例
 25 凡例
 26 凡例
 27 凡例
 28 凡例
 29 凡例
 30 凡例
 31 凡例
 32 凡例
 33 凡例
 34 凡例
 35 凡例
 36 凡例
 37 凡例
 38 凡例
 39 凡例
 40 凡例
 41 凡例
 42 凡例
 43 凡例
 44 凡例
 45 凡例
 46 凡例
 47 凡例
 48 凡例
 49 凡例
 50 凡例
 51 凡例
 52 凡例
 53 凡例
 54 凡例
 55 凡例
 56 凡例
 57 凡例
 58 凡例
 59 凡例
 60 凡例
 61 凡例
 62 凡例
 63 凡例
 64 凡例
 65 凡例
 66 凡例
 67 凡例
 68 凡例
 69 凡例
 70 凡例
 71 凡例
 72 凡例
 73 凡例
 74 凡例
 75 凡例
 76 凡例
 77 凡例
 78 凡例
 79 凡例
 80 凡例
 81 凡例
 82 凡例
 83 凡例
 84 凡例
 85 凡例
 86 凡例
 87 凡例
 88 凡例
 89 凡例
 90 凡例
 91 凡例
 92 凡例
 93 凡例
 94 凡例
 95 凡例
 96 凡例
 97 凡例
 98 凡例
 99 凡例
 100 凡例

2 竪穴住居跡

J1号竪穴住居跡 (第8図)

位置 C-29グリッド内。調査区の中では最も東寄りに位置し、北東急斜面部までは僅か11mの距離である。すぐ北にはJ4号竪穴住居跡、東にはJ18掘立柱建物跡が隣接する。

重複関係 他の住居・建物跡等との重複はみられないが、本住居跡は柱穴や炉の状況から1回の建て替えが窺える。

規模・形状 平面形はほぼ南北(N-1°-E)に長軸をとる隅丸長方形。南辺・北辺が緩やかな弧状をとるため、やや楕円形気味にも見える。大きさは南北が6.7m、東西が4.4m(中央部)。

壁・壁溝 壁は確認面からの深さ20~30cmで、全周する。壁溝及びピット等は認められない。

床面の状況 床面はほぼ平坦で堅く踏み締められており、特に炉の周辺は顕著である。

柱穴 位置関係や深さからP1~6の6本が主柱穴で、P4・6からP7・8にそれぞれ付け加えて建て替えをしたものとみられる。これらの主柱穴は直径35~45cm、深さ35~55cmで、東西柱間1.8~2.4m、南北柱間3.2~3.7mである。なお中間のP2・5は、深さがやや浅め(30cm前後)で、南北の柱筋から一本分ほど外側に飛び出している。

覆土 部分的に後世の攪乱はみられたが、自然堆積で大きく4層に分層された。直接床面に堆積した第2層からは、ローム粒とともに比較的多量の炭化物が検出されている。

炉跡 炉跡は床面やや北寄りから3カ所で確認されている。炉1は不整楕円形の地床炉で、長軸80cm・短軸65cm・深さ9cm。炉内は焼土で埋め尽くされ、上層に長さ20cmほどの焼け焦げた川原石が検出されている。炉2も不整楕円形の地床炉で、長軸60cm・短軸45cm・深さ7cm。やはり上層から焼け焦げた川原石が検出されているが、焼土の量は炉1より少ない。炉3は小規模な地床炉で、長軸35cm・短軸20cm・深さ5cmである。

出土遺物 (第43・84図)

土器 図示しえたのは10点と少ないが、いずれも床面もしくは覆土下層からの出土である。

1~5は文様を有するもので、いずれも頸部から口縁部にかけての破片である。1・2は横位の平行沈線、3・4は連続爪形文、5はコンパス文が施される。3は円形竹管文との組合せで米字状に描かれたものとみられる。なお、2の地文は3段RLRの複節縄文である。

6~10は地文のみのものである。6は平口縁の破片で、口唇部に凹みを有する。地文は2段RLの単節縄文。7は反撚りLLの縄と思われる。8は1段Lと2段RLの羽状縄文である。9は平口縁の破片で、地文は原体に1段Rを3本一組で絡めた撚糸文である。10は軸縄に1段RとLを2本一組で巻いた附加条第1種の縄文である。

石器 図示しえたのは、石鏃2点・剥片1点・磨石4点・石皿1点の計8点である。

J2号竪穴住居跡 (第9図)

位置 C-28グリッド内。今回確認された縄文期の住居・建物跡の中では最も北に位置し、北東急斜面部までは僅か10数mの距離である。すぐ南に1号長方形大型建物跡が隣接する。

重複関係 他の住居・建物跡との重複及び建て替え等はみられない。

規模・形状 平面型はほぼ南北(N-3°-W)に長軸をとる隅丸長方形で、均整のとれた形状を

している。大きさは南北が6.15m、東西が4.1m。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは18～20cmとやや浅く、壁溝及びピット等は認められない。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、炉の周辺を中心によく踏み締められている。

柱穴 位置関係や深さからP1～6の6本が主柱穴とみられる。これら主柱穴は直径30cm前後、深さ45～57cmで、柱間は東西が1.6m、南北が3.2～3.4mである。ただし、炉の位置と関係するの南北方向の中間柱はやや南寄りである。なお、柱穴の状況から建て替えの痕跡を認めることはできない。

覆土 自然堆積で、大きく3層に分層された。第1層は粘性が強い黒褐色土で、比較的多くの炭化物が検出されている。

炉跡 炉跡は中心部やや南寄りで、4本の主柱穴(P2・3・5・6)に囲まれた位置である。長軸85cm・短軸60cm・深さ18cmの楕円形状の地床炉で、北寄りから長さ25cm程の川原石が検出されている。底面には厚さ5～6cmの焼土層が確認されている。

出土遺物 (第44・85図)

土器 図示しえたのは16点で、ほとんどが覆土下層からの出土である。

1～7は文様を有するものである。1は波状口縁の破片で、2本一組の棒状工具により菱形文や渦巻文が施される。3も同様な口縁部片である。2は平口縁の破片とみられるが、5本一組の櫛歯状工具による小波状文・押し引き文が施される。4～5は連続爪形文が施されるもので、4は口縁直下に一条、5～7は菱形文が描かれたものとみられる。なお、4の地文は0段多条の2段LR・RLを使用した羽状縄文である。

8～16は地文のみのものである。8～11は口縁部で、9以外は平口縁とみられる。8の口唇部には浅い沈線が、また11の口唇部には地文と同じ縄文が施される。8～15及び16の地文は2段RL又はLRの単節斜縄文である。14・15は撚糸文である。

石器 図示しえたのは、石鏃2点・磨石3点の計5点である。

J4号竪穴住居跡 (第10図)

位置 C-29グリッド。J1号竪穴住居跡のすぐ北側で、調査区の中では最も東寄りに位置する。
重複関係 他の住居・建物跡等との重複はみられないが、本住居跡は柱穴や炉の状況から1回の建て替えが窺える。

規模・形状 平面型は隅丸方形で、南北方向がやや長い。主軸方向はN-18°-Wで、やや西に傾いている。大きさは南北が4.75m、東西が4.2m。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは25～30cmで、南壁中央部には幅約1m、高さ10cm程の狭い段が設けられている。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、炉の周囲を中心に強く踏み締められている。

柱穴 位置関係や深さ等からP1～4の4本が当初の主柱穴で、建て替えに伴ってP1を残したままP5～7に付け替えたものとみられる。これら主柱穴は直径25～30cm、深さ43～60cmで、当初の柱間は東西が1.35～1.5m、南北が2.05mである。なおP9・10はやや方形の堀形であり、本住居とは別の柱穴列もしくは建物跡のものである可能性も高い。

覆土 自然堆積で、大きく3層に分層された。覆土下層の第2層は褐色土で、炭化物・ローム粒が多量に含まれている。

炉跡 炉跡はほぼ床面中央から重複して二つが確認されている。新しい炉1は長軸58cm・短軸50cm・深さ10cmの不整楕円形の地床炉で、底面中央に長さ20cm程の川原石が置かれている。また古い炉2も長軸55cm・短軸50cm・深さ6cmで、ほぼ同規模の不整楕円形地床炉である。

出土遺物 (第45・86図)

土器 図示しえたのは13点で、すべて覆土中からの出土である。

1～5は文様を有するものである。1は小波状の口縁部で、3本一組の棒状工具による連続刺突文と円形竹管文が施される。2・3の口縁部片は半截竹管による連続爪形文であるが、いずれも相互刺突状である。4の底部片は、4本一組の棒状工具による波状文が施される。

6～13は地文のみのもので、6・11は大きな波状口縁の土器である。6～8は縄文を地文とするもので、6は前々段合燃もしくは組紐、7は2段RLの単節、8は2段RLとLRの羽状縄文である。9～13は燃糸文で、9は1段Rを使用した網目状燃糸文、他は1段の縄を2本ないしは3本絡めて方向を変えながら施した燃糸文である。11と12は同一個体である。

石器 図示しえたのは、石鏃1点・石匙1点・磨石3点・石皿1点の計6点である。

J5号竪穴住居跡 (第11～13図)

位置 D-28～E-28グリッド。本竪穴住居跡は今回確認された縄文期の住居・建物跡群の中では最も北西寄り、本集落跡を載せる台地上平坦部のほぼ中央に位置する。すぐ南東にJ12号竪穴住居跡が隣接しているが、東西両側は幅10m程に渡って明確な遺構の確認されない地域となっている。

重複関係 他の住居・建物跡等との重複は認められないが、本住居跡は柱穴や炉の状況から少なくとも数回の建て替えが窺える。

規模・形状 建て替えにより規模・形状には何回かの変遷があったとみられるが、最終的な平面型は隅丸長方形で、大きさは長軸15.2m・短軸9.9mの堂々たるものである。主軸方向は時期によってN-25～35°-Wと幅があるが、集落を載せる台地の主軸とほぼ一致している。規模的にも位置的にも、本集落の中心的建造物と言える竪穴住居跡である。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは30cm前後で、立ち上がりの角度は全体に緩やかである。壁溝はみられないが、建て替え毎に小ピット列(壁柱穴)が巡らされた様子が確認される。

床面の状況 床面は全体的にはほぼ平坦で、炉の周りを中心に良く踏み固められている。ただし北西の壁寄り付近はやや柔らかく、締まりが認められない。

柱穴 本住居跡からは、壁柱穴も含めて大小450本を超える柱穴が検出されている。これはおそらく数回以上に及ぶとみられる建て替えの結果の本数であるが、調査ではそれらすべての組み合わせや前後関係を明らかにすることは残念ながら困難であった。ここでは、主柱穴とみられる柱穴の大きさや埋土の状況、組み合わせ、重複関係、さらには壁柱穴とみられる小ピット列との位置関係等も勘案し、次のような時期設定と変遷を考えた。

I期: 本期は6本主柱で隅丸長方形の平面形をとる時期で、主軸方向はN-35°-W前後である。主柱穴の組み合わせや小ピット列の位置関係等から以下の3段階の変遷がみられる。

I-a期 主柱穴はP1～6の6本で、直径38～58cm、深さ51～75cm。埋土は全体にローム粒を多く含み、堅く締まっている。柱間は長軸方向6.8m・短軸方向3.0～3.7mで、長軸の中間柱が柱1本分ほど内側に入る並びとなっている。また、組み合わせとして想定される壁

柱穴（小ピット）列の平面規模は、長軸方向11.2m・短軸方向7.1mである。

I-b期 主柱穴はP7～12の6本で、直径40～64cm、深さ45～80cm。埋土は全体的にロームブロックを多く含む。柱間は長軸方向8.0m・短軸方向4.6mで、前期より一回り大きくなっている。また、組み合わせとして想定される壁柱穴（小ピット）列の平面規模も、長軸方向11.8m・短軸方向7.7mと一回り広がっている。

I-c期 主柱穴はP13～18の6本で、直径32～65cm、深さ40～95cm。柱間は長軸方向8.6m・短軸方向4.4mで、前期よりやや縦長になっている。また、組み合わせとして想定される壁柱穴（小ピット）列の平面規模は長軸方向14.8m・短軸方向9.0mで、特に北西側に大きく拡大している。

II期：本期はI期に比べ主軸方向をN-25°-W前後と西に振り、より縦長の平面形となる時期である。主柱穴の組み合わせや小ピット列の位置関係等から以下の2段階の変遷がみられる。

II-a期 主柱穴はP19～24の6本で、直径32～68cm、深さ42～81cm。柱間は長軸方向8.0m・短軸方向3.5～3.9mで、長軸方向の南側柱間（P20-21・P23-24）が長めになっている。また、組み合わせとして想定される壁柱穴（小ピット）列の平面規模は長軸方向11.5m・短軸方向6.7mで、I期段階に比較して平面形が細長くなっている。なお、壁柱穴（小ピット）列南辺の中央部で、柱穴列がハの字状に内側に入り込む様子が確認され、出入口に関わる施設と考えられる。

II-b期 主柱穴はP25～34の2列・10本で、直径30～65cm、深さ55～73cm。柱間は長軸方向10.1m・短軸方向4.0～4.2mで、長軸方向の柱配置はほぼ等間隔（2.4～2.7m）。前期よりかなり長大化の傾向がみられる。また、組み合わせとして想定される壁柱穴（小ピット）列の平面規模は長軸方向14.6m・短軸方向7.1mで、長軸の長さが短軸の倍以上となっている。柱配置・平面形・規模等、本遺跡の長方形大型建物跡との共通性が強くみられる。

覆土 自然堆積で、大きく3～4層に分層された。覆土上層の第1層は粘性の強い黒褐色土で、多量の炭化物が含まれている。

炉跡 床面の焼土は大小合わせて10カ所ほど確認されているが、主柱穴等との位置関係から中心的な炉は2カ所とみられる。I期段階に伴う炉1は、床面中央のやや北寄りに位置する地床炉で、大きさは長軸75cm・短軸48cm・深さ6cm。II期段階に伴う炉2は、やはり床面中央の北部に位置する地床炉で、大きさは長軸98cm・短軸60cm・深さ8cm。北寄りに石皿が据えられ、中央には川原石が置かれていた。

出土遺物（第46・47・87～89・94図）

土器 竪穴規模のわりに土器は少なく、図示したのは33点で、ほとんど覆土中の出土である。

1～7は文様を有するものである。1～3は棒状工具による波状文が施されるもので、1は4本一組、2・3は3本一組で描かれる。なお1は推定口径29cmで、口唇部に棒状工具による連続押圧がみられる。4～7は連続爪形文が施されるものである。4は口縁直下を平行するように2条の連続爪形文が巡り、地文は2段R・L・Rの羽状縄文。5は大きな波状口縁で、4本単位の連続爪形文で変形を描いている。6は頸部付近の破片で、断面三角形の隆帯を挟んで連続爪形文が施される。7はくびれ部にやや粗雑な連続爪形文が巡るもので、地文は1段R・Lの無節縄文の羽状構成である。

8～33は地文のみのものである。9は口縁部に小さな突起を有する土器で、口縁直下に無文帯

を配し、以下2段LRによるループ文が重層する。8・10・16・17・19は羽状縄文を構成するもので、19は1段R・Lの無節縄文である。13・14及び20～25は、附加条縄文が施されるものである。20は推定口径31cmの大きな波状口縁で、2段LRの軸縄に1段Rを2本一組で絡めた附加条1種である。23～25は附加条2種で、この内24は太めの1段Lの軸縄に1段Rを2本一組で絡めたものである。26～33は燃糸文を地文とするものである。26は推定口径26cmの平口縁で、1段R2本一組と1段L2本一組の2種類の燃糸文が施される。27・28・32・33も同様に1段の縄を複数本組にして絡めたものであるが、33は1段のRとLを交互にして4本一組としたものである。29・30は網目状燃糸文、31は葎瓦状燃糸文である。

石器 図示しえたのは、石鏃5点・石匙2点・スクレーパー2点・剥片4点・磨石21点・石皿3点の計37点である。

J6号竪穴住居跡（第14図）

位置 G-31グリッド。南西緩斜面寄りに位置し、すぐ西側にJ23号竪穴住居跡が隣接する。

重複関係 他の住居・建物跡等との重複はみられないが、床面中央部が73号土坑によって切られている。また、本住居跡は柱穴や炉の状況等から少なくとも1回の建て替えが窺える。

規模・形状 平面形は南辺がやや長めの隅丸方形で、大きさは建て替え前が長軸方向5.1m・短軸方向4.75m、建て替え後が長軸方向6.1m・短軸方向5.9m。主軸方向は建て替えによって若干のぶれはみられるが、N-40°-W前後である。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは35～42cmとしっかりしており、建て替え前の段階では幅10～15cm・深さ5～10cmの壁溝がほぼ全周している。この壁溝には間隔のまばらな小ピット列がみられるが、P11～14等は深さ50cm前後のものであり、出入り口施設に関係するものと考えられる。なお、建て替えに伴って南西側を拡張しているが、新たな壁溝は確認されていない。

床面の状況 全体的にはほぼ平坦で、炉周辺を中心によく踏み固められているが、建て替えに伴って拡張された南西隅付近には、ロームブロックの盛土による高さ15cm程度の段が設けられている。

柱穴 建て替え前の主柱穴はP1～6の6本（ただしP4は73号土坑により壊滅したものとみられる）で、直径20～34cm、深さ55～72cm。柱配置は長軸の中間柱が外に出る亀の甲型で、柱間は長軸方向2.7m・短軸方向1.9m（張り出し部2.6m）。建て替え後の主柱穴はP7～10の4本で、直径24～27cm、深さ62～92cm。柱間は長軸方向2.7m・短軸方向2.2m。

覆土 自然堆積で、大きくは3層に分層された。レンズ状に堆積した第2層は炭化物や焼土を多く含む第一次埋没土層であるが、大量の土器片が投棄されたような状態で検出されている。

炉跡 確認された2つの炉跡は、どちらも一部が73号土坑に切られているが、位置関係から炉1が建て替え前に、炉2が建て替え後に伴うものとみられる。いずれも床面中央やや北よりに作られた不整形の地床炉で、大きさは径40cm前後・深さ5～6cm。

出土遺物（第48・49・90図）

石器 図示しえたのは39点と比較的多いが、ほとんど覆土中からの出土である。

1～24は文様を有するものである。1～13は半截竹管もしくは棒状工具による沈線文を主体とするものである。1は口径40cmを超えるともみられる大型土器で、2本一組の棒状工具による横位の平行沈線と疎らな刺突文が口縁部全体に施される。2はこれと同一の口縁部片である。3・4・11は平行沈線

が施されるものであるが、地文は3か綱目状燃糸文、4・11が1段Lの無節縄文である。なお11は鋸齒文も組合せとなっている。5～8は2ないしは数本一組の棒状工具による波状文が施されるもので、5・7はコンパス文風である。9・10・12は櫛歯状工具（いずれも6本一組）により波状文等が施されるものである。10は緩やかな波状口縁、12は口縁部に棒状隆帯が貼附される。13は口縁部直下に注口状の円孔が穿たれている。14・16～22は半截竹管等による連続爪形文が施されるものである。14は推定口径13cm・残存高17cmのコップ形の土器で、口縁部に径4mm程の円孔が穿たれた小突起を有する。地文は2段RLと1段Lの羽状構成で、連続爪形文で区画された横位無文帯が数段に渡って巡らされる。18は菱形文と渦巻文が、22は米字状文が描かれている。19の地文は綱目状燃糸文、21の地文は2段RLによるループ文である。23には円形竹管文、24にはやや粗雑な格子目文がみられる。なお、17・23は繊維を含まず、諸磯a式とみられる。

25～38は地文のみのものである。25・29～31は無節縄文を主体としたもので、25は1段Lと1段Rを全面に施した後、口縁部を幅5cm前後で磨り消している。26は上半部が2段RLによるループ文で、下半部は1段Rの無節縄文である。27・28・32・38は単節縄文のもので、27・32は2段RL・LRの羽状縄文である。33・34は附加条1種で、いずれも2段の縄に0段の条が巻かれている。35～37は燃糸文で、36・37は葎瓦状燃糸文である。

石器 図示しえたのは、磨石8点・石皿1点の計9点である。

J7号竪穴住居跡（第15・16図）

位置 F-30～G-30グリッド。南西斜面側に展開する住居・建物跡群の一つであるが、墓坑・土坑で構成される中央広場の方に明らかに食い込むような位置取りとなっている。

重複関係 他の住居・建物跡等との重複はみられないが、中央広場墓坑・土坑群中の99・146号土坑を切っている。また、本住居跡は、柱穴や壁溝の状況等から少なくとも1回の建て替えがみられる。

規模・形状 平面形はほぼ隅丸方形で、大きさは建て替え前が南北4.9m・東西4.5m、建て替え後が南北5.4m・東西5.3m。主軸方向はN-73°-Wである。なお、建て替え前よりもさらに一回り小さい壁溝の痕跡もみられる。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは35～45cmとしっかりしており、建て替え前の段階では幅10～15cm・深さ5～10cmの壁溝がほぼ全周している。また建て替えに伴っては、北辺以外の3辺が少しずつ拡張され、ほぼ同様な壁溝が新たに設けられている。

床面の状況 全体的にほぼ平坦で、炉周辺を中心によく踏み固められている。

柱穴 建て替え前の主柱穴はP1～6の6本で、直径20～32cm、深さ42～52cm。柱配置は東西主軸方向の中間柱が内側になる鼓型で、柱間は東西2.55m・南北2.7～2.9m。建て替え後の主柱穴はP7～12の6本で、直径20～35cm、深さ38～58cm。柱配置はやはり鼓型で、柱間は東西2.7m・南北2.8～3.0m。また、東壁近くのP13・14及びP15・16は、いずれも1m弱の間隔で対となる柱穴で、おそらく位置的にみて前者が建て替え前の、また後者が建て替え後の出入口施設に伴うものとみられる。なお、建て替え前の主柱穴の多くでは、ロームブロックを多く含む土で埋め戻されている状況が確認された。

覆土 自然堆積で、大きくは3層に分層された。全体に炭化物が多く含まれ、強い粘性がみられた。

炉跡 床面中央から西寄りて確認された不整楕円形の床炉で、大きさは長軸1.1m・短軸0.7m・深

さ10cm。底面西寄りから3個小の川原石が出土している。なお、東側には建て替え前に伴うとみられる地床炉の一部が確認されている。

出土遺物 (第50・91図)

土器 図示しえたのは18点で、覆土下層からの出土がほとんどである。

1～12が文様を有するものである。1～3は半截竹管による沈線文のもので、1は菱形文、2は鋸歯文、3は平行線と波状文等が施される。4・5は、いずれも口縁直下に3本一組の棒状工具による連続刺突文がみられる。5～9は連続爪形文が施されるものである。6は小円孔が穿たれ、7は円形刺突文が組み合わされる。10・11はコンパス文がみられる。12は隆帯が貼附される。

13～18は地文のみのものである。13・14は附加条1種縄文で、いずれも2段の縄に1段の縄を巻いたものである。15～17は単節縄文のもので、15は結束のある羽状縄文である。なお、17は織維が含まれていない。

石器 図示しえたのは、石鏃1点・磨石6点の計7点である。

J8号竪穴住居跡 (第17・18図)

位置 G-31グリッド。南西緩斜面部寄りに位置し、小規模なJ-29号竪穴住居跡が隣接する。

重複関係 先後関係は不明であるが、J11号掘立柱建物跡と重複する。また、本住居跡は1回の建て替えが確認される。なお、北西及び北東コーナーは、後世の根切り溝で切られている。

規模・形状 平面形はほぼ隅丸方形で、大きさは建て替え前が南北4.9m・東西5.6m、建て替え後が南北6.25m・東西6.55m。主軸方向はN-61°-Wである。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは35～45cmとしっかりしているが、立ち上がりは50°前後とやや緩やかである。壁溝は建て替え前に伴うものであり、西辺を除く三方に巡らされている。幅10～15cm・深さ5～6cmである。

床面の状況 全体的にほぼ平坦で、炉周辺を中心によく踏み固められている。

柱穴 建て替え前の主柱穴はP1～4の4本で、直径20～35cm、深さ54～72cm。柱間は東西3.15m・南北2.95m。建て替え後の主柱穴はP5～10の6本で、直径20～34cm、深さ48～80cm。東西方向の中間柱はかなり西寄り、やや変則的な配置となっている。柱間は東西3.3m・南北2.9～3.4m。なお柱筋からはいずれも、補助的に使用したとみられる柱穴もいくつか確認できる。

覆土 自然堆積で、大きく4層に分層された。全体にローム粒・炭化物等が多く含まれている。

炉跡 床面中央やや西寄りから確認された炉1は、建て替え前に伴う地床炉で、大きさは長軸0.7m・短軸0.4m・深さ8cm。これよりさらに西寄りで確認された炉2は、建て替え後に伴う地床炉で、大きさは長軸0.5m・短軸0.3m・深さ6cmとやや小ぶりである。

出土遺物 (第51・92・93図)

土器 図示しえたのは28点で、覆土下層からの出土が大半である。

1～19は文様を有するものである。1～4・9・13～17は半截竹管等による連続爪形文が施されるものである。1～4はいずれも口縁直下に2段ないしは3段の連続爪形文が描かれるもので、2は波状口縁、4は強い内湾口縁である。9・13～17は頸部から胴部に施されるもので、17は米字状文である。5～8及び10～12は半截竹管等による平行沈線のもので、10・11は肋骨文である。18は平行沈線とコンパス文、19は格子目文である。

20～28は地文のみのものである。20～24は単節斜縄文のもので、24は2段LR・RLの羽状縄文である。25・26は附加条1種縄文であり、25はRL+rとLR+rが結束されて羽状構成となっている。27・28はいずれも1段Rを絡めた撚糸文である。

なお、2・6・9・18・20・23は繊維の含有が極めて微量である。

石器 図示しえたのは、石鏃2点・磨石15点・石皿1点の計18点である。

J10 竪穴住居跡 (第19・20図)

位置 F-28～G-28グリッド。今回確認された住居・建物跡群の中では、最も西寄りに位置し、南西斜面部までは僅か10mほどの距離である。

重複関係 3号方形建物跡と重複するとともに、4号方形建物跡がすぐ南側に近接している。また、本住居跡も1回の建て替えが確認される。

規模・形状 平面形はやや平行四辺形気味の隅丸長方形で、大きさは建て替え後で長軸7.1m・短軸4.7m。建て替え前の大きさは判断しがたいが、残る壁柱穴等から類推して一回り小さかったものと思われる。主軸方向はN-78°-Wで、ほぼ東西に主軸をとっている。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは20～30cmとやや浅めで、立ち上がりも緩やかである。壁溝はみられず、直径15～20cm・深さ20cm前後の壁柱穴がまばらな間隔で確認される。

床面の状況 全体的にほぼ平坦で、炉周辺を中心によく踏み固められている。

柱穴 建て替え後の主柱穴はP1～6の6本で、直径25～33cm、深さ44～92cm。柱間は長軸4.7m・短軸2.1mで、かなり整然とした並びとなっている。これに対し建て替え前の主柱穴はP9～14の6本で、全体的に細く(直径20～25cm、深さ46～92cm)、並びも不規則である。柱間は長軸3.4m・短軸1.4～2.4m。なお、P7-8とP15-16は、それぞれ建て替え後に前に伴う出入口口施設に関連する柱穴とみられる。

覆土 自然堆積で、大きく3層に分層された。上層の黒褐色土層は粘性が強く、土器片・炭化物等を多く含んでいた。

炉跡 床面中央やや西寄りで確認された不整楕円形の地床炉で、長軸1.35m・短軸0.8m・深さ12cm。中央部には川原石2点が置かれていた。

出土遺物 (第52～54・95・96図)

石器 竪穴規模のわりに土器は多く、図示しえたのは44点である。いずれも覆土中の出土である。

1～22は文様を有するものである。1は推定口径35cm・残存高32cmの深鉢形土器で、4単位の大きな波状口縁を有する。口縁直下と頸部は半截竹管等による3条の連続爪形文で区画し、同様な手法で内部に菱形文が施される。胴部は2段RL・LRの羽状縄文で、菱形を構成している。2～4は櫛歯状工具による細かい波状文や鋸歯文が施されるもので、波状口縁の3は波頂部に小円孔が穿たれている。5～7は連続爪形文が施されるもので、7は1と同一である。8～22は半截竹管もしくは棒状工具等による様々な沈線文が施されるものである。8・9・12～14・18・22は3本一組の棒状工具により波状文・平行線文等が描かれるもので、12には菱形文と円弧文の組合せ、13の口縁直下には半截竹管による梯子状文がみられる。18は推定口径14cmの小型土器で、波状文と横位沈線が交互に施される。10・11・17・20・21は2本一組の棒状工具により施文されるものである。10は推定口径50cmを超えるとみられる大型の波状口縁で、口縁直下に断続的な横位沈線や鋸歯文が施される。11は同一個体である。17・

20・21は平行沈線と波状文が交互に施されるもので、部分的にコンパス文状を呈する。15は半截竹管等による菱形文、16は円形竹管文、19は渦巻文・格子目文がみられる。

23～44は地文のみのものである。23は推定口径24cmの波状口縁で、無節1段Lのループ文が重畳する。24・28は同一個体とみられる胴部片であるが、ループ間の幅はやや長めである。25は推定口径14cmの小型波状口縁土器で、地文は2段RLの単節斜縄文である。26・27・29・30は単節斜縄文のもので、26は0段多条、27・29・30は2段RLと2段LRの羽状縄文である。また29の口縁部には補修孔がみられる。31～38は附加条縄文が施されるものである。33は2段LRの軸繩に0段Lを左巻きした附加条2種縄文である。他はいずれも附加条1種であり、32・35は2種類の附加条1種縄文で羽状を構成している。39・40は撚糸文が施されるもので、39は葎瓦状、40は網目状である。43・44は上げ底の底部である。

石器 図示しえたのは、石鏃1点・磨石19点・石皿1点の計21点である。

J11号竪穴住居跡(第21・22図)

位置 E-28～F-28グリッド。住居・建物跡群の中では北西寄りに位置し、南西斜面部からは20m以上の距離にある。

重複関係 3棟の長方形大型建物跡(1・2・16号)と重複する。また本住居跡は、柱穴や炉の状況等から少なくとも1回の建て替えが窺える。

規模・形状 平面形は隅丸長方形であるが、他の竪穴住居跡に比べて角の丸みは少ない。主軸方向はN-19°-Wで、大きさは南北が9.6m・東西が7.1m(最終段階)である。

壁・壁溝 確認面からの深さは20～25cmで、立ち上がり角度は緩やかである。壁溝は認められないが、南辺の数十cm内側には建て替え前の壁柱穴とみられる小ピット列が確認できる。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、特に炉の周辺を中心に堅く踏み締められている。

柱穴 位置関係や深さから当初の主柱穴はP1～6の6本で、直径34～42cm、深さ44～105cm。柱間は南北5.1m、東西2.1～3.7mで、P3がかなり内側に配されている。建て替え後の主柱穴はP7～12の6本で、直径30～44cm、深さ44～93cm。柱間は南北5.8m、東西2.3～3.3mで、P7がかなり内側に配されている。なお、建て替え前のP1～6はいずれもロームブロックを多く含んだ土でしっかりと埋められていた。

覆土 1・2号長方形大型建物跡との重複により部分的に攪乱を受けているが、本住居跡は自然堆積で大きく3層に分層された。下層の第2層には多量のロームブロックが含まれていた。

炉跡 炉跡は床面やや北寄りから確認されている。炉1は不整楕円形の地床炉で、長軸145cm・短軸72cm・深さ9cm。建て替え後に伴うものであり、掘り込み内は焼土で埋め尽くされ、上層に長さ20cmほどの焼け焦げた川原石が確認されている。炉2も不整楕円形の地床炉で、長軸75cm・短軸56cm・深さ8cm。炉1に切られていることから、建て替え前に伴った炉とみられる。

出土遺物(第55・97・102図)

石器 図示しえたのは31点で、すべて覆土中の出土である。

1～16は文様を有するものである。1～8・16は棒状工具もしくは半截竹管等で沈線文等が施されるものである。1・8・16は、4本一組の棒状工具により波状文・押し引き文等が描かれる。2・5・7は半截竹管の平行線文である。3は櫛歯状工具による連続刺突文が施される。4は波頂部が肥厚する

波状口縁で、棒状工具による不規則な沈線文がみられる。5は地文が葎瓦状捺糸文である。9～13・15は半截竹管等による連続爪形文が施されるもので、13はコンパス文風波状文が組み合わせられる。14の頸部には、円形竹管文が列状に配されている。12の地文は網目状捺糸文である。

17～31は地文のみのもで、17～23は縄文を地文とするものである。17は波状口縁で、単脚斜縄文と前々段反撚で羽状縄文を構成している。19と22は2段LRと2段RLの羽状縄文である。24～31は捺糸文を地文とするものである。24～27・29は縄を2本一組で巻いたもので、27と29は右巻きと左巻きで羽状を構成している。30は1段Rの縄を3本一組で巻いたもので、31は1段Rの細い縄を使用した網目状捺糸文である。

石器 図示したものは、石鏃1点・石匙1点・磨石6点・石皿2点の計10点である。

J12号竪穴住居跡（第23・24図）

位置 E-28～E-29グリッド内。今回発見された住居跡の中で最も大きいJ5号竪穴住居跡の南西に付随するような位置で確認されている。J5号竪穴住居跡同様に台地上平坦部のほぼ中央に位置し、中央広場の墓坑群・土坑群に直接的に面している。

重複関係 本住居跡はJ13号竪穴住居跡と9号方形建物跡と重複している。先後関係は、切り合い状況からJ13号竪穴住居跡→本住居跡→9号方形建物跡である。また南東にはJ4～7号掘立柱建物跡の一群が近接しているが、これらはJ13号竪穴住居跡を切っているものと判断される。なお、本住居跡自体も1ないし2回の建て替えがみられる。

規模・形状 平面形は均整のとれた隅丸長方形で、隣接するJ5号竪穴住居跡を一回り小さくしたような形である。また主軸方向もN-28°-Wで、ほぼJ5号竪穴住居跡と同じである。建て替えによって若干の差異はあったと思われるが、最終的平面規模は、長軸10.1m、短軸6.6mである。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは17～25cmとやや浅めで、立ち上がりも緩やかである。壁溝は認められないが、壁下には建て替え毎に小ピット列が巡らされた様子を窺うことができる。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、炉の周辺を中心によく踏み締められているが、北辺から南辺に向かって緩やかに傾斜（高低差約10cm）している。

柱穴 深さや位置関係及び埋土の状況等から、P1～6の6本が建て替え後・最終段階の主柱穴とみられる。これら主柱穴は直径38～50cm、深さ73～114cmで、柱間は東西が3.4m前後、南北が5.8mである。なおP1・3・4の底面には、直径15～20cmほどの柱の当たり痕跡が認められる。P7～10は建て替え前の主柱穴で、直径36～50cm、深さ68～104cm。これらはP1・4と組んで6本主柱であったものとみられる。さらにP11・12・14など、堅く埋め戻された古めの柱穴も何本か確認されていることから、建て替えが複数回あった可能性が考えられる。

覆土 自然堆積で、大きく3層に分層された。第1層及び2層には、広範囲にわたってオニグルミ等の堅果類の炭化物が確認されている。

炉跡 炉1は床面中央やや北よりで確認された地床炉で、長軸84cm・短軸70cm・深さ7cm。建て替え後・最終段階にともなうものとみられ、底面からは焼け焦げた石皿の破片が出土している。炉2は長軸105cm・短軸72cm・深さ12cmの地床炉で、炉1に切られていることから建て替え前に伴うものと考えられる。

出土遺物（第56・98・99図）

土器 図示したのは42点で、ほとんどが覆土中からの出土である。

1～29は文様を有するものである。1～15は棒状工具もしくは半截竹管等で沈線文を施すものである。1・5・13は3本一組の棒状工具で波状文を施すもので、1には円形刺突文が組み合わされる。2・6・12は4本一組の棒状工具で波状文を施すもので、12には同工具による連続刺突文もみられる。3・4・7～10・14・15は半截竹管の平行沈線が施されるものである。3は波状口縁で、平行沈線が円弧状に描かれ、口唇部に刻みがみられる。16～23は連続爪形文が施されるものであるが、磨り消しとの組合せが多くみられる。17は波状口縁に沿って連続爪形文と磨り消しが施され、波頂部には隆帯が貼附される。28は連続爪形文と磨り消しで米字状文を描くもので、交点には円文がみられる。24は4本一組の棒状工具による連続刺突文である。25～27はコンパス文が施されるもので、同一個体とみられる。29は格子目文である。

30～42は地文のみのものである。30～36は地文が縄文のものである。30は波状口縁で、口縁直下の無文帯以下に2段LRによるループ文が重層する。31・32は反撚の縄文である。33・35は羽状縄文、36は附加条1種の縄文である。37～41は撚糸文を地文とするものである。37・38は網目状撚糸文、41は葺瓦状撚糸文である。

石器 図示しえたのは、石鏃1点・石匙1点・磨石13点・石皿2点の計17点である。

J13号竪穴住居跡（第23・24図）

位置 E-29グリッド。J12号竪穴住居跡により北西部を大きく切られ位置にある。

重複関係 J12号竪穴住居跡の他J6号掘立柱建物跡・79号土坑等と重複関係にあり、いずれも切られているものとみられる。なお本住居跡も建て替えがあった可能性が考えられる。

規模・形状 平面形は隅丸長方形で、南北5.65m・東西が4.95m。主軸方向はN-30°-Wで、大型のJ5号竪穴住居跡とほぼ同じである。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは15cm前後。東辺及び西辺にはやや深め（深さ20～30cm）の壁溝が巡り、北辺及び南辺は小ピット列となっている。なお、南辺中央には間隔50～70cmで対応するピットの重複がみられ、出入り口の施設に関したものとみられる。

床面の状況 中央から北西部の大半がJ12号竪穴住居跡に切られているが、残存部分から判断して床面はほぼ平坦だったものとみられる。

柱穴 位置関係や深さ等から主柱穴はP1～4の4本で、直径25～30cm、深さ42～72cm。P3・4等の主柱穴は付け替えた可能性があることや出入り口の柱穴が重複していることから、建て替えがあったものとみられる。

覆土 残存部分から判断する限り自然堆積で、大きく2層に分層された。

炉跡 床面中央やや北寄りに直径50cmほどの不整形の焼土が確認されている。J12号竪穴住居跡に切られているが、位置的にみて本住居跡の炉の底面のみが残されたものと思われる。

出土遺物（第59・103図）

土器 出土量は極めて少なく、図示しえたのは3点のみである。

いずれも地文のみのものであり、1は2段LRの単節斜縄文、2は2段LR・RLの羽状縄文で菱形構成、3は1段Rの縄を2本一組で巻いた撚糸文である。

石器 図示しえたのは磨石1点である。

J14号竪穴住居跡（第25図）

位置 E-29グリッド。本集落跡最大のJ5号竪穴住居跡のすぐ南側で、J12・13号竪穴住居跡等と並立するような位置関係にある。

重複関係 他の住居・建物跡等との直接的な重複は認められないが、本住居跡は重複する5～7号長方形大型建物跡の一面にあり、7号長方形大型建物跡の外周溝に僅かに切られている。

規模・形状 平面形は南辺がやや長い隅丸長方形で、大きさは長軸5.7m・短軸4.1m。主軸方向はN-30°-Wで、J5号竪穴住居跡とほぼ同じである。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは10～15cmと浅めで、立ち上がりの角度は全体に緩やかである。壁溝はみられないが、部分的に小ピット列（壁柱穴）が巡らされた様子がみられる。

床面の状況 床面は全体的にはほぼ平坦で、炉の周りを中心に良く踏み固められているが、南辺に向かって緩やかに傾斜（高低差7～8cm）している。

柱穴 位置関係や深さ等からP1～6の6本が主柱穴で、直径24～30cm、深さ24～50cm。柱間は長軸2.7m・短軸1.85mで、長軸方向の中間柱が一本分内側に入っている。なおP3及びP6の近くにはそれぞれ深めの柱穴が確認されていることから、建て替えがあった可能性も考えられる。

覆土 自然堆積で、大きく2層に分層された。上層の暗褐色土はかなり硬質であった。

炉跡 床面からは3カ所で焼土が確認されたが、位置的に炉1が中心的な炉とみられる。不整楕円形の地床炉で、大きさは長軸45cm・短軸32cm・深さ4cm。なお、他の2カ所は掘り込みがほとんど認められない。

出土遺物（第60図）

土器 出土量は極めて少なく、図示したのは2点のみである。

1は波状口縁で、全体に半截竹管による平行沈線を施し、口縁直下にはコンパス文が配される。2は頸部片で、2段LRによるループ文が重層する。

石器 出土無しである。

J15号竪穴住居跡（第26図）

位置 E-29グリッド。J12号竪穴住居跡と1・2号長方形大型建物跡にはさまれた位置で、重複するJ4～7号掘立柱建物跡群に近接している。

重複関係 J2号掘立柱建物跡及び80号土坑に切られている。

規模・形状 平面形は不整楕円形で、大きさは長軸3.8m・短軸2.7m。主軸方向はN-56°-W。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは8～10cmと浅めで、立ち上がり角度も全体に緩やかである。壁溝及び小ピット列（壁柱穴）は認められない。

床面の状況 床面はほぼ平坦であるが、あまり踏み固められた様子は認められない。

柱穴 位置関係や深さ等から主柱穴と思われるのはP1（直径20cm・深さ40cm）とP2（直径28cm・深さ28cm）の2本程度であり、小屋組はかなり簡略なものであったとみられる。

覆土 自然堆積で、大きく3層に分層された。

炉跡 床面やや北西寄りから不整楕円形の焼土が確認されている。大きさは長軸32cm・短軸25cmで、掘り込み等は伴わず、短時間の使用だったものと思われる。

出土遺物（第104図）

土器 出土無しである。

石器 図示しえたのは石皿1点である。

J16号竪穴住居跡(第27図)

位置 F-29～G-29グリッド。南西緩斜面までは10数mの距離で、玉類や狹状耳飾り等を出土した墓坑群に近接している。

重複関係 本住居跡は多くの住居・建物跡と重複関係にあり、J17号竪穴住居跡を切るとともに10～12号長方形大型建物跡及び1号方形建物跡等に切られている。なお本住居跡も、拡張を伴う建て替えが確認されている。

規模・形状 平面形は隅丸長方形で、大きさは建て替え前が長軸6.6m・短軸4.5m、建て替え後が長軸9.2m・短軸5.4m。主軸方向はN-85°-Wで、本遺跡の同形の竪穴住居跡の中では長軸が最も東西方向に傾いている。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは25～28cmで、立ち上がり角度はやや緩やかである。建て替え前、建て替え後ともに小ピット列(壁柱穴)が基本的に巡らされ、コーナー付近等で部分的には壁溝も認められる。

床面の状況 床面はほぼ平坦であり、炉周辺を中心によく踏み固められている。

柱穴 位置関係や深さ等から建て替え後の主柱穴がP1～6の6本で、直径26～40cm・深さ62～78cm。柱間は長軸6.05m・短軸2.4m。また建て替え前の主柱穴は、P1は同位置でP7～11を合わせた6本であったものと考えられる。これら建て替え前の主柱穴は直径22～32cm・深さ43～75cmと一回り細めで、柱間は長軸4.1m・短軸2.8m。ロームブロックをやや多く含む土で埋め戻されていた。

覆土 自然堆積で、大きく3層に分層された。上層の黒色土層は、炭化物・ロームブロックを含むしまりの強い覆土であった。

炉跡 床面中央やや西寄りで確認された炉1は、建て替え後に伴うものとみられる。平面形は不整形円形で、大きさは長軸100cm・短軸65cm・深さ7cm。やや奥部に長さ34cmの川原石が置かれていた。この炉1に切られた炉2が建て替え前に伴うものと思われ、大きさは一回り小さい。

出土遺物(第57・58・100図)

土器 図示しえたのは36点であり、ほとんどが覆土中の出土である。

1～17は文様を有するものである。1～4は同一個体と思われる大きな波状口縁の土器である。半截竹管による平行沈線が施され、菱形文が描かれる。5～7も同一個体とみられる波状口縁土器で、円形竹管文列が施される。8～9も同一個体とみられる波状口縁土器で、半截竹管による爪形文が施される。波頂部には隆帯が貼附されている。11・12も連続爪形文が施されるもので、11には渦巻文がみられる。13～17は棒状工具もしくは半截竹管等により波状文・平行線文・連続刺突文等が施されるものである。13・14は3本一組、16は4本一組の棒状工具をそれぞれ使用している。

18～36は地文のみのものである。18～25・31・32は縄文を地文とするものである。18・22～24は2段RL・LRの羽状縄文で、22は菱形構成となっている。20は反摺RRの縄文とみられる。25は2段LRのループ文である。31は附加条1種の羽状構成、32は2段RLに1段Rを2本一組で右巻きした附加条2種縄文である。26～30・33～35は燃糸文を地文とするものである。26・27は1段LとRを、28・29は1段Lを、33は1段Rをそれぞれ2本一組で巻いたものである。35は2種類の燃糸文(1段L

2本一組と1段R2本一組)を施したものである。34は1段Lを用いた葺瓦状燃糸文である。

石器 図示しえたのは、磨石3点・石皿2点の計5点である。

J17号竪穴住居跡(第28・29図)

位置 F-28～29グリッド。南西緩斜面まで15～16mの距離に位置し、中央広場の玉類や秩状耳飾り等を出土した墓坑群に最も近接した竪穴住居跡である。

重複関係 本住居跡は、J16号竪穴住居跡、2・10・11号長方形大型建物跡・1号方形建物跡・J1号掘立柱建物跡等、非常に多くの住居・建物跡と重複関係にあるが、これらすべてに切られている。

規模・形状 平面形は非常に均整のとれた隅丸長方形で、北辺が若干短い。大きさは長軸13.5m・短軸7.5mとかなり大型で、主軸方向はN-28°-W。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは8～16cmと浅めで、立ち上がり角度も緩やかである。壁溝は認められないが、小ピット列(壁柱穴)が50～60cmの間隔でほぼ全周している。この小ピット列は深さもしっかりしており、特に東壁下では深さ60cmを超えるものも含まれている。なお、北西コーナー内側に古い壁溝と思われるものが鍵の手状に確認されているが、全体の繋がり不明である。

床面の状況 床面はほぼ平坦であり、炉周辺を中心によく踏み固められている。

柱穴 位置関係や大きさ・深さ等からP1～6の6本が支柱穴で、直径65～90cm・深さ68～102cmと竪穴住居跡の柱穴としてはかなり大規模なものである。底面の大きさからみると直径30cmに近い柱が使用されていたものと推定される。また柱間は長軸9.1m・短軸4.3mで、非常に整った長方形に配されている。なお埋土の堆積状況からは柱痕跡は認められず、埋め戻しが行われていた可能性も考えられる。

覆土 自然堆積で、大きく3層に分層された。下層の褐色土層は、ローム粒子を多く含む粘性の強い覆土であった。

炉跡 床面中央北寄りで2基の炉が確認されている。炉1は不整楕円形の地床炉で、大きさは長軸86cm・短軸68cm・深さ14cm。床面やや北寄りに割れた川原石が確認されている。また炉2は、83号土坑に切られているが、やはり不整楕円形の地床炉で、大きさは残存長軸70cm・短軸54cm・深さ10cm。なお、本住居跡の床面にはこの他に大小10カ所ほどの焼土痕跡が確認されている。

出土遺物(第61・101・105図)

土器 竪穴規模のわりに土器は少なく、図示しえたのは7点で、すべて覆土中の出土である。

1～4は文様を有するものである。1は波状口縁の破片で、口縁直下に斜位の短沈線、その下部に半截竹管による相互刺突の連続爪形文がみられる。2・3には半截竹管による波状文、さらに2・4には4本一組の棒状工具による連続刺突文が施される。5・6は地文のみの口縁部で、5は2段LRの単節斜縄文、6は2段LRに1段Lを巻いた附加条1種縄文である。なお、7は土器片を整形した土製円盤である。

石器 図示しえたのは、石鏃2点・磨石12点・石皿1点の計15点である。

J18号竪穴住居跡(第30図)

位置 G-30グリッド。南西緩斜面までは約10mの距離で、本集落を載せる台地平坦部が僅かに膨らみを増す位置にあたる。

重複関係 本住居跡は、13・15号長方形大型建物跡、7・8号方形建物跡、J8・10・19号掘立柱建物跡等、非常に多くの建物跡と重複関係にあるが、これらすべてに切られている。なお本住居跡も建て替えがあったものとみられる。

規模・形状 平面形はやや不整な隅丸長方形で、大きさは長軸7.3m・短軸5.9m。主軸方向はN-17°-Wである。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは10～15cmと浅めで、立ち上がり角度はかなり緩やかである。壁溝は認められないが、壁下には小ピット列(壁柱穴)がほぼ全周している。また、多くの建物跡が重複しているため判別しがたいところもあるが、壁下よりもやや内側を巡る小ピット列もみられ、建て替え前に伴うものと考えられる。

床面の状況 床面はほぼ平坦であり、炉周辺を中心によく踏み固められているが、多くの建物跡によって切られているため、損傷が著しい。

柱穴 位置関係や深さ等から主柱穴はP1～6の6本と考えられ、直径28～37cm・深さ55～68cm。柱間は長軸3.6m・短軸3.35mで、長軸の中間柱P2・5がかなり南寄りではほぼ1本分内側に入るのが特徴である。またP7～P10も主柱穴として十分な大きさ(直径25～48cm・深さ40～61cm)であることから、4本主柱の時期も想定される。なお、P6には穴の肩部に柱の安定を支えているような川原石が3個確認されている。

覆土 自然堆積で、大きく3層に分層された。

炉跡 床面中央やや北寄りで確認された炉1は不整楕円形の地床炉で、大きさは長軸58cm・短軸46cm・深さ5cmとやや小型である。本住居跡では他に2カ所で焼土が確認されている。

出土遺物(第62・106図)

土器 図示しえたのは12点で、いずれも覆土中の出土である。

1～8は文様を有するものである。このうち1～4は、半截竹管により平行沈線・コンパス文風波状文等を施すものである。波状口縁である1は、波頂部に小円孔が穿たれ、平行沈線が縦位にもみられる。5の口縁部は押圧を有する横位隆帯と連続爪形文が巡るもので、浮島式とみられる。6～8は連続爪形文により米字状文が描かれている。

5～6は地文のみのものである。9・10・12は2段RLの単節斜縄文、11は2段RLに1段Rを左巻きした附加条1種縄文である。なお6と12は繊維の含有量が微量である。

石器 図示しえたのは10点で、すべて磨石である。

J20号竪穴住居跡(第31・32図)

位置 G-29グリッド。本集落を載せる台地平坦部の西端で、南西緩斜面どぎりどりに位置する。

重複関係 J21号竪穴住居跡を切るとともに、先後関係は不明であるが6号方形建物跡と重複する。なお本住居跡も建て替えが認められる。

規模・形状 平面形は整った隅丸長方形で、大きさ(建て替え後)は長軸11.1m・短軸6.7m。北辺に対して南辺が50cm程長く、ややバチ形を呈する。主軸方向はN-45°-Wである。なお建て替

え前も平面形はほぼ同形で、大きさは、やや内側に巡る小ピット列から判断し、長軸9.5m・短軸5.3mと一回り小さい。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは23～33cmで、立ち上がり角度は比較的緩やかである。壁溝は認められないが、壁下には小ピット列（壁柱穴）がほぼ全周している。建て替え後の小ピット列の間隔は50～100cmで、長軸方向はややまばらになっている。これに対し内側に巡る建て替え前の小ピット列は、やや間隔が狭くなっている。なお、この建て替え前の小ピット列にはピットどうしが重複する部分もみられることから、建て替えが複数回あった可能性も考えられる。

床面の状況 床面はほぼ平坦で炉周辺を中心に踏み固められているが、北西方向、即ち台地斜面方向に向かって緩やかに傾斜しており、最大で10cmほど下がっている。

柱穴 位置関係や深さ等から建て替え後の支柱穴はP1～6の6本と考えられ、直径40～65cm・深さ53～96cm。柱間は長軸7.1m・短軸3.8m。また建て替え前の支柱穴はP1が共用で、これにP7～11を加えた6本であり、直径50～65cm・深さ50～96cm。柱間は長軸6.35m・短軸2.9m。なおP7～11の最上層黒色土は、非常に硬く踏みしめられていた。

覆土 自然堆積で、大きく4層に分層された。全体にローム粒や炭化物を多く含み、特に第1・2層からは多量の土器片・石器片等が出土している。

炉跡 床面中央やや北寄りから重複して2つの炉跡が確認されている。炉1は建て替え後に伴う楕円形の地床炉で、大きさは長軸92cm・短軸82cm・深さ13cm。北寄りに長さ30cmほどの川原石が置かれていた。この炉1に切られたものが炉2で、やはり楕円形の地床炉。大きさは推定で長軸120cm・短軸100cm・深さ8cmと一回り大きく、北寄りにはやはり川原石が置かれていた。

出土遺物（第64～70・107・108図）

土器 図示しえたのは116点と住戸跡の中で最も多いが、ほとんどが覆土中の出土である。

1～58は文様を有するものである。1～10・13～15及び41は半截竹管等により平行沈線・波状文等が施される。1は推定口径19cmの平口縁で、口縁直下に3条の平行沈線を施し、以下波状文が重層する。2及び6～10は半截竹管による横位の平行沈線と波状文の組合せである。4は口縁直下に4本一組の平行沈線が巡らされる。5は大型の波状口縁で、撚糸文（1段Rの繩の一本巻きと2本一組巻き）の地文上に2本一組の棒状工具による平行沈線と波状文が施される。15は半截竹管により大ぶりの鋸歯文が描かれる。41は大型の波状口縁（推定口径36cm）で、2本一組の棒状工具を用いた5条の平行沈線により山形文が施される。3も同様な施文とみられる。

11・12・16～21・22～40及び42・43は棒状工具等による連続刺突文が施されるものである。11は8本一組の櫛歯状工具で細かな連続刺突文と波状文が施される。12には2本一組の棒状工具による鋸歯文とやや雑な連続刺突文がみられる。16は8単位の波状口縁とみられる。4本一組の棒状工具を斜めに用いた連続刺突文で、横位文と波状文が交互に繰り返されている。17は小型の波状口縁で、口縁部の2段のコンパス文を施した後、4本一組の棒状工具による連続刺突文を巡らしている。繊維の含有量が少なく、大木系の可能性がある。18も小型の波状文（推定口径20cm）で、5本一組の連続刺突文が重層する。19は平口縁と思われる、4本一組の櫛歯状工具による波状文・刺突文（列点文）が口縁直下と頸部に施される。口縁部の地文は2段RL環付末端のループ文である。20は波状口縁で、2本一組の棒状工具による連続刺突文とやや雑な鋸歯文が施される。21は5本一組の棒状工具による連続刺突文が重層する。24はやや小型（推定口径22cm）の鉢形で、口縁部は短く内傾する。短い口縁

部には棒状工具による4条の連続刺突が施され、以下2本一組の波状文と4本一組の連続刺突文が交互に巡らされる。23・35・36は同一個体の胴部とみられ、薄手で入念な作りである。25・26は器台状の特異な器形で、薄手で丁寧な作りである。底径は14cm。2本一組の細めの棒状工具（半截竹管か）による連続刺突文が重層する。27は小突起を持つ口縁部で、4本一組の細めの棒状工具により上半部には波状文と平行沈線、下半部には連続刺突文が施される。28・32・34は3本一組、29・30は4本一組の棒状工具による連続刺突文である。31・33はやや太めの棒状工具による連続刺突文で、31は渦巻文が描かれている。38～40は底部で、いずれも横位の連続刺突文が施されている。42・43は同一個体とみられ、格子目文・鋸歯文とともに連続刺突文が施されている。

44～58は連続爪形文が施されるものである。44・46・56はやや間隔の粗い連続爪形文で、46は大型の波状口縁に半截竹管で山形文を描いた後、部分的に施されたものである。45は推定口径18cmの小型の口縁部で、半截竹管による3条の連続爪形文と鋸歯文が施される。47は大型の波状口縁で、4～5条単位の連続爪形文により山形文もしくは菱形文が施される。48・53・54は同一個体の大型波状口縁で、2～3条の連続爪形文で菱形文が描かれたものとみられる。49・57等の口縁部にも連続爪形文による菱形文が確認される。

59～116は地文のみのものであり、そのうち59～97は縄文を地文とするものである。59は推定口径26cmの平口縁で、1段Lの無節縄文が施される。無節縄文を地文とするものは、他に60・67・90がみられ、90はやや上げ底（底径8.2cm）である。62は頸部がくびれる平口縁（推定口径28cm）の土器で、2段RLと2段LRを用いた羽状縄文が施される。この他61・64・65・68・71・76・78・79・95に同様の羽状縄文がみられるが、95には0段多条、71・76・79等には太めの縄が用いられている。なお、61には補修孔と思われる小穴がみられる。次に63は推定口径27cmの平口縁で、前々段反摺（3段LRR）の複節斜縄文が施される。他に80～83・87が、同様な前々段反摺の縄を用いたものと思われる。66・72～75・84～86・88・89は単節斜縄文のものであるが、85縄文が細かく織維も少ないことから諸磯式とみられる。なお74は0段多条の2段LRが用いられている。69・70・77・91～94・96・97は附加条縄文のものである。69は2種類の附加条1種（2段LR+1段R2本一組、2段RL+1段L2本一組）を用いて羽状に構成している。92～94・97も附加条1種縄文が施されている。77は2種類の附加条2種（1段R+1段R2本一組、1段L+1段R2本一組）を用いたものである。附加条2種は96にもみられる。

100～115は燃糸文を地文とするものである。100は内湾気味に開く波状口縁で、細めの1段Rを4本一組で巻いた燃糸文が全面に施される。101・102も同様に1段Rを4本一組で巻いたものである。109～114は1段R又は1段Lを3本一組で巻いた燃糸文である。同じく108・1152本一組で巻いた燃糸文、103～107は一本巻きの燃糸文である。なお116の高坏状土器は無文である。

石器 図示したものは、石鏃8点・石匙2点・剥片2点・磨石23点の計35点である。

J21号竪穴住居跡（第31・32図）

位置 G-30グリッド。南西緩斜面の縁辺部。

重複関係 本住居跡は、J20号竪穴住居跡に大きく切られている。

規模・形状 J20号竪穴住居跡の床面に残された小ピット列（壁柱穴）から推定して、平面形はほぼ方形に近い隅丸長方形で、大きさは長軸5.2m・短軸5.0m。主軸方向はN-60°-Wである。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは20～25cmで、J-20号竪穴住居跡の床面より若干浅い。壁溝は認められないが、小ピット列（壁柱穴）が50～100cmの間隔でほぼ全周している。

床面の状況 床面の残りは僅かであるが、ほぼ平坦でよく踏み固められている。

柱穴 位置関係や深さ等から主柱穴はP12～15の4本と考えられ、直径24～28cm・深さ33～74cm。柱間は長軸・短軸とも3.35mで、ほぼ方形となる。なお、南辺のP16と17は深さがいずれも60cm前後と深く、出入口施設に伴う柱穴とみられる。

覆土 自然堆積で、大きく3層に分層された。下層には焼土・炭化物が多く含まれていた。

炉跡 P15の近くに焼土が確認されているが、本来の炉跡はJ20号竪穴住居の造成によって消失したものである。

出土遺物（第63・114図）

土器 図示したのは1点のみであるが、北壁寄りの床面直上の出土である。

1は口径19.8cm（推定）・底径8.8cm（推定）・器高15.2cmの小型の鉢形土器である。4単位の緩やかな波状口縁で、頸部が「く」の字にくびれる。地文は細めの1段Rを密に巻いた燃糸文で、口縁直下に横位の細い沈線、くびれ部に3本一組の棒状工具による連続刺突文が巡る。内面は非常に良く磨かれている。

石器 図示したのは磨石1点のみである。

J22号竪穴住居跡（第33・34図）

位置 G-31～H-31グリッド。中央広場の中心からは南方寄りに位置し、南西緩斜面部への落ち口付近に立地している。この辺りの住居・建物跡は中・小型のものが中心で、特に大型のものは認められない地域となっている。

重複関係 本住居跡はJ23号竪穴住居跡に切られている。すぐ北側にJ11～13掘立柱建物跡があるが、直接的な重複関係はみられない。なお、本住居跡は少なくとも1回の建て替えが認められる。

規模・形状 J23号竪穴住居跡の床面に残された小ピット列（壁柱穴）から平面形は隅丸長方形で、大きさは長軸7.0m・短軸4.6m。主軸方向はN-32°-Wである。

壁・壁溝 確認面からの深さは25～30cmで、立ち上がり角度は緩やかである。壁溝は認められないが、少し間隔のまばらな小ピット列（壁柱穴）が確認できる。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、特に炉の周辺を中心に堅く踏み締められている。

柱穴 位置関係や深さ等から主柱穴はP1～6の6本で、直径24～28cm、深さ55～67cm。柱間は長軸3.9m、短軸1.6～2.4mで、やや「ハ」の字に開いている。なおP7・8は、いずれも上層が硬く踏み固められた古い柱穴であり、大きさも深さももしっかりとしていることから建て替え前の主柱穴と考えられる。

覆土 自然堆積で大きく3層に分層された。全体に炭化物が多く含まれていた。

炉跡 床面中央やや北寄りから確認されている不整楕円形の地床炉で、長軸102cm・短軸74cm・深さ8cm。焼土とともに川原石2個が確認されている。

出土遺物（第71・72・109図）

土器 図示したのは43点で、すべて覆土中からの出土である。

1～13は文様を有するもので、1～8・13は沈線文が施される。1・2は同一個体とみられる波状口

縁で、3本一組の棒状工具で平行沈線・波状文が施される。同様に3は4本一組、4・5は3本組、6は2本一組の棒状工具による波状文・平行沈線がみられる。また7・8・13は半截竹管による平行沈線が施されている。9～11は半截竹管を用いた連続爪形文が施されるもので、10・11には渦巻文風の曲線文が、12には米字状文がみられる。

14～43は地文のみのもので、14～31は縄文を地文とするものである。14は内湾気味に開く波状口縁で、2段LRと2段RLの羽状縄文が施される。18・19にも同様の羽状縄文がみられる。15・17・22・23・29・30は1段Lもしくは1段Rの無節縄文が施されるもので、22は羽状構成である。20・21・25は同一個体とみられ、3段RLR・0段多条の環付末端によるループ文が重層する。同様に24・26は2段LRの環付末端によるループ文が施される。なお27・28は2段LLの反摺とみられる。32～42は燃糸文を地文とするものである。32・33・35～38・40は、1段Lもしくは1段Rを2本一組で巻いた燃糸文である。34・41は1段Lを3本一組で巻いた燃糸文である。39は1段L2本と1段R1本を3本一組で巻いた燃糸文である。42は1段Lの縄を用いた網目状燃糸文である。43は上げ底の底部で、2段LRの単節縄文が施される。

石器 図示したものは、磨石8点・石皿2点の計10点である。

J23号竪穴住居跡(第33・34図)

位置 G-31～H-31グリッド。中央広場の南方で、南西緩斜面部への縁辺に位置する。近辺にはほぼ同規模の竪穴住居跡が数棟みられ、棟を揃えるように並んでいる。

重複関係 本住居跡はJ22号竪穴住居跡を切って建てられている。また直接的な重複関係はないが、J6号竪穴住居跡 J24号竪穴住居跡がかなり近接している。なお本住居跡も支柱穴や壁溝等の状況から少なくとも3回以上の建て替えが認められる。

規模・形状 平面形は長軸がやや短めな隅丸長方形で、建て替えを繰り返しての最終的な規模は、長軸7.7m、短軸6.7m。また壁溝から推定される最小規模は長軸5.5m、短軸5.0mで、おそらくこれが当初の大きさとみられる。主軸方向はN-31°-Wである。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは20～42cmで、立ち上がりはやや緩やかである。壁溝が三重ないしは四重に巡らされていたが、内側のものは埋め戻されていたことから、建て替えを繰り返しながら同心円状に床を広げていったものと思われる。これら壁溝の深さは10～20cm前後と決して一様ではなく、所々には30cmを超えるピット状の部分もみられる。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、炉の周辺を中心によく踏み締められている。

柱穴 位置関係や深さ及び重複関係等から、本住居跡の支柱穴は以下のように4時期の変遷と組み合わせが考えられる。なお支柱穴本数は、4本(1・2期)から6本(3・4期)と選んでいる。

I期 支柱穴はP9～12の4本で、直径36～45cm・深さ68～86cm。柱間は長軸が2.85m、短軸が1.9m。上層は埋め戻され、非常に硬く踏みしめられていた。

II期 支柱穴はP13～16の4本で、直径42～55cm・深さ80～106cm。柱間は長軸が3.1m、短軸が2.65m。大きさ・深さも最もしっかりとした組み合わせである。

III期 支柱穴はP17～22の6本で、直径28～46cm・深さ50～93cm。柱間は長軸が3.7m、短軸が3.3mで、長軸列東側の中央柱は1本分内側に配されている。なお柱穴の上層は埋め戻され、非常に硬く踏みしめられていた。

IV期 主柱穴はP23～28の6本で、直径26～38cm・深さ56～82cm。柱間は長軸が4.35m、短軸が2.9mで、長軸列の中央柱位置はかなり南寄りで一本分東側に配されている。なお柱穴の埋土には埋め戻されたり、踏みしめられたりした様子はみられない。

覆土 自然堆積で、大きく4層に分層された。覆土全体に炭化物が多く含まれていた。

炉跡 炉1は床面中央やや北よりで確認された不整形円形の地床炉で、大きさは長軸118cm・短軸83cm・深さ10cm。本住居跡は数回にわたって建て替えされたが、当初からこの炉1が継続的に使われていたものとみられる。炉2は炉1のさらに北側で確認された楕円形の地床炉で、長軸62cm・短軸55cm・深さ12cm。中央部に焼けた川原石が残されており、本住居の最終段階の炉であったものとみられる。

出土遺物 (第73・74・110～112図)

土器 図示しえたのは51点で、すべて覆土中の出土である。

1～31は文様を有するものである。1～11及び18～26は沈線文を主体としたものである。1・2は同一個体で、緩やかな波状口縁の波頂部に小突起を有する。半截竹管により頸部を粗い連続爪形文、小突起部を縦位の平行沈線でそれぞれ区画し、口縁部全体にはコンパス文風波状文を7～8段に渡って施している。3・20・22～24は棒状工具による波状文・平行沈線を施すもので、3は5本一組、20は4本一組、22～24は3本一組である。4・19・25・26は半截竹管による平行沈線で、19は菱形文が描かれる。5～7はコンパス文が施される口縁部片であるが、円形刺突文との組合せがみられる5は大木系と思われる。8は3本一組の棒状工具による連続刺突文がみられる。9～11は同一個体で、半截竹管によるコンパス文風波状文・平行沈線が施される。18は3本一組の棒状工具により格子目文が施される。12～17及び27～30は、半截竹管で連続爪形文が施されるものである。12～14は同一個体の大型波状口縁で、連続爪形文で菱形が描かれたものと思われる。15～17は押し引きによる連続爪形文で、16は渦巻文が描かれる。31の底部は、不明瞭ながら棒状工具による波状文が施されたものと思われる。

32～51は地文のみのものである。32～46は縄文を地文とするもので、32・33・37・41～44は2段RL又は2段LRの単節斜縄文が施される。なお41は2段RLで0段多条である。34・36は2段RLと2段LRの羽状縄文である。35・38はいずれも1段の縄のループ文が重層する。40は1段Lと1段Rによる羽状縄文、また39・45・46は附加条1種縄文による羽状縄文である。47～51は撚糸文を地文とするものである。47・51は1段Lの縄を巻いた撚糸文、50は1段Lを2本一組で巻いた撚糸文である。48・49は網目状撚糸文で、48は1段Lの縄を使用している。

石器 図示しえたのは、石鏃3点・磨石18点・石皿3点の計24点である。

J24号竪穴住居跡 (第35・36図)

位置 H-31～32グリッド。中央広場の中心からは南方寄りに位置し、南西緩斜面部への落ち口に立地している。

重複関係 本住居跡は他の住居・建物跡との直接的な重複関係はみられないが、すぐ北にJ23号竪穴住居跡、またすぐ南にJ25号竪穴住居跡が近接しており、いずれの住居跡とも同時に建てない状況である。なお、本住居跡にも複数回の建て替えの痕跡が認められる。

規模・形状 平面形は均整のとれた隅丸長方形で、建て替えを繰り返しての最終的な規模は、長軸7.85

m、短軸5.7m。また壁下に巡る小ピット列(壁柱穴)から推定される最小規模は長軸5.9m、短軸3.65mで、おそらくこれが当初の大きさとみられる。主軸方向はN-30°-Wである。

壁・壁溝 確認面からの壁の深さは24～46cmで、立ち上がりはやや緩やかである。また西側の壁の残りが少ないのは、傾斜面に立地しているためである。壁溝は、建て替えを繰り返す中で一時的に設けられたが、当初及び最終的には小ピット列(壁柱穴)が巡らされていたようである。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、炉の周辺を中心によく踏み締められている。

柱穴 位置関係や深さ及び重複関係等から、本住居跡の支柱穴は以下のように4時期の変遷と組み合わせが認められる。なお壁は、2期目に壁溝が設けられるが、他は小ピット列(壁柱穴)で、基本的に建て替え毎に拡大していったものと考えている。

I期 支柱穴はP1～6の6本で、直径18～28cm・深さ52～71cm。柱間は長軸が2.8m、短軸が1.8m。上層は埋め戻され、非常に硬く踏みしめられていた。

II期 支柱穴はP7～12の6本で、直径20～32cm・深さ32～71cm。柱間は長軸が3.7m、短軸が1.8m。長軸列の中央柱がやや南寄りに配されている。

III期 支柱穴はP13～18の6本で、直径33～44cm・深さ52～84cm。柱間は長軸が4.5m、短軸が1.85mで、より縦長な配置になっている。

IV期 支柱穴はP15(III期のものを併用)及びP19～23の6本で、直径28～36cm・深さ52～84cm。柱間は長軸が4.65m、短軸が2.25m。なお、P24・25の2本は、斜め内側に穿たれている(深さ70～80cm)ことから、本期の支柱の補助柱穴と考えられる。

覆土 自然堆積で、大きく4層に分層された。覆土全体に炭化物が多く含まれていた。

炉跡 床面中央やや南寄りで確認された不整形円形の地床炉。大きさは長軸84cm・短軸60cm・深さ10cmで、北寄りに細長い川原石が置かれていた。なお、床面中央北寄りで焼土が2カ所ほど確認されており、古い時期の炉跡であった可能性も考えられる。

出土遺物(第75～77・113図)

土器 図示したものは32点で、すべて覆土中の出土である。

1～20は文様を有するものである。1～6は同一個体とみられ、平口縁で頸部がくびれる球胴系の土器である。いずれも4本一組の棒状工具により、口縁部には波状文と平行沈線が交互に、胴部には波状文がすき間無く施されている。7も平口縁とみられ、3本一組の棒状工具により、有節の平行沈線とコンパス文風波状文が施される。なお、20には4本一組の工具によるコンパス文風波状文がみられる。8は波状口縁とみられ、棒状工具による間隔の開いた連続刺突文がみられる。9は大型の波状口縁で、半截竹管の連続爪形文により山形文が施されるが、爪形文が無い部分があり、相互刺突文を意識したものか。12にも連続爪形文がみられる。10・11はいずれも棒状工具による波状文と平行沈線の組合せで、10は2本一組、11は4本一組である。13・14は円形竹管文がみられるものであるが、口縁部に小突起がある13は諸磯式とみられ、繊維も含まれない。15～18は棒状工具による波状文が施されるもので、それぞれ使用された工具は15が4本一組、16が3本一組、17・18が2本一組である。19は2本一組の工具による平行沈線と連続刺突文の組合せがみられる。

21～32は地文のみのもので、21～25・27・30・31は縹糸文のものである。21は推定口径31cmで、波状口縁の深鉢型である。2種類の縹糸文(1段R2本一組と1段L2本一組)により菱形を構成している。22～25は同一個体とみられ、21と同様に波状口縁(推定口径31cm)の深鉢型である。1段L

2本と1段R1本を3本一組で巻いた撚糸文が施されている。27は1段Rの縄を使用した網目状撚糸文である。30は上段に1段Rを3本一組で巻いた撚糸文がみられる。26の平口縁は、2段R・L Rの羽状縄文で、粘土の寄りが顕著にみられる。28は1段Lの無節斜縄文、29は2段L Rの単節斜縄文である。

石器 図示しえたのは、石鏃2点・挿器1点・磨石3点の計6点である。

J25号竪穴住居跡(第38図)

位置 H-32グリッド。中央広場の中心からは南方で、南西緩斜面部への落ち口に立地している。

重複関係 本住居跡は他の住居・建物跡との直接的な重複関係は認められないが、すぐ北側にJ24号竪穴住居が、またすぐ西側にはJ26号竪穴住居跡が、それぞれ隣接している。なお、本住居跡は建て替えが認められる。

規模・形状 平面形は整った隅丸長方形で、大きさは長軸6.35m・短軸4.45m。主軸方向はN-28°-Wで、ほぼ斜面に平行させている。

壁・壁溝 確認面からの深さは西側斜面寄りでは20cm前後であるのに対し、東側広場寄りでは50cm前後もみられ、床面を水平にするために広場側を大きく掘削している状況が窺える。立ち上がり角度はかなり緩やかである。壁溝は認められないが、壁下には小ピット列(壁柱穴)が巡らされている。この小ピット列は東辺で2列になっており、建て替えに伴うものとみられる。また、南辺中央では出入り口部に伴うとみられる小ピット列の屈曲がみられるが、幅約50cm・奥行き70cmである。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、特に炉の周辺を中心に堅く踏み締められている。

柱穴 位置関係や深さ等から主柱穴はP1~6の6本で、直径33~45cm、深さ53~80cm。柱間は長軸3.5m、短軸1.5~1.85mで、やや「ハ」の字に開いている。なお建て替え前の主柱穴とみられるのはP7だけであり、建て替えも部分的な修理等、小規模なものであったと思われる。

覆土 自然堆積で大きく4層に分層された。傾斜地の立地ということで、全体に東側広場方面からの土の流入が多くなっている。

炉跡 床面中央主軸上に2つ確認されている。炉1はやや北寄りで確認された不整形円形の地床炉で、長軸105cm・短軸84cm・深さ10cm。北側を中心に列状のピットが確認されており、川原石等が配されていた可能性も考えられる。なお出入り口寄りでは確認された炉2は、長軸55cm・短軸36cm・深さ5cmと、かなり小規模な地床炉である。

出土遺物(第78・79・118図)

土器 図示しえたのは40点で、すべて覆土中の出土である。

1~19は文様を有するものである。1は大型の波状口縁で、波頂部に押圧の凹みがみられる。半截竹管を用いた平行沈線で、鋸歯文を交差させて菱形文を描いている。2も同様な文様であるが、菱形文の中に渦巻文が入る部分がみられる。他に14・18・19にも同様に半截竹管による平行沈線文がみられる。3~5・7・8は細い棒状工具による連続刺突文がみられるもので、5・7は4本一組、8は2本一組である。なお、5にはコンパス文もみられる。6は波状口縁の波頂部とみられ、口縁直下に縦位の短沈線が巡らされている。10~13・15・16は半截竹管による連続爪形文が施されるもので、10は鋸歯文、13・16は菱形文が描かれる。なお16には相互刺突風に爪形文が途切れる部分がある。17は3本一組の棒状工具による波状文である。

20～40は地文のみのものである。20はほぼ完形の小型コップ型土器で、口径10.2cm・底径8.8cm・器高19.5cmである。口縁部の一か所には取っ手状の小突起が付くが、先端部は欠損している。地文は太めの縄を用い、口縁直下から胴部上半には2段LRの環付末端によるループ文が、また下半には側面環付の縄文が施されている。21～23・25～28・33は2段RLと2段LRによる羽状縄文が施されるもので、特に27は菱形構成となっている。なお27は0段多条の縄とみられる。30は2種類の附加条1種（2段LRにRの縄を2本一組で巻いたもの、2段RLにLの縄を2本一組で巻いたもの）で、羽状を構成している。29・31・32は単節斜縄文である。34～40は撚糸文を地文とするものである。34～37はいずれも羽状構成であるが、34・36は1段Lの縄を2本一組で、35は1段RとLの縄を2本一組で、それぞれ巻いたものである。39は1段Rの縄を絡めたものである。

石器 図示しえたのは、石鏃1点・磨石8点の計9点である。

J26号竪穴住居跡（第37図）

位置 H-32グリッド。中央広場の南方で、南西緩斜面部への落ち口付近に立地する。

重複関係 本住居跡はJ16号掘立柱建物跡に切られるとともに、J25号竪穴住居跡にかなり隣接している。また広場の墓坑群とも重複関係にあるとみられる。

規模・形状 平面形は隅丸方形で、大きさは東西4.25m・南北4.1m。主軸方向はN-88°-Wで、ほぼ東西にとられている。

壁・壁溝 確認面からの深さは22～25cmで、立ち上がり角度は緩やかである。壁溝は認められないが、少し間隔のまばらな小ピット列（壁柱穴）が確認できる。また、東壁中央部では小ピット列が内側に屈曲する様子が見られ、出入口に伴うものと思われる。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、中央部は比較的踏み固められている。

柱穴 位置関係や深さ等から主柱穴とみられるのはP1～4の4本で、直径30～42cm、深さ18～60cm。柱間は東西1.3m、南北0.9～1.8mで、かなり「ハ」の字に開いている。

覆土 自然堆積で大きく5層に分層された。広場側からはローム粒を多量に含む土が流入している。

炉跡 床面中央から径50cm前後の不整楕円形の焼土が2カ所確認されているが、いずれも掘り込みをほとんどたず、地床炉とまでは言い難いものである。

出土遺物（第80・119図）

土器 図示しえたのは10点で、いずれも覆土中の出土である。

1～4・7・8は文様を有するものである。1・2は同一個体で、口縁直下に半截竹管の連続爪形文（押し引き風）を2段に巡らしている。3・4にはやや密な連続爪形文がみられる。7は3本一組の棒状工具による波状文、8は半截竹管による平行沈線文が施されている。

5・6・9・10は地文のみのものである。5は2段RLに0段Lを巻いた附加条1種縄文である。6は2つの附加条1種縄文（2段LRに0段Lを巻いたものと2段RLに0段rを巻いたもの）で羽状を構成している。9は2段RLの単節斜縄文であるが、織維を含まず諸磯式と思われる。10は反撚の2段RRと思われる。

石器 図示しえたのは磨石2点である。

J27号竪穴住居跡(第39図)

位置 H-32～33グリッド。中央広場の南方で、調査区の南限にかかっている。

重複関係 調査できたのは一部であり、他の住居・建物跡との重複関係は認められないが、広場の墓塚群とは重複する可能性もみられる。また、本住居跡には建て替えが認められる。

規模・形状 平面形は隅丸の方形もしくは長方形で、東西長は4.1m。主軸方向はN-42°-W。

壁・壁溝 確認面からの深さは8～12cmで、立ち上がりは緩やかである。壁溝はやや内側で一部認められ、壁下にはまばらな小ピット列(壁柱穴)が確認できる。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、中央部は比較的踏み固められている。

柱穴 位置関係や深さ等からP1(直径24cm・深さ49cm)・P2(直径26cm・深さ49cm)は主柱穴とみられるが、主柱の本数は不明である。なお、内側に壁溝が一部みられることから、建て替えがあったものと考えられる。

覆土 自然堆積で大きく3層に分層された。なお表土基準土層・第三層(ローム漸移層)上層が遺構確認面となっている。

炉跡 床面中央部に径50cm前後の不整形円形の焼土が確認されているが、掘り込みはかなり浅い。

出土遺物(第81図)

土器 図示しえたのは3点であり、いずれも覆土中の出土である。

1は半截竹管による連続爪形文が施される。2・3は2段LRと2段RLの羽状縄文である。

石器 出土無しである。

J28号竪穴住居跡(第40図)

位置 H-30～31グリッド。中央広場から南西方の緩斜面上に立地する。

重複関係 本住居跡は住居・建物群から若干距離を置いた位置にあり、他との重複関係はみられない。また明瞭な建て替えの痕跡も認められない。

規模・形状 平面形はやや不整形な楕円形で、大きさは長軸3.75m・短軸2.8mとかなり小規模。主軸方向はN-83°-Wである。

壁・壁溝 確認面からの深さは5～12cmと浅く、特に斜面側の壁の残りは僅かである。壁溝は認められないが、壁に沿って小ピット列(壁柱穴)が確認できる。

床面の状況 床面はほぼ平坦であるが、5～6cmほど南の斜面側に下がっている。

柱穴 位置関係や深さ等から主柱穴とみられるのはP1～3の本で、直径24～50cm、深さ42～53cm。小規模であることから、P1-P2もしくはP1-P3の2本主柱の可能性も考えられる。

覆土 自然堆積で大きく2層に分層された。

炉跡 床面南寄りで小規模な焼土が3カ所確認されているが、位置的にも炉跡とは考え難い。

出土遺物(第82・115図)

土器 図示しえたのは4点であり、いずれも覆土中の出土である。

1は半截竹管による連続爪形文が施される。2・3は2段RLの単節斜縄文を地文とするもので、縞縞が含まれず諸磯式と思われる。4は2種の附加条1種縄文(2段LRに1段Rを巻いたものと2段RLに1段Lを巻いたもの)で羽状を構成する。

石器 図示しえたのは石鏃1点のみである。

J29号竪穴住居跡(第41図)

位置 G-31グリッド。中央広場の南西方で、緩斜面部縁辺に立地する。

重複関係 J12号掘立柱建物跡に切られるとともに、J11号掘立柱建物跡が隣接する。

規模・形状 平面形はやや不整な楕円形で、大きさは長軸2.45m・短軸2.25mと今回確認された住居跡の中では最も小規模。主軸方向はN-30°-Wである。

壁・壁溝 確認面からの深さは12～13cmと浅め。壁溝は認められないが、壁に沿って小ピット列(壁柱穴)が配されている。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、中央部は比較的踏み固められている。

柱穴 位置関係や深さ等から床面内に主柱穴とみられるのは認められない。

覆土 自然堆積で大きく3層に分層された。

炉跡 床面ほぼ中央で、径20cmに満たない小規模な焼土が確認されている。

出土遺物(第83・116図)

土器 図示したのは5点であり、いずれも覆土中の出土である。

1～3は連続爪形文が施されるもので、2は楕円形区画が描かれている。4・5は2段RLの単節斜縄文を地文とするものである。

石器 図示したのは、石鏃1点と磨石1点の計2点である。

J30号竪穴住居跡(第42図)

位置 G-29グリッド。中央広場の西方で、南西緩斜面部までは10mほどに位置する。

重複関係 J8号掘立柱建物跡に切られるとともに、J9号掘立柱建物跡が隣接する。

規模・形状 平面形はやや不整な楕円形で、大きさは長軸2.6m・短軸2.05mとかなり小規模。主軸方向はN-4°-Wである。

壁・壁溝 確認面からの深さは4～6cmとかなり浅めで、立ち上がりも緩やかである。壁溝は認められないが、壁に沿って小ピット列(壁柱穴)が配されている。

床面の状況 床面はほぼ平坦で、中央部は比較的踏み固められている。

柱穴 位置関係や深さ等から床面内に主柱穴とみられるのは認められない。

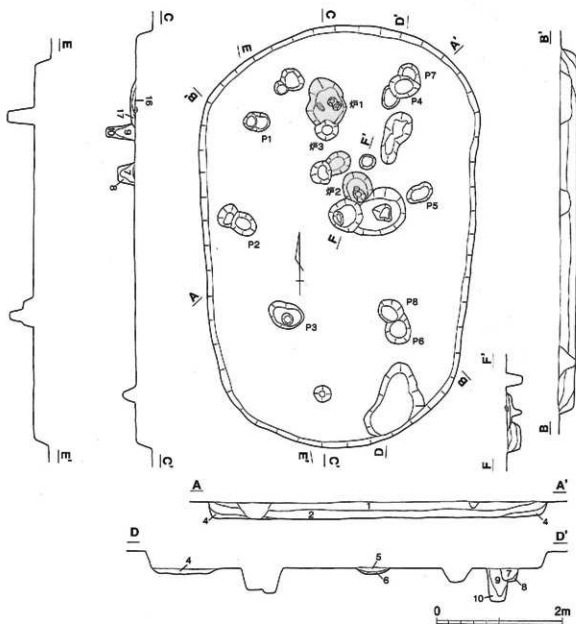
覆土 暗褐色の薄い覆土を確認したが、分層はできなかった。

炉跡 床面やや北寄り径30cmほどの小規模な焼土が確認されているが、掘り込みはみられない。

出土遺物(第117図)

土器 出土無しである。

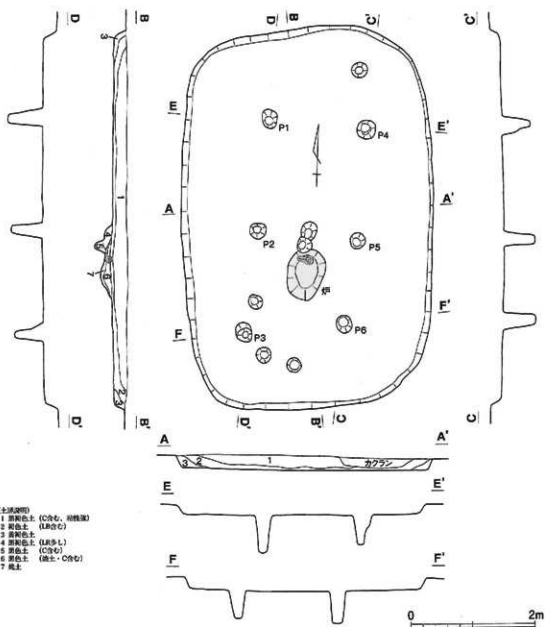
石器 図示したのは磨石1点のみである。



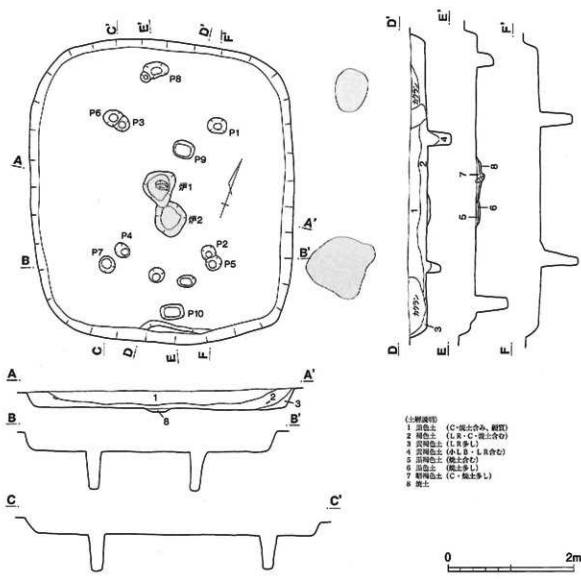
(土層説明)

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1 赤褐色土 (埴輪散入、破片) | 9 赤褐色土 (小片を含む) |
| 2 赤褐色土 (C・KP多量を含む) | 10 赤褐色土 (瓦片多量を含む) |
| 3 赤褐色土 (KP含む、砂質) | 11 赤褐色土 (小片多量含む) |
| 4 赤褐色土 (砂質) | 12 赤褐色土 (小片含む) |
| 5 赤褐色土 (小片含む) | 13 赤褐色土 (瓦片含む) |
| 6 赤褐色土 (瓦片含む) | 14 灰土 |
| 7 赤褐色土 (小片を含む) | 15 赤褐色土 (瓦片含む) |
| 8 赤褐色土 (LR含む) | 16 灰土 |
| | 17 赤褐色土 (瓦片含む) |

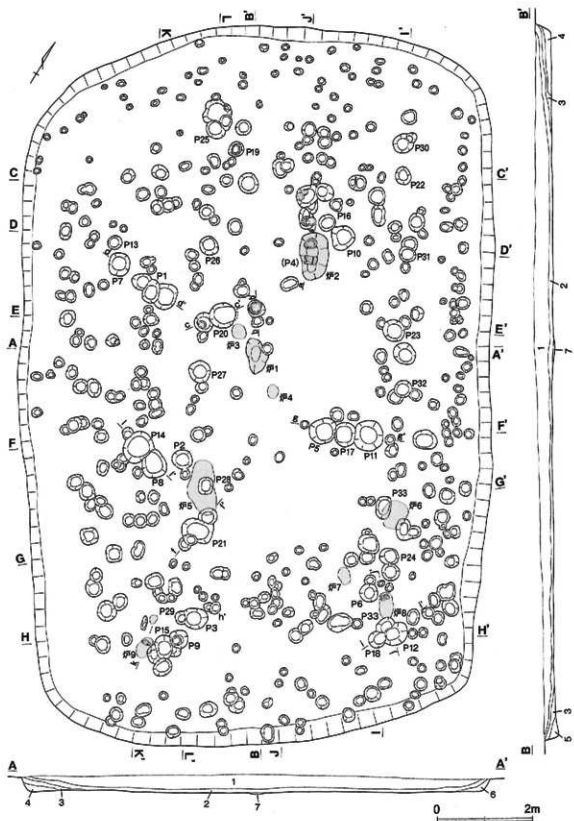
第8図 J1号壑穴住居跡平面・断面図



第9图 J2号竖穴住居跡平面・断面图

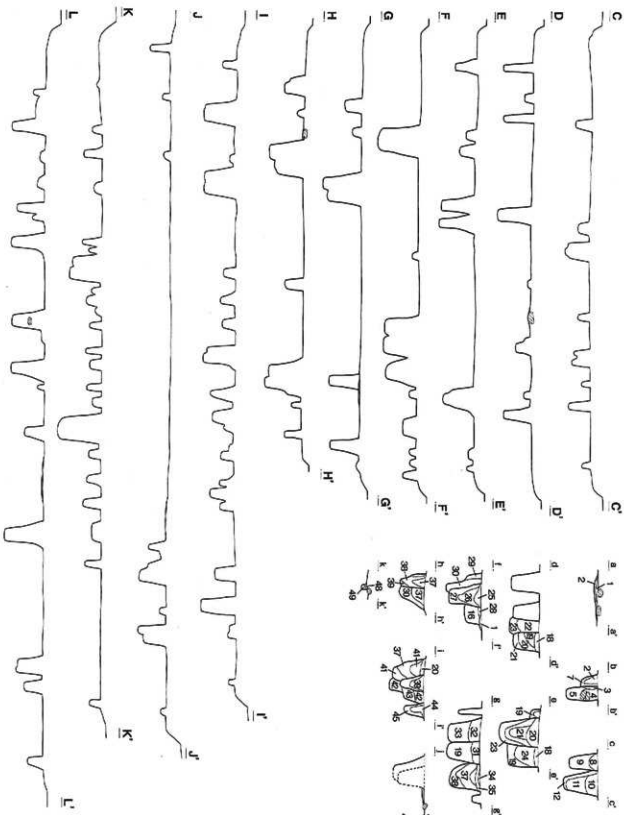


第10図 J4号竪穴住居跡平面・断面図



- | | |
|--------------------|--------------------|
| (土製遺物) | 4 黄褐色土 (磁器) |
| 1 赤色土 (C多量、磁器あり) | 5 黄褐色土 (磁器あり、藍い) |
| 2 赤褐色土 (赤土多量、磁器あり) | 6 褐色土 (赤土-LR多量、砂質) |
| 3 褐色土 (LR多量、砂質) | 7 黄土 |

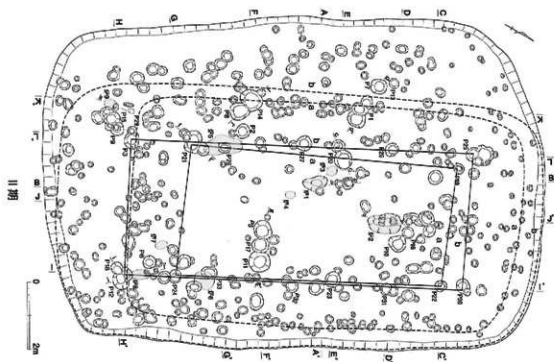
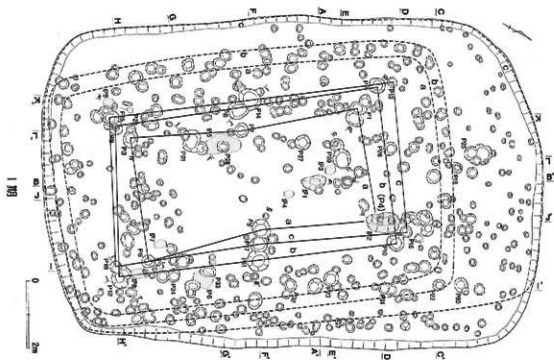
第11図 J5号竪穴住居跡平面・断面図



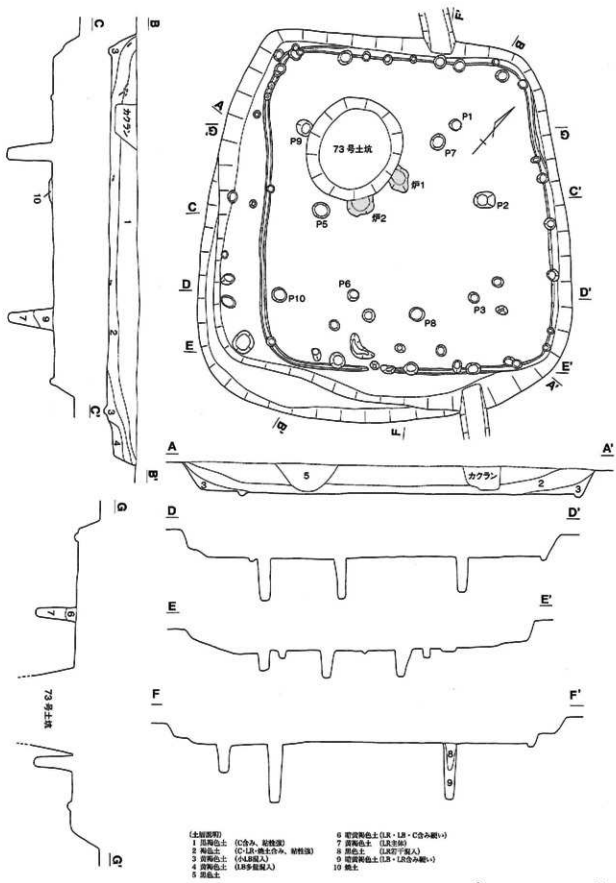
第12图 J5号型六柱居跡断面图

0 2m

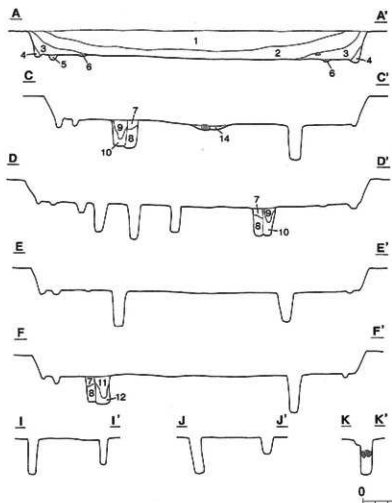
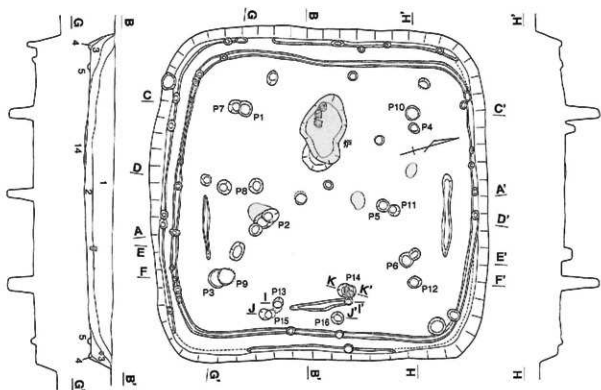
- (1) 剖面图
- 1 砂土 (砂土)
 - 2 砂土 (砂土)
 - 3 砂土 (砂土)
 - 4 砂土 (砂土)
 - 5 砂土 (砂土)
 - 6 砂土 (砂土)
 - 7 砂土 (砂土)
 - 8 砂土 (砂土)
 - 9 砂土 (砂土)
 - 10 砂土 (砂土)
 - 11 砂土 (砂土)
 - 12 砂土 (砂土)
 - 13 砂土 (砂土)
 - 14 砂土 (砂土)
 - 15 砂土 (砂土)
 - 16 砂土 (砂土)
 - 17 砂土 (砂土)
 - 18 砂土 (砂土)
 - 19 砂土 (砂土)
 - 20 砂土 (砂土)
 - 21 砂土 (砂土)
 - 22 砂土 (砂土)
 - 23 砂土 (砂土)
 - 24 砂土 (砂土)
 - 25 砂土 (砂土)
 - 26 砂土 (砂土)
 - 27 砂土 (砂土)
 - 28 砂土 (砂土)
 - 29 砂土 (砂土)
 - 30 砂土 (砂土)
 - 31 砂土 (砂土)
 - 32 砂土 (砂土)
 - 33 砂土 (砂土)
 - 34 砂土 (砂土)
 - 35 砂土 (砂土)
 - 36 砂土 (砂土)
 - 37 砂土 (砂土)
 - 38 砂土 (砂土)
 - 39 砂土 (砂土)
 - 40 砂土 (砂土)
 - 41 砂土 (砂土)
 - 42 砂土 (砂土)
 - 43 砂土 (砂土)
 - 44 砂土 (砂土)
 - 45 砂土 (砂土)
 - 46 砂土 (砂土)
 - 47 砂土 (砂土)
 - 48 砂土 (砂土)
 - 49 砂土 (砂土)
 - 50 砂土 (砂土)



第13图 J5号遗址居住址变迁图

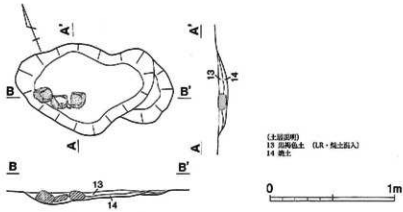


第14図 J6号竪穴住居跡平面・断面図

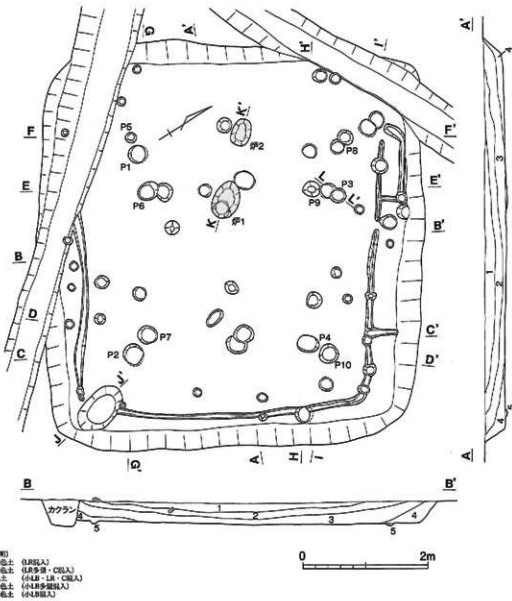


- (土層説明)
- 1 黄褐色土 (C多相、有性線で飾り)
 - 2 褐色土 (C - 少量含む、微質)
 - 3 灰褐色土 (灰多、C多+)
 - 4 灰色土 (本土層入)
 - 5 褐色土
 - 6 黄褐色土 (小土層入)
 - 7 黄褐色土 (LR - 少量混入)
 - 8 黄褐色土 (LR混入)
 - 9 黄褐色土 (C - LR - 本土層入)
 - 10 黄褐色土 (LR混入)
 - 11 黄褐色土 (LR混入)
 - 12 黄褐色土 (少量混入)
 - 13 黄褐色土 (LR - 本土層入)
 - 14 黄土

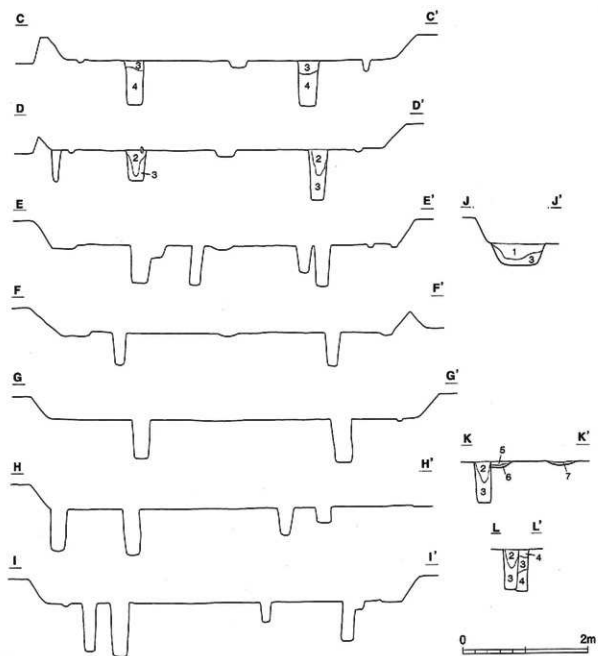
第15图 J7号穴住居跡平面・断面图



第16図 J7号竪穴住居跡炉平面・断面図

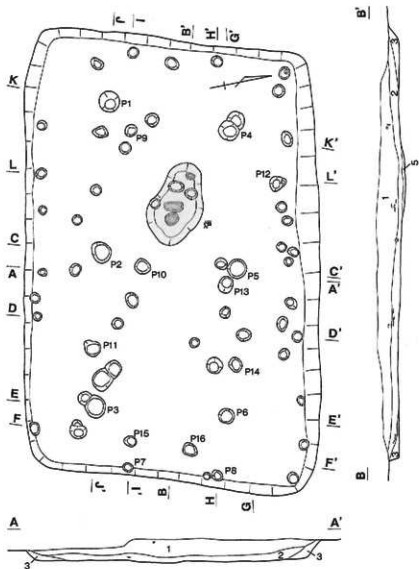


第17図 J8号竪穴住居跡炉平面・断面図



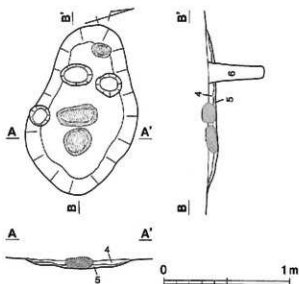
- | | | |
|---------------|---------|--------------------|
| (土層説明) | (L形平掘入) | 4 黄粘土 (L形平掘入) |
| 1 黑粘土 | (小L形掘入) | 5 赤褐色土 (小L形掘入) |
| 2 黑褐色土 | (L形掘入) | 6 黄赤褐色土 (枕土, L形掘入) |
| 3 黄褐色土 (L形掘入) | | 7 黄土 |

第18圖 J8号整穴住居跡断面圖

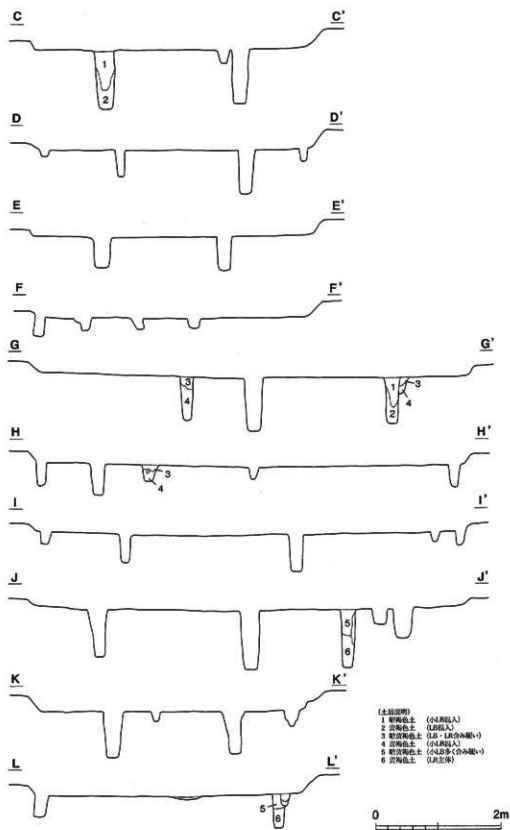


(土質説明)

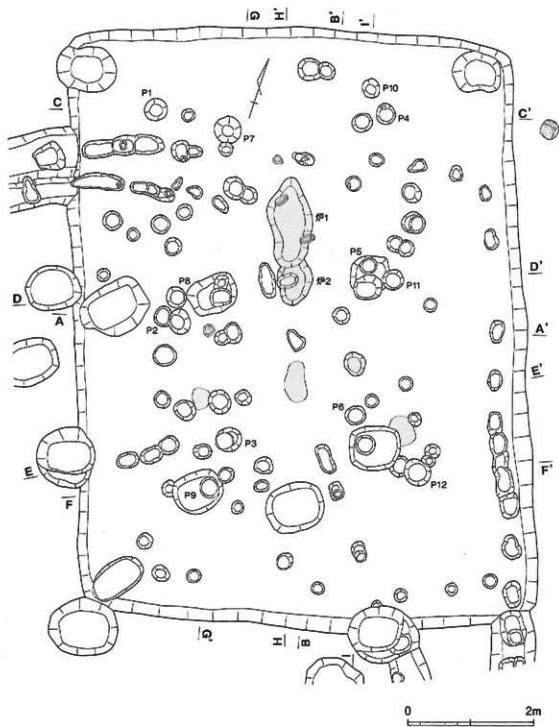
- 1 黒褐色土 (L層下・C多量層)
- 2 赤褐色土 (L層・L2・C2層)
- 3 赤褐色土 (L2・L3多量層)
- 4 赤褐色土 (概L3多量層)
- 5 黄土
- 6 赤褐色土



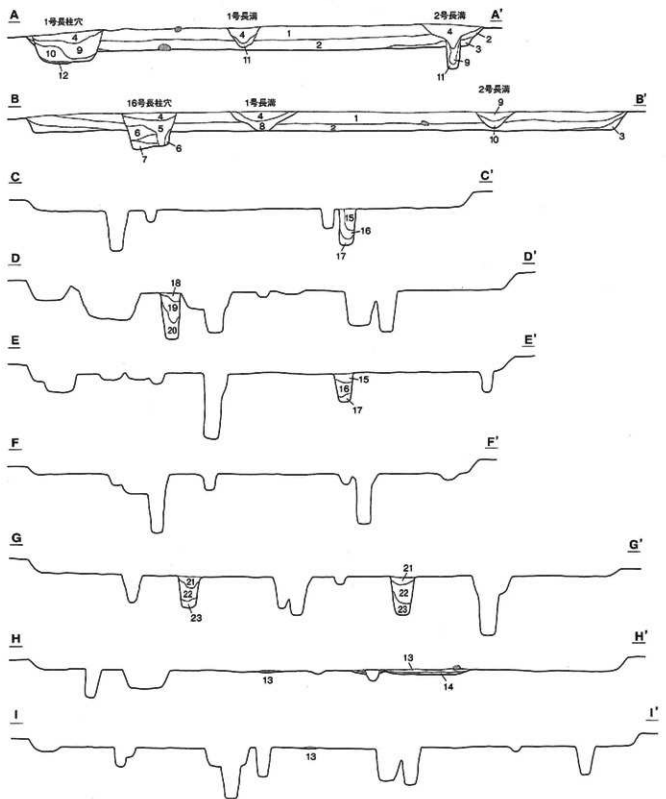
第19図 J10号竪穴住居跡・カマド 平面・断面図



第20图 J10号竖穴住居断面图

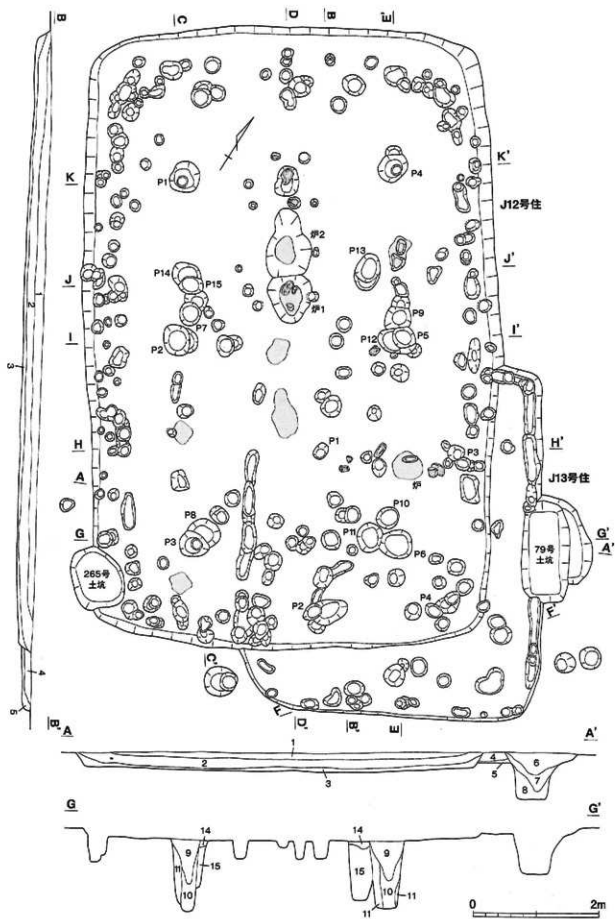


第21圖 J11号竪穴住居跡平面图

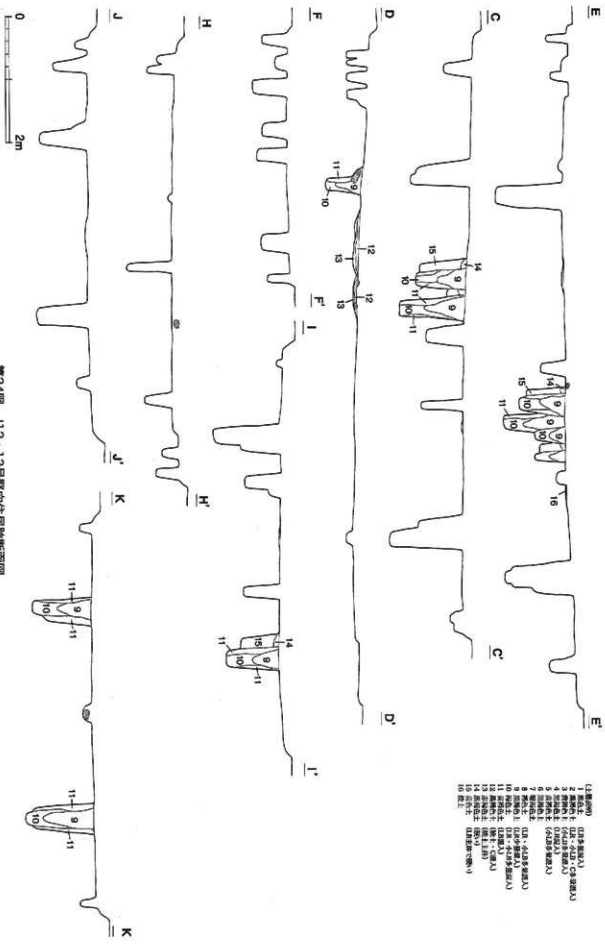


- | | | |
|------------------|------------------|------------------|
| 1 灰褐色土 (L灰中硬层) | 8 褐色土 (L灰层) | 16 灰褐色土 (L灰层) |
| 2 褐色土 (L灰中硬层) | 9 暗褐色土 | 17 灰褐色土 (L灰层) |
| 3 灰褐色土 (L灰·小L灰层) | 10 灰褐色土 | 18 暗褐色土 (L灰中硬层) |
| 4 暗褐色土 (L灰·小L灰层) | 11 褐色土 (L灰层) | 19 暗褐色土 |
| 5 暗褐色土 (L灰·小L灰层) | 12 灰褐色土 (L灰主层) | 20 褐色土 (L灰层) |
| 6 灰褐色土 (L灰中硬层) | 13 黄土 | 21 暗褐色土 (黄土·L灰层) |
| 7 黄褐色土 (L灰中·初硬层) | 14 灰褐色土 (黄土·C灰层) | 22 褐色土 (L灰层) |
| | 15 褐色土 (小L灰层) | 23 灰褐色土 (小L灰层) |

第22图 J11号竖穴住居跡 断面图

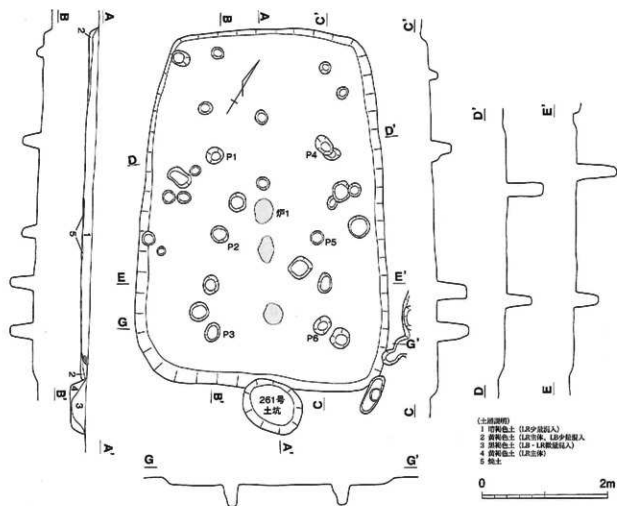


第23图 J12·13号竖穴住居跡平面·断面图

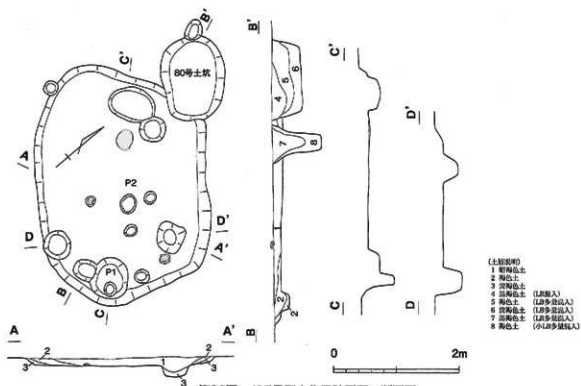


第24图 J12·13号竖穴层剖面图

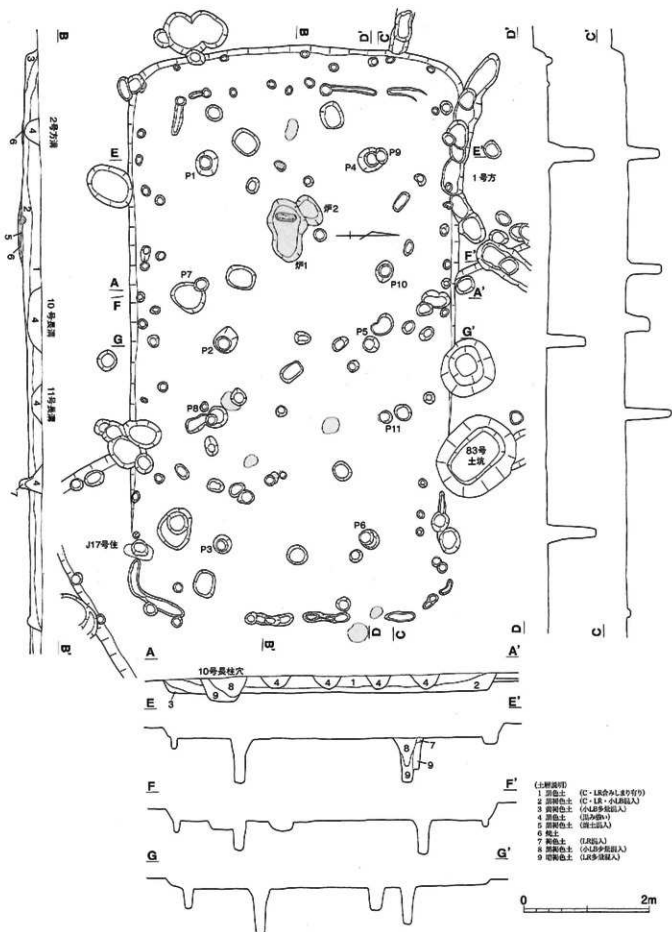
- (注: 剖面图)
- 1 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 2 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 3 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 4 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 5 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 6 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 7 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 8 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 9 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 10 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 11 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 12 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 13 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 14 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 15 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)
 - 16 剖面: E (E1-E2, C1-C2, D1-D2)



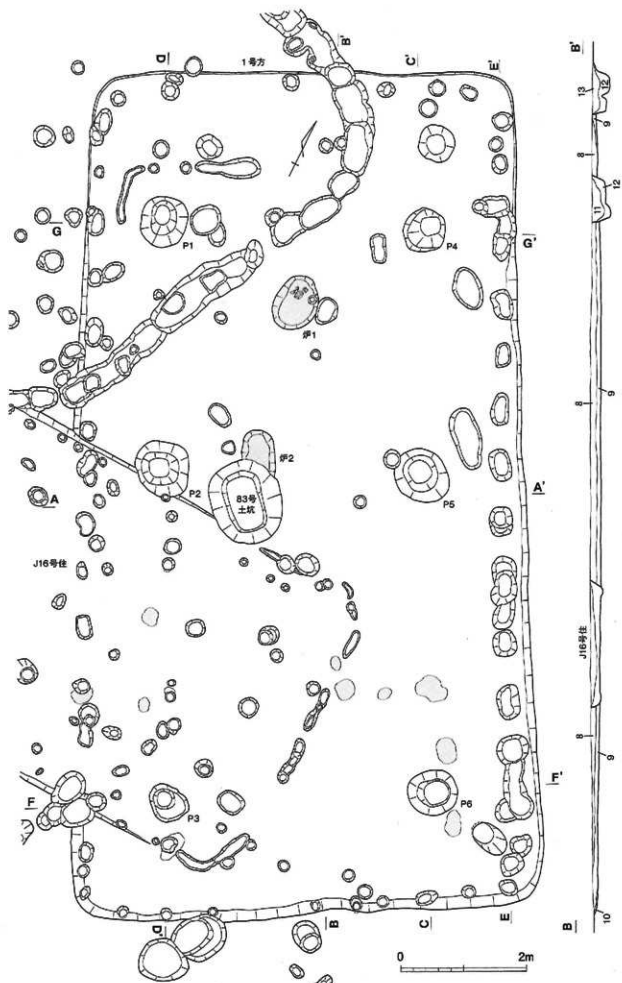
第25图 J14号竖穴住居跡平面·断面图



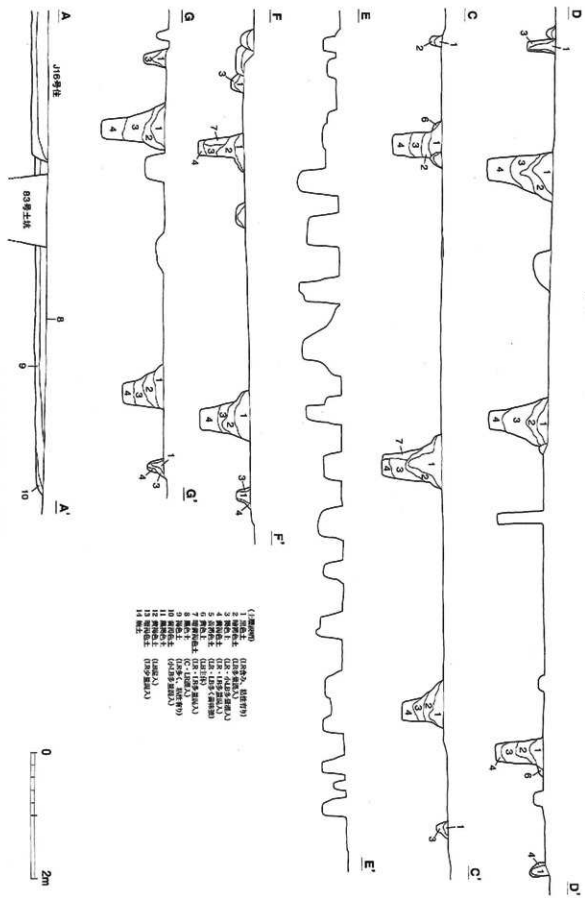
第26图 J15号竖穴住居跡平面·断面图



第27圖 J16号竅穴住居跡平面・断面圖

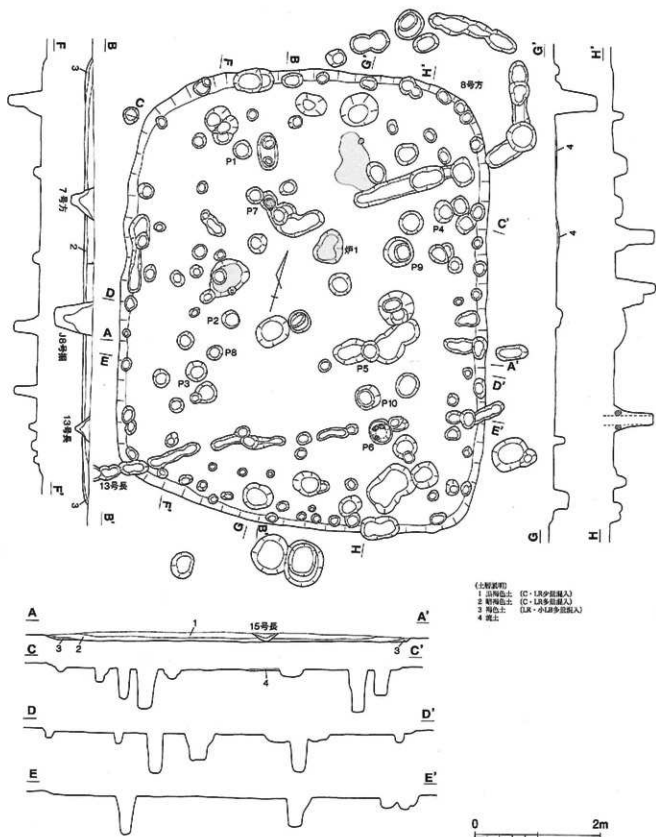


第28图 J17号整穴住居跡平面・断面图

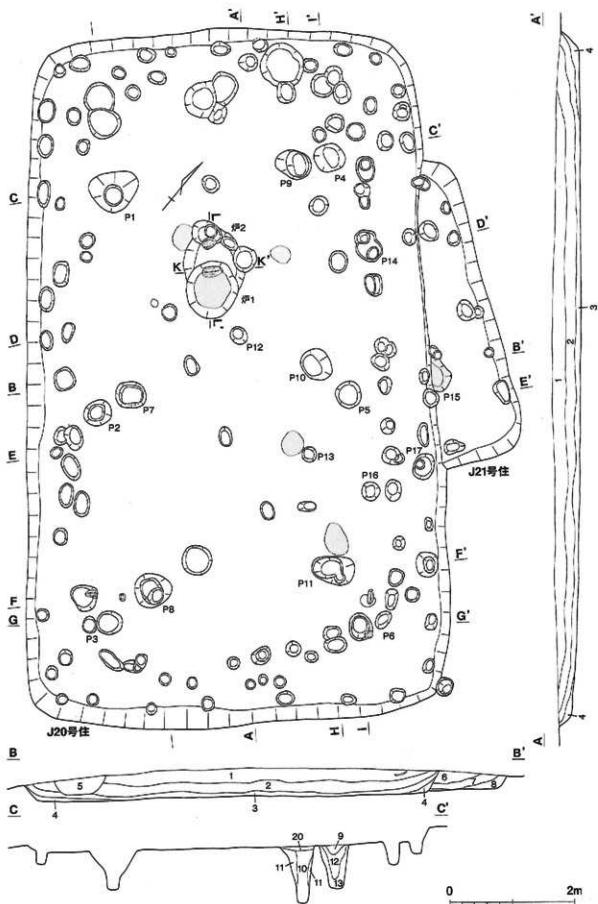


- (注: 剖面图)
- 1 房顶土
 - 2 房顶灰土
 - 3 房顶灰土
 - 4 房顶灰土
 - 5 房顶灰土
 - 6 房顶灰土
 - 7 房顶灰土
 - 8 房顶灰土
 - 9 房顶灰土
 - 10 房顶灰土
 - 11 房顶灰土
 - 12 房顶灰土
 - 13 房顶灰土
- (注: 剖面图)
- ① 房顶土
 - ② 房顶灰土
 - ③ 房顶灰土
 - ④ 房顶灰土
 - ⑤ 房顶灰土
 - ⑥ 房顶灰土
 - ⑦ 房顶灰土
 - ⑧ 房顶灰土
 - ⑨ 房顶灰土
 - ⑩ 房顶灰土
 - ⑪ 房顶灰土
 - ⑫ 房顶灰土
 - ⑬ 房顶灰土

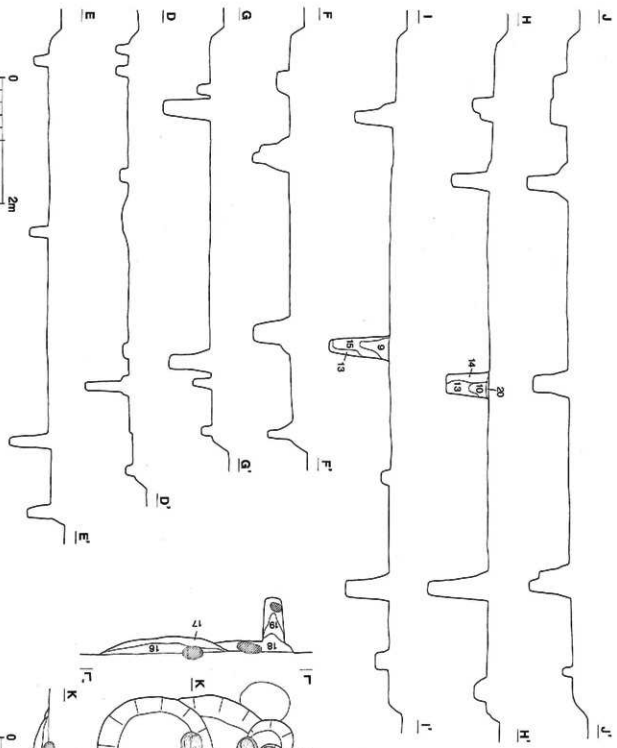
第29图 J17号墅穴住居跡断面图



第30圖 J18号竪穴住居跡平面・断面圖

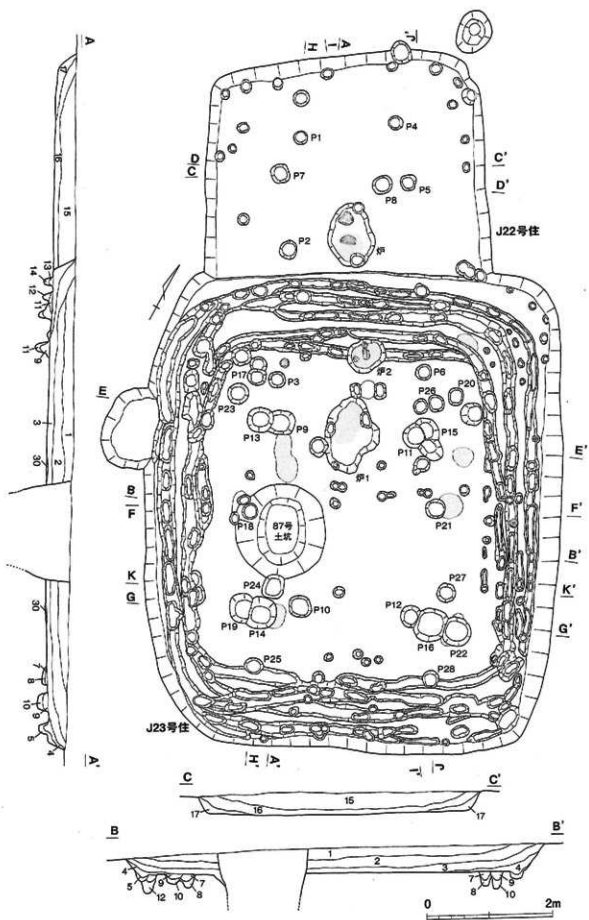


第31圖 J20・21号整穴住居跡平面・断面圖

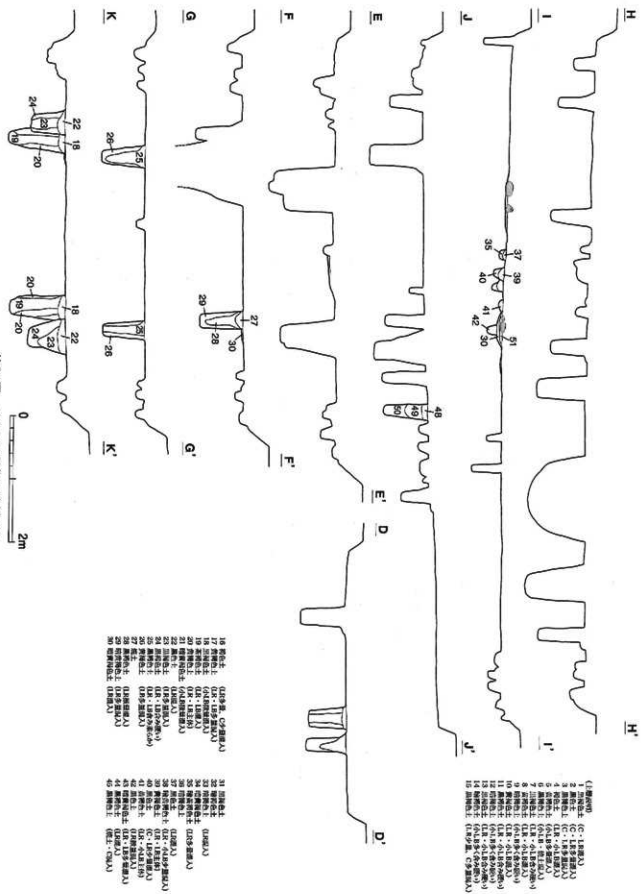


- (说明)
- 1 基址 (C-1基址)
 - 2 基址 (C-2基址)
 - 3 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 4 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 5 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 6 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 7 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 8 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 9 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 10 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 11 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 12 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 13 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 14 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 15 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 16 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 17 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 18 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 19 基址 (L-R-04.0-基址)
 - 20 基址 (L-R-04.0-基址)

第32图 J20·21号墓穴住居断剖面·J20号住居断剖面·断面图



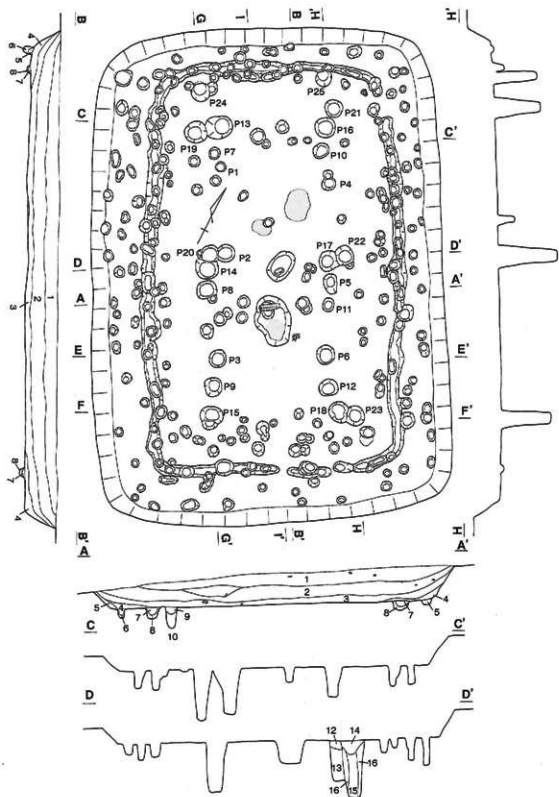
第33图 J22·23号整穴住居跡平面·断面图



第34图 J22·23号住層断面图

- (1) 砂质粘土 (C₁-1层)
- 2 砂质粘土 (C₁-2层)
- 3 砂质粘土 (C₁-3层)
- 4 砂质粘土 (C₁-4层)
- 5 砂质粘土 (C₁-5层)
- 6 砂质粘土 (C₁-6层)
- 7 砂质粘土 (C₁-7层)
- 8 砂质粘土 (C₁-8层)
- 9 砂质粘土 (C₁-9层)
- 10 砂质粘土 (C₁-10层)
- 11 砂质粘土 (C₁-11层)
- 12 砂质粘土 (C₁-12层)
- 13 砂质粘土 (C₁-13层)
- 14 砂质粘土 (C₁-14层)
- 15 砂质粘土 (C₁-15层)

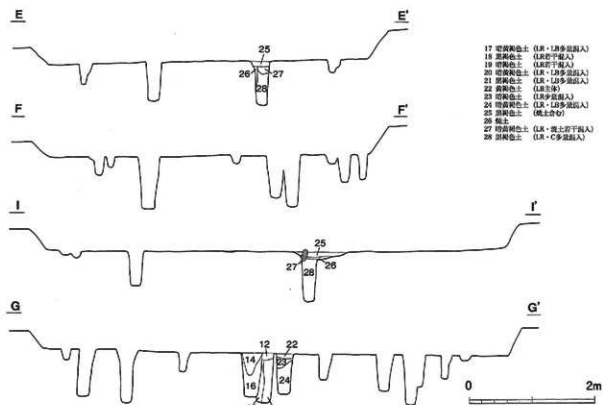
- 16 砂质粘土 (C₂-1层)
- 17 砂质粘土 (C₂-2层)
- 18 砂质粘土 (C₂-3层)
- 19 砂质粘土 (C₂-4层)
- 20 砂质粘土 (C₂-5层)
- 21 砂质粘土 (C₂-6层)
- 22 砂质粘土 (C₂-7层)
- 23 砂质粘土 (C₂-8层)
- 24 砂质粘土 (C₂-9层)
- 25 砂质粘土 (C₂-10层)
- 26 砂质粘土 (C₂-11层)
- 27 砂质粘土 (C₂-12层)
- 28 砂质粘土 (C₂-13层)
- 29 砂质粘土 (C₂-14层)
- 30 砂质粘土 (C₂-15层)
- 31 砂质粘土 (C₂-16层)
- 32 砂质粘土 (C₂-17层)
- 33 砂质粘土 (C₂-18层)
- 34 砂质粘土 (C₂-19层)
- 35 砂质粘土 (C₂-20层)
- 36 砂质粘土 (C₂-21层)
- 37 砂质粘土 (C₂-22层)
- 38 砂质粘土 (C₂-23层)
- 39 砂质粘土 (C₂-24层)
- 40 砂质粘土 (C₂-25层)
- 41 砂质粘土 (C₂-26层)
- 42 砂质粘土 (C₂-27层)
- 43 砂质粘土 (C₂-28层)
- 44 砂质粘土 (C₂-29层)
- 45 砂质粘土 (C₂-30层)



- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 粉砂土 (C-LR的干硬土) | 9 橙黄褐色土 (LR-LB多量混入) |
| 2 黑褐色土 (C少混入) | 10 黄褐色土 (LR混入) |
| 3 黄褐色土 (LR混入) | 11 黄褐色土 (黄土-C-LR混入) |
| 4 粉砂土 (LR多量混入) | 12 黄褐色土 (LR的干硬土) |
| 5 灰褐色土 (LR-LB多量混入) | 13 黄褐色土 (LR混入) |
| 6 黄土 (LR多) | 14 黄褐色土 (C-LR少混入) |
| 7 粉砂土 (LR-LB多量混入) | 15 黄褐色土 (LR混入) |
| 8 黄褐色土 (LR-LB多量混入) | 16 橙黄褐色土 (LR-LR混入) |

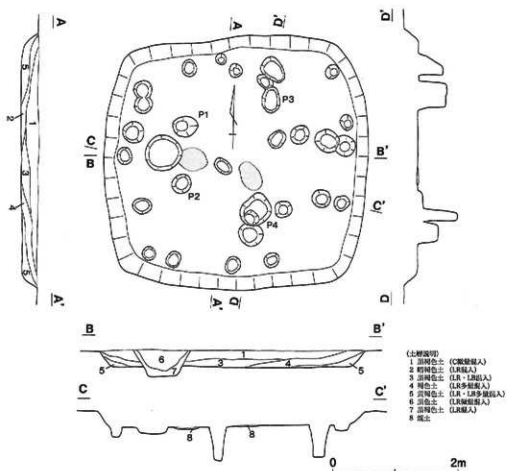
0 2m

第35图 J24号穴住居跡平面・断面图



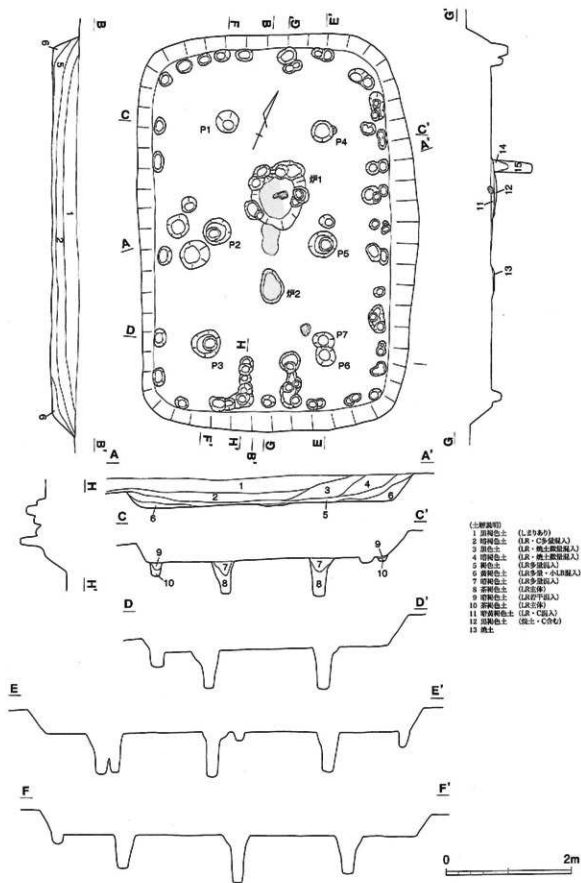
- 17 泥質粉砂土 (L.R.・L.R.多量混入)
- 18 泥質粉土 (L.R.中量混入)
- 19 砂質粉土 (L.R.少量混入)
- 20 泥質粉砂土 (L.R.・L.R.多量混入)
- 21 泥質粉土 (L.R.・L.R.多量混入)
- 22 粉質粉土 (L.R.少量)
- 23 粉質粉土 (L.R.少量混入)
- 24 泥質粉砂土 (L.R.・L.R.多量混入)
- 25 泥質粉土 (概土含む)
- 26 黄土
- 27 砂質粉土 (L.R.・概土若干混入)
- 28 泥質粉土 (L.R.・C多量混入)

第36図 J24号竪穴住居跡断面図

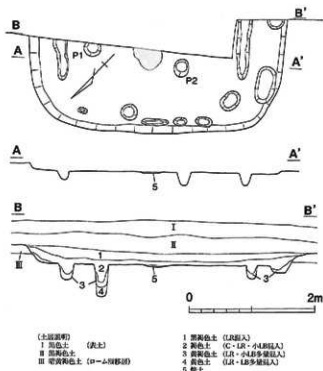


- (土層説明)
- 1 泥質粉土 (C層混入)
 - 2 砂質粉土 (L.R.混入)
 - 3 泥質粉土 (L.R.・L.R.混入)
 - 4 砂土 (L.R.少量混入)
 - 5 泥質粉土 (L.R.・L.R.多量混入)
 - 6 泥質粉土 (L.R.少量混入)
 - 7 泥質粉土 (L.R.混入)
 - 8 黄土

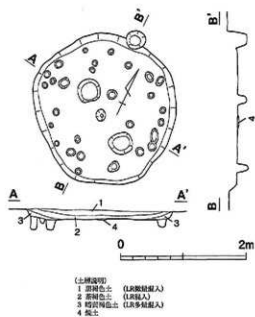
第37図 J26号竪穴住居跡平面・断面図



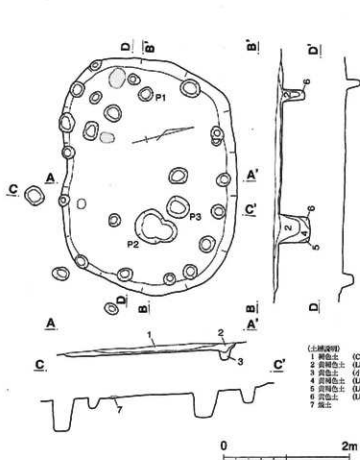
第38图 J25号窑穴住居跡平面·断面图



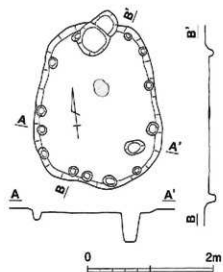
第39图 J27号竖穴住居跡平面・断面图



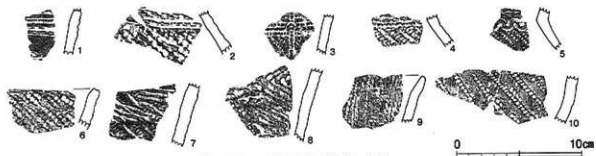
第41图 J29号竖穴住居跡平面・断面图



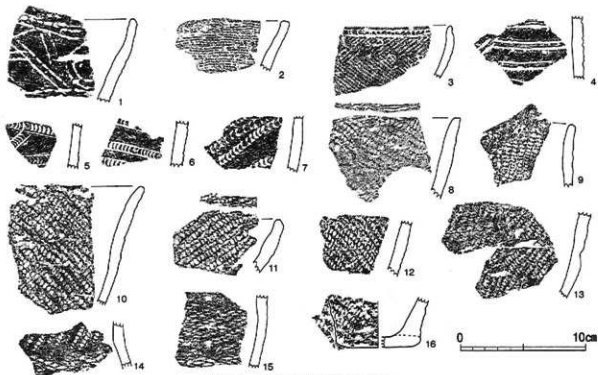
第40图 J28号竖穴住居跡平面・断面图



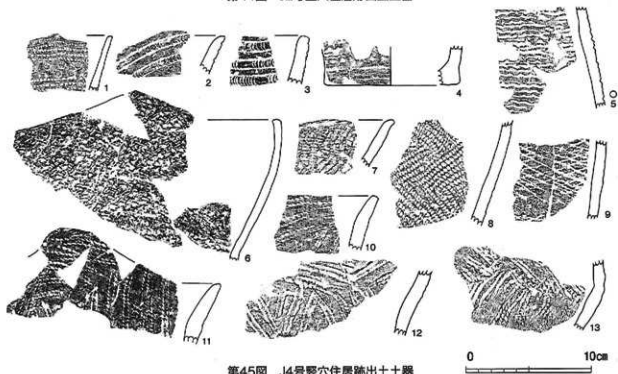
第42图 J30号竖穴住居跡平面・断面图



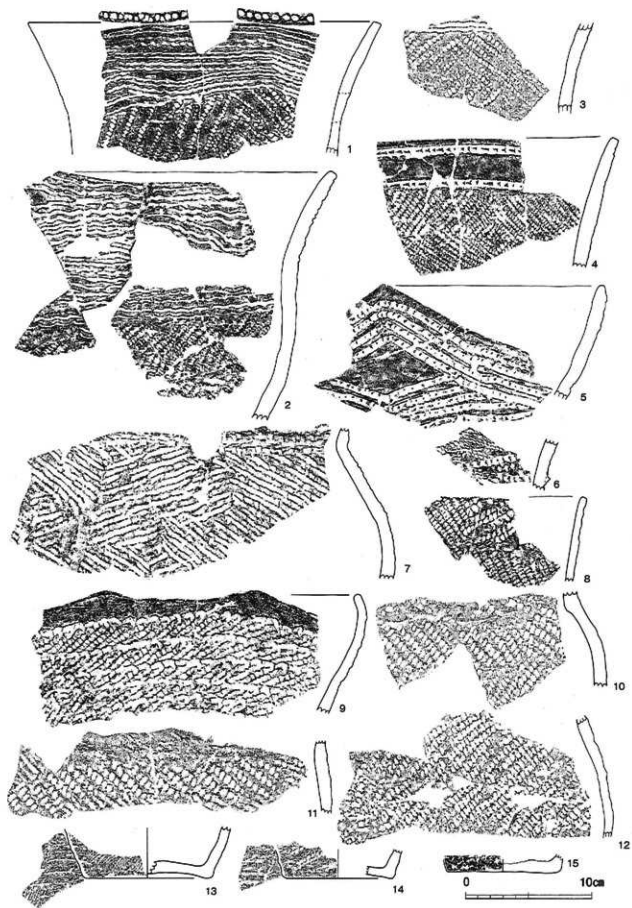
第43图 J1号竖穴住居跡出土土器



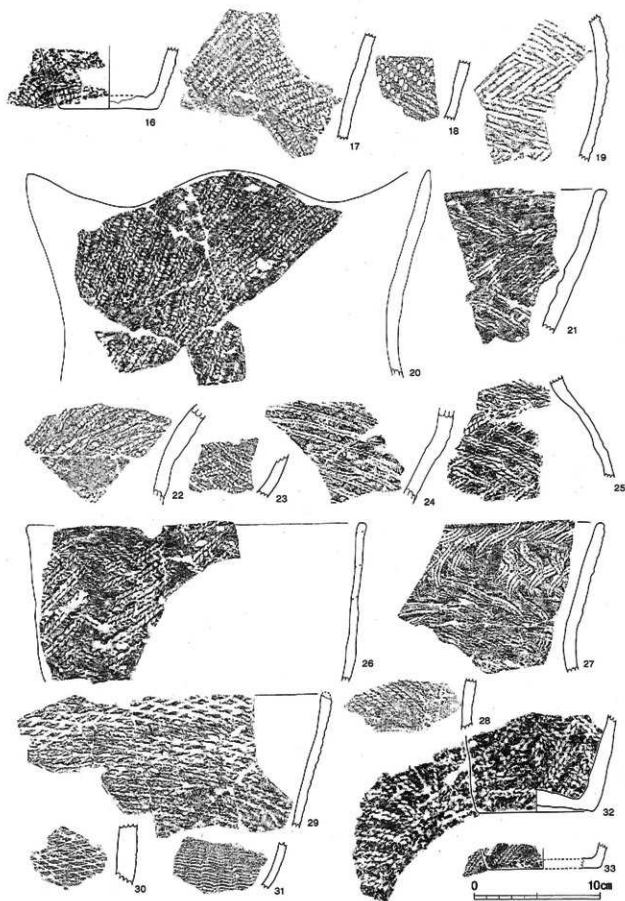
第44图 J2号竖穴住居跡出土土器



第45图 J4号竖穴住居跡出土土器



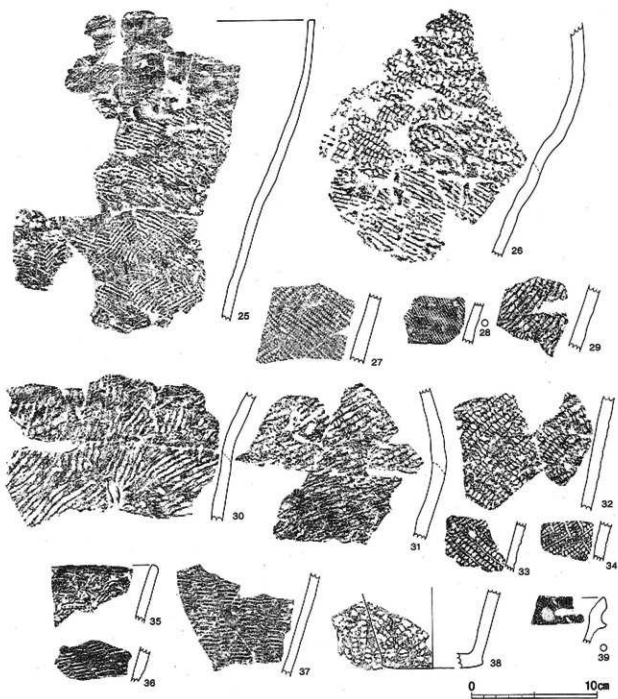
第46图 J5号整穴住居跡出土土器(1)



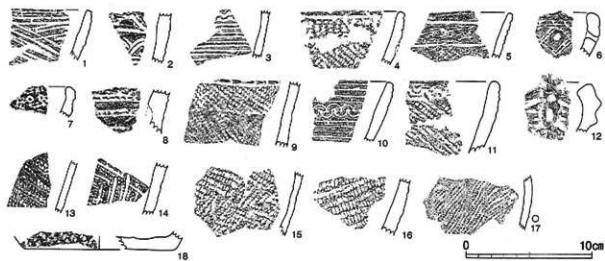
第47图 J5号竖穴住居跡出土土器(2)



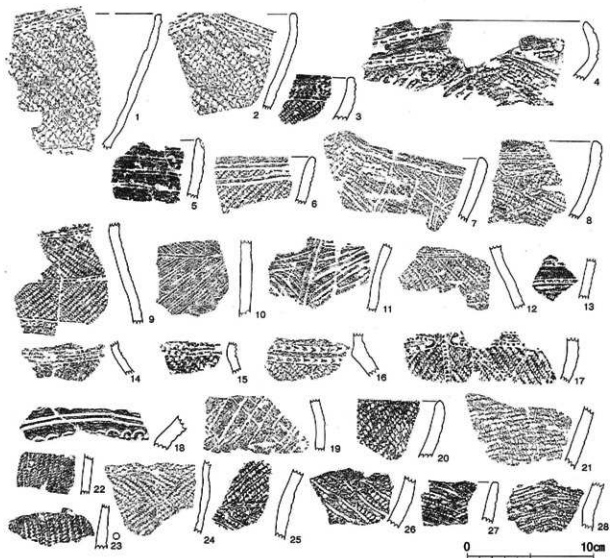
第48图 J6号整穴住居跡出土土器(1)



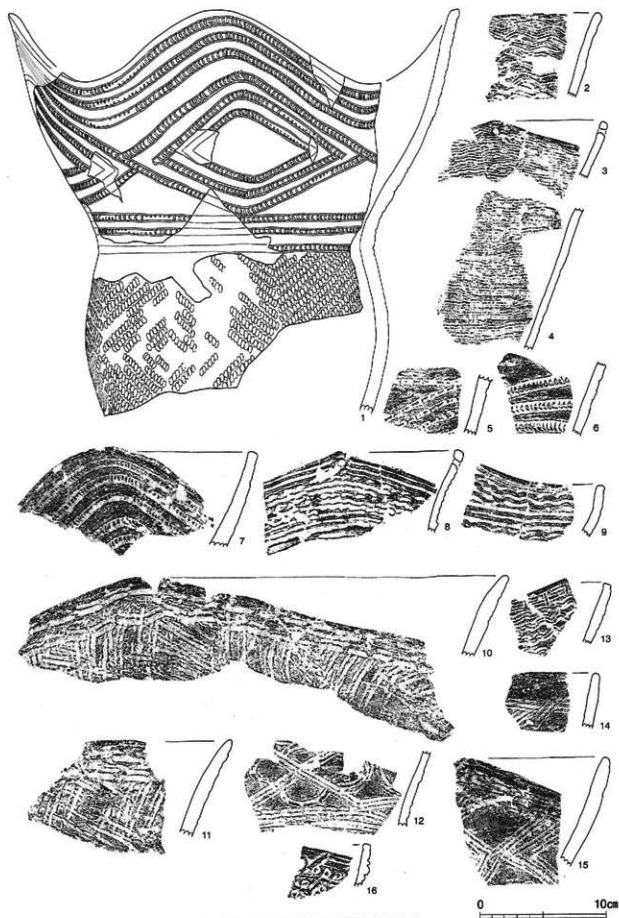
第49圖 J6号竪穴住居跡出土土器(2)



第50图 J7号竖穴住居跡出土土器



第51图 J8号竖穴住居跡出土土器



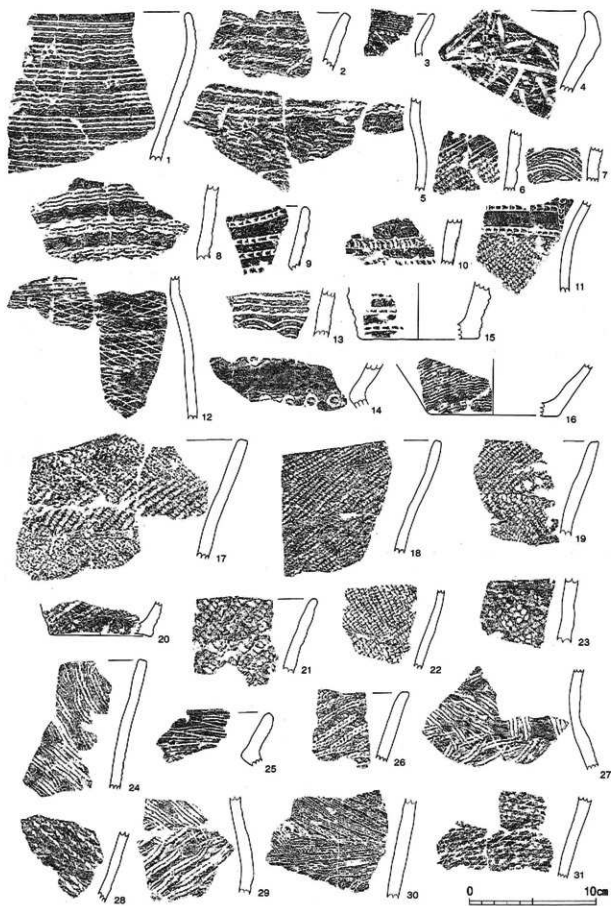
第52图 J10号竖穴住居跡出土土器(1)



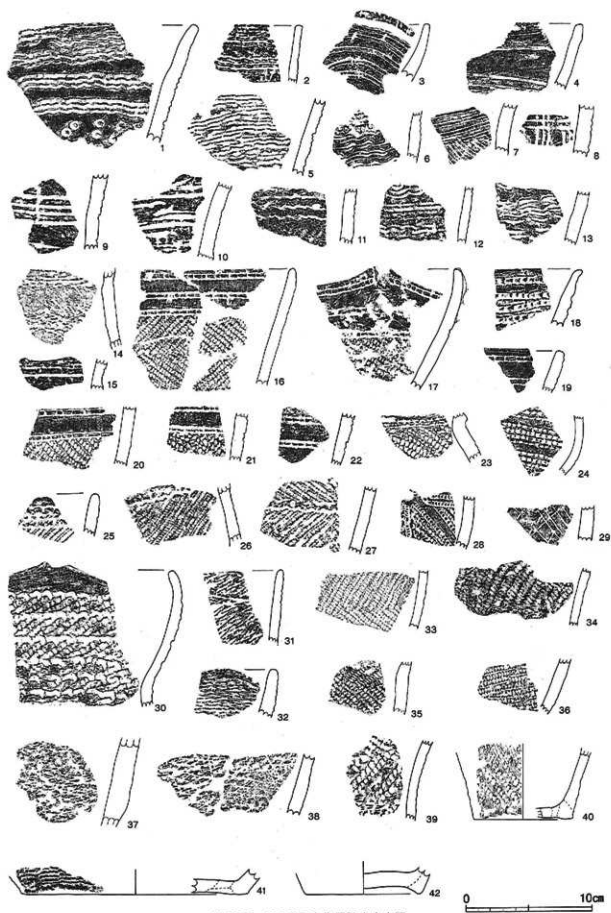
第53圖 J10号壑穴住居跡出土土器(2)



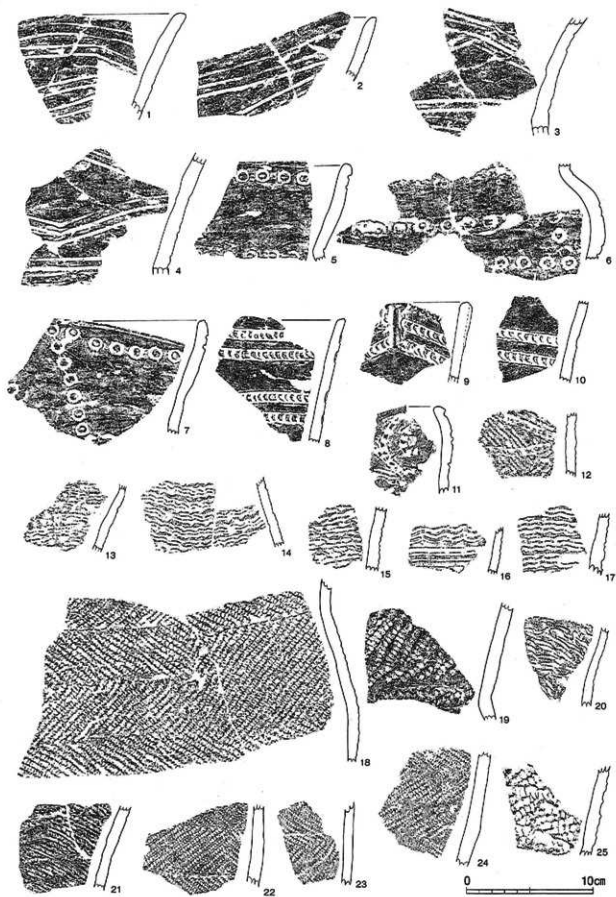
第54图 J10号竖穴住居跡出土土器 (3)



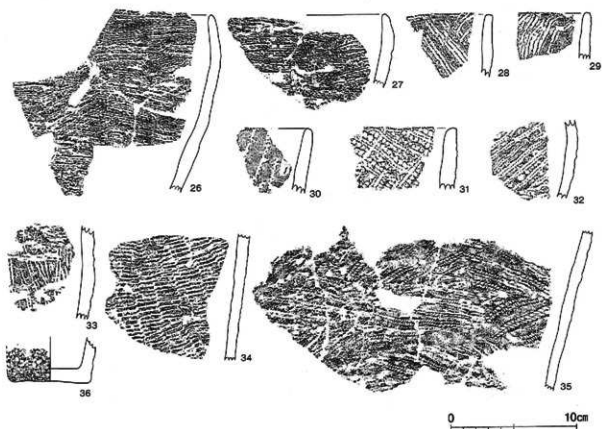
第55图 J11号竖穴住居跡出土土器



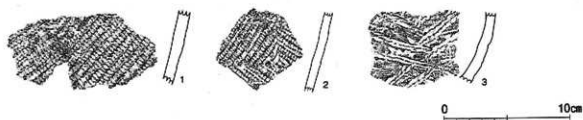
第56圖 J12号整穴住居跡出土土器



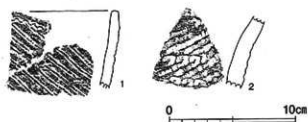
第57圖 J16号整穴住居跡出土土器(1)



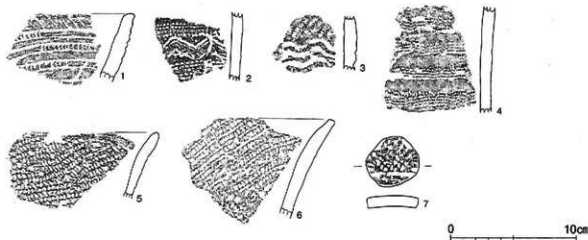
第58图 J16号竖穴住居跡出土土器 (2)



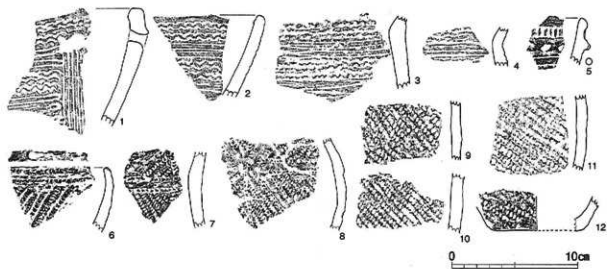
第59图 J13号竖穴住居跡出土土器



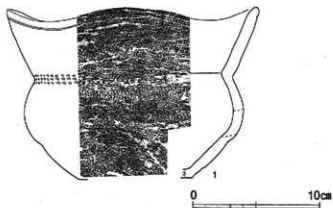
第60图 J14号竖穴住居跡出土土器



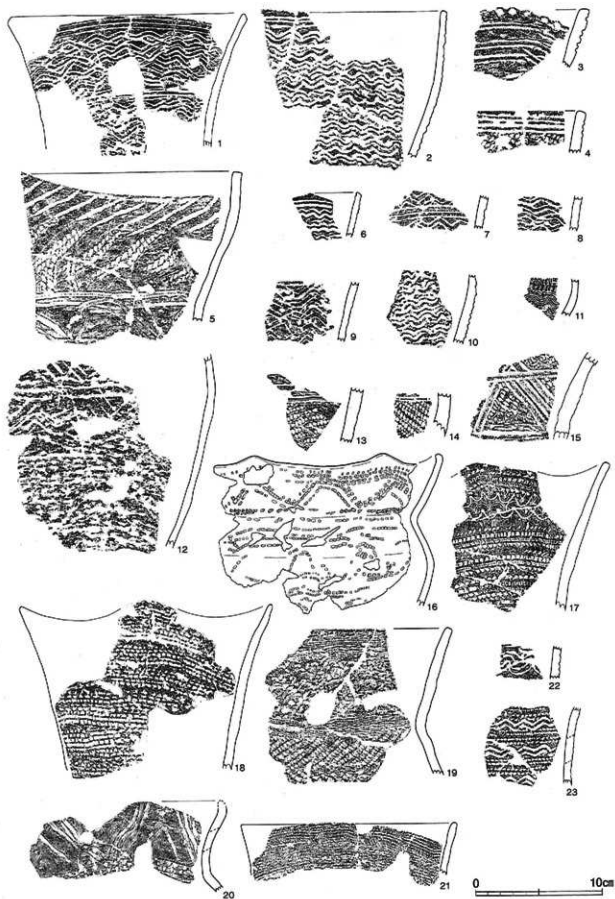
第61图 J17号竖穴住居跡出土土器



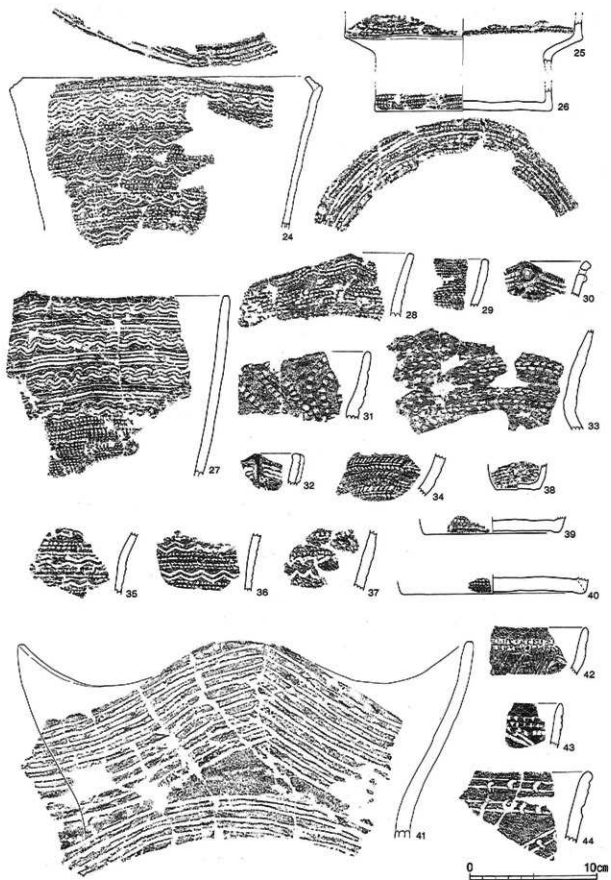
第62图 J18号竖穴住居跡出土土器



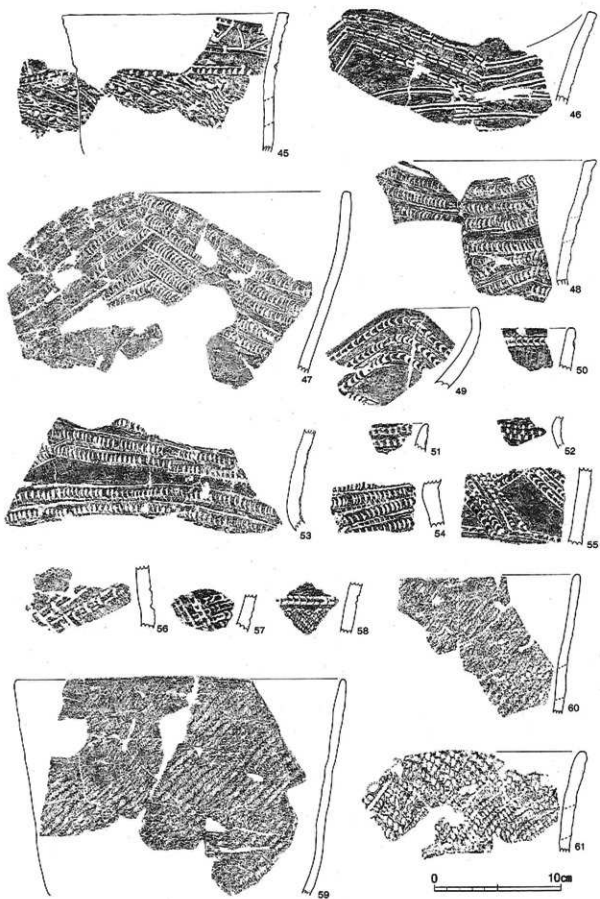
第63图 J21号竖穴住居跡出土土器



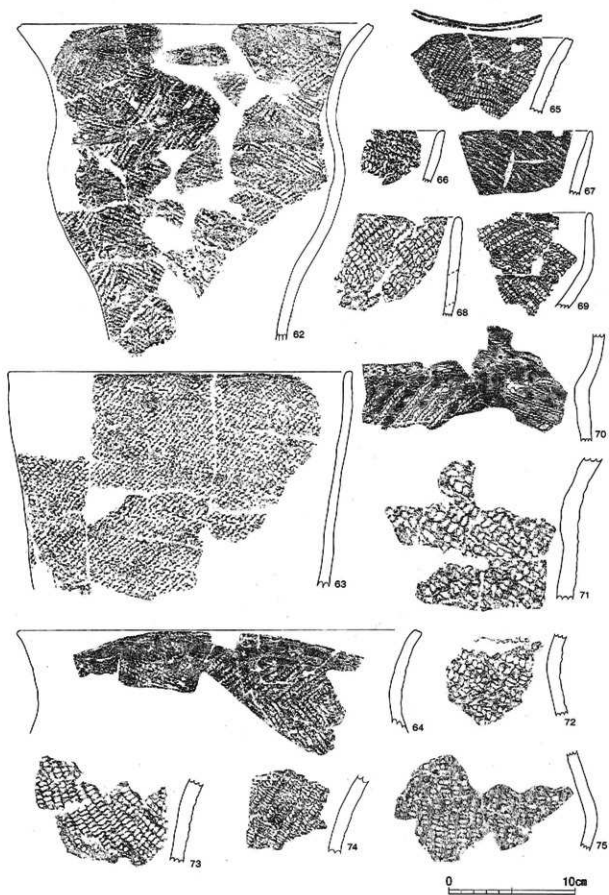
第64圖 J20号竪穴住居跡出土土器(1)



第65圖 J20号整穴住居跡出土土器(2)



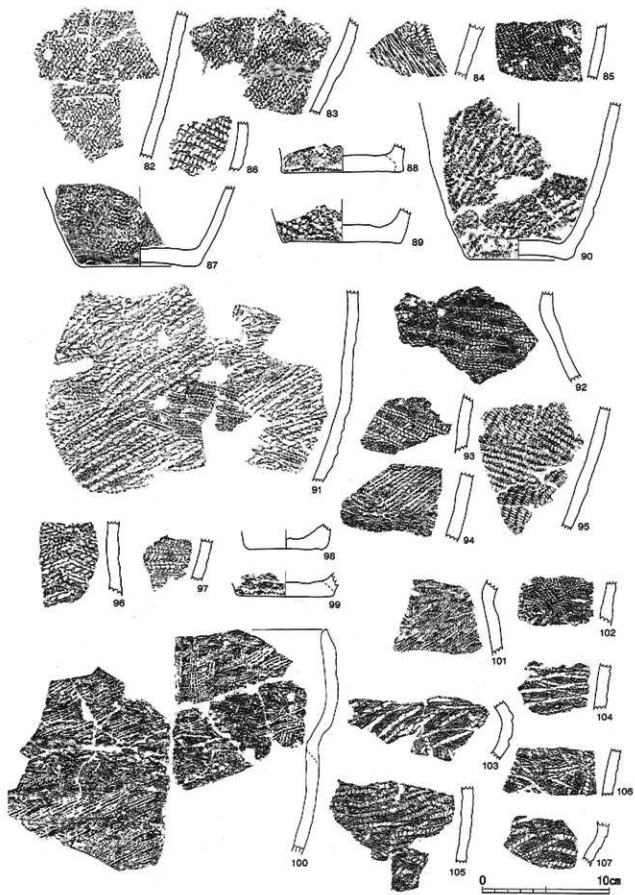
第66图 J20号整穴住居跡出土土器(3)



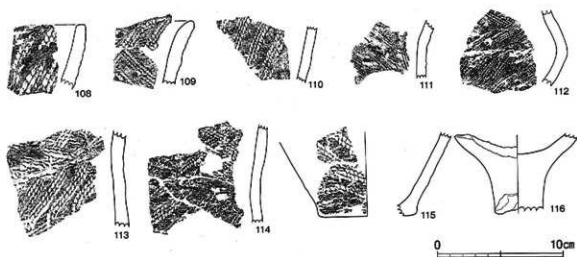
第67圖 J20号整穴住居跡出土土器(4)



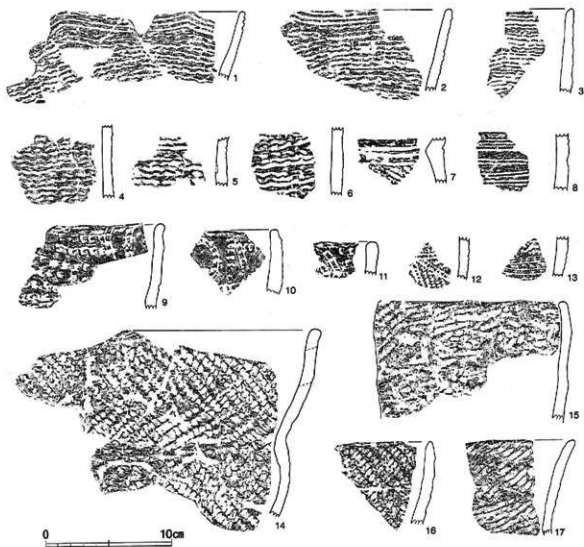
第68圖 J20号整穴住居跡出土土器 (5)



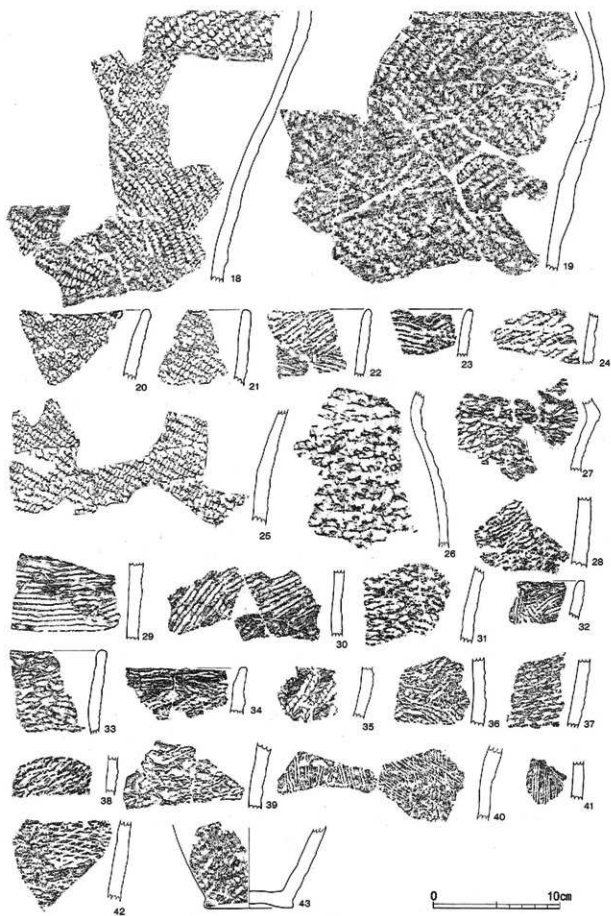
第69圖 J20号整穴住居跡出土土器(6)



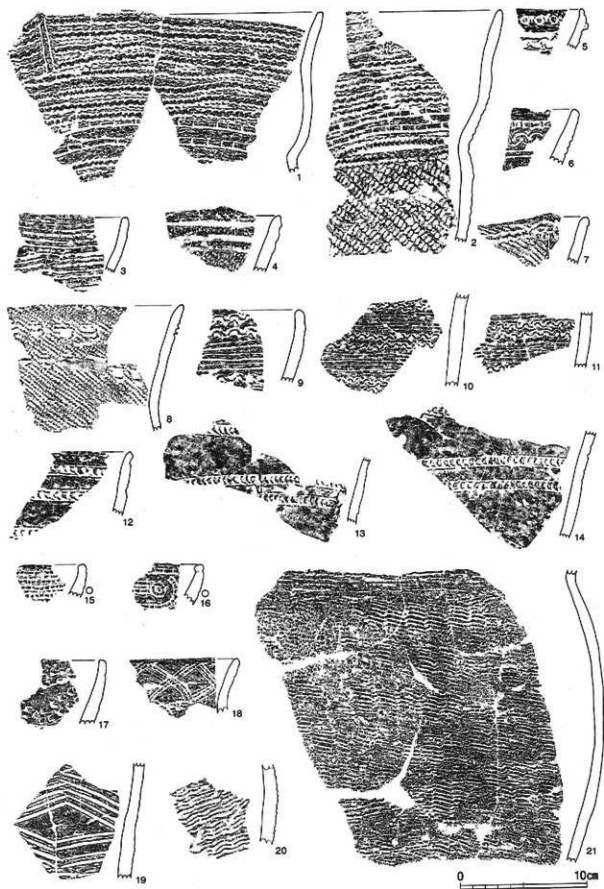
第70图 J20号竖穴住居跡出土土器(7)



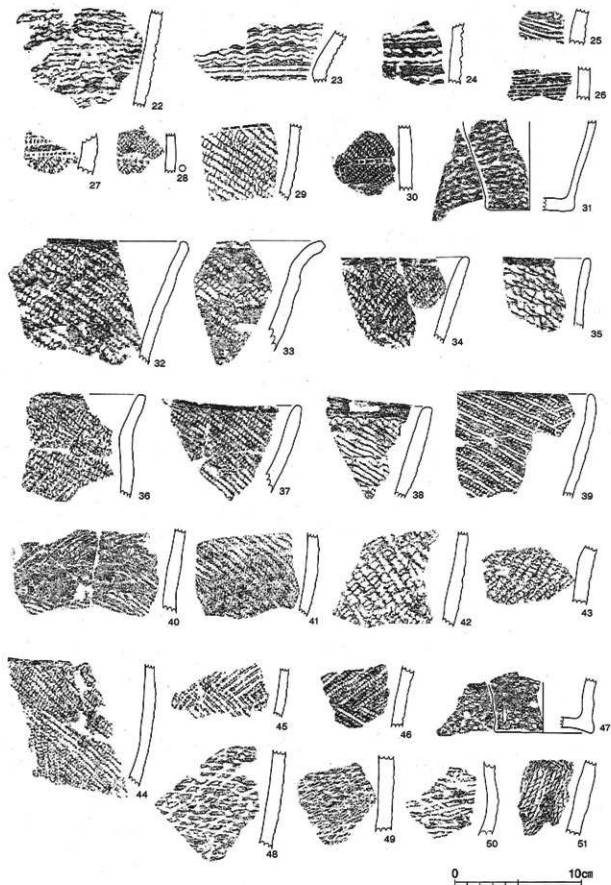
第71图 J22号竖穴住居跡出土土器(1)



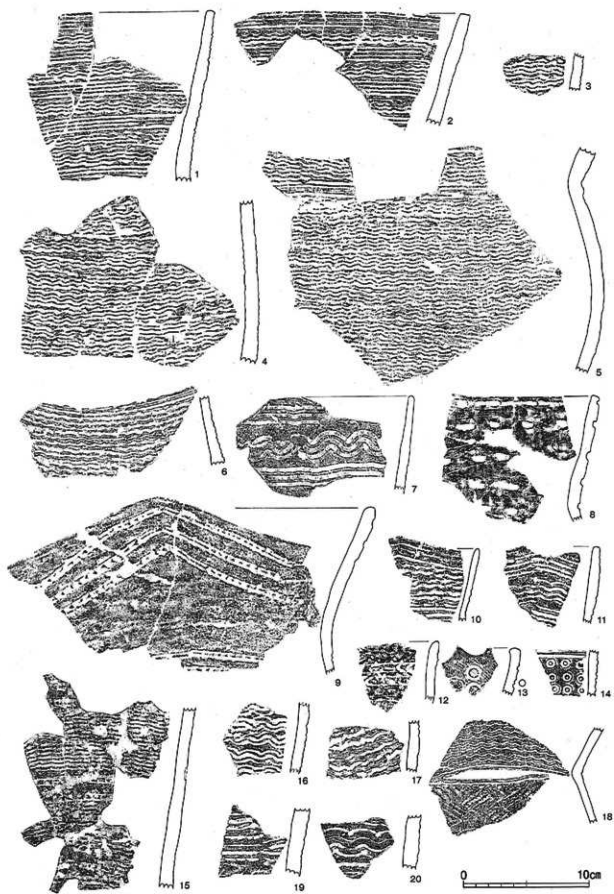
第72图 J22号型穴住居跡出土土器(2)



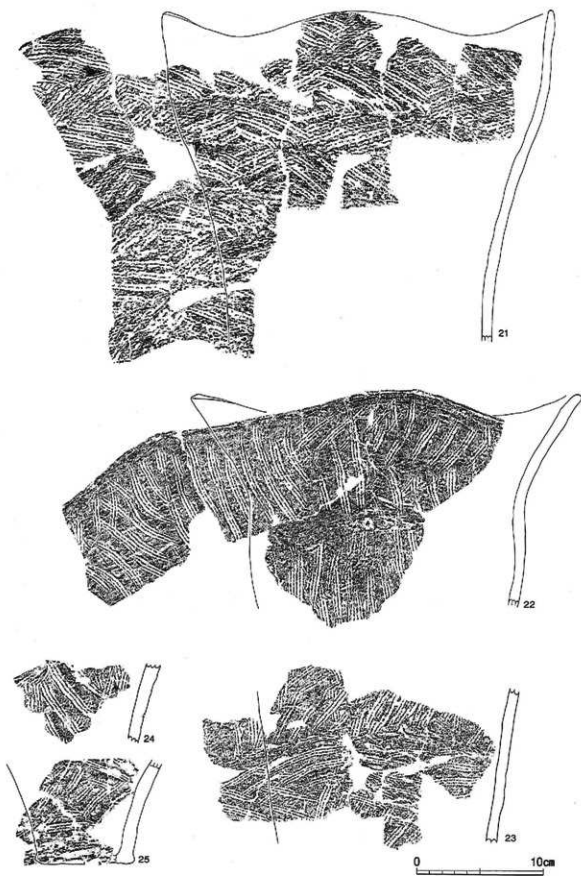
第73圖 J23号壁穴住居跡出土土器(1)



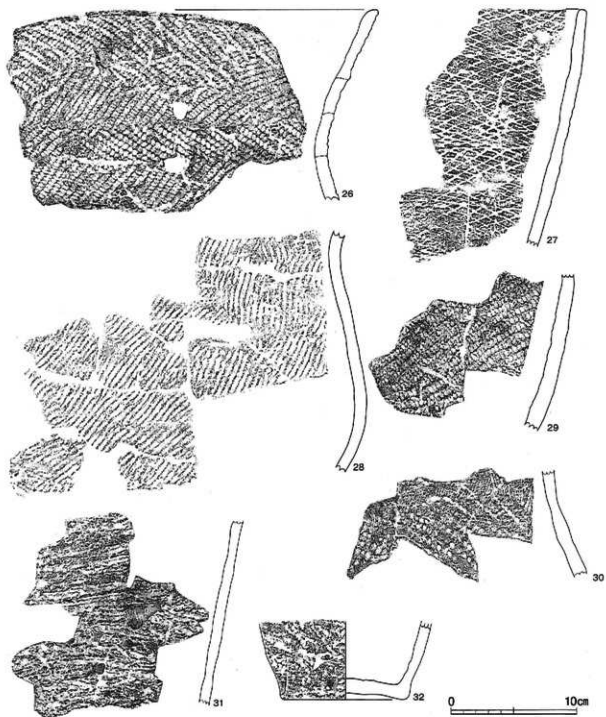
第74图 J23号整穴住居跡出土土器(2)



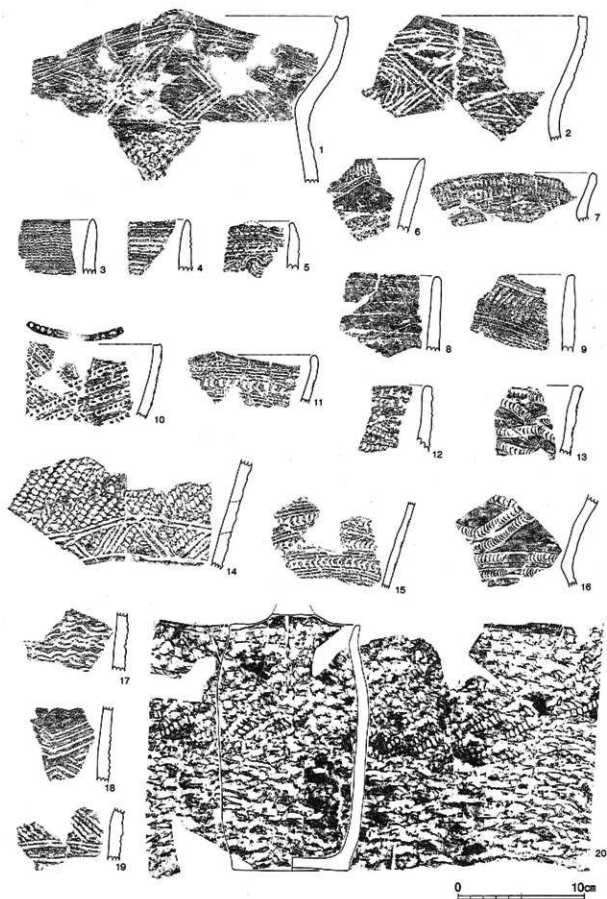
第75图 J24号竖穴住居跡出土土器(1)



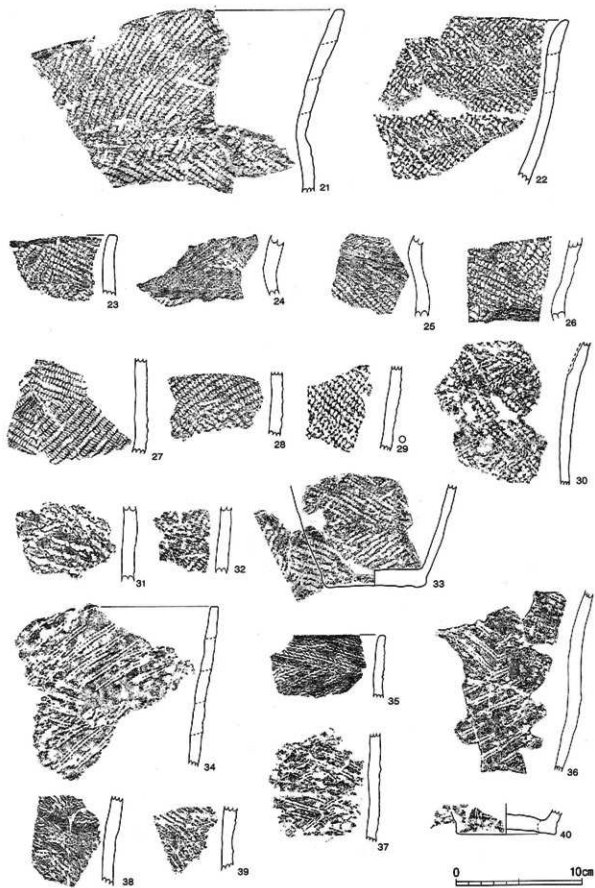
第76圖 J24号竪穴住居跡出土土器(2)



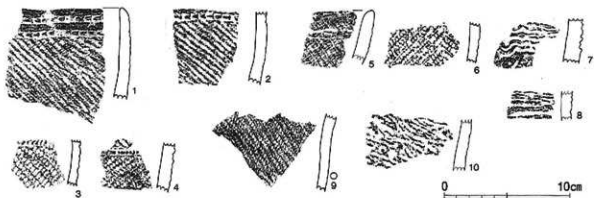
第77图 J24号竖穴住居跡出土土器(3)



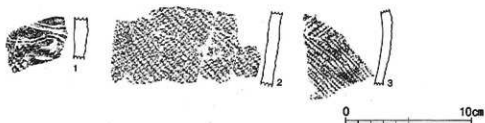
第78圖 J25号整穴住居跡出土土器(1)



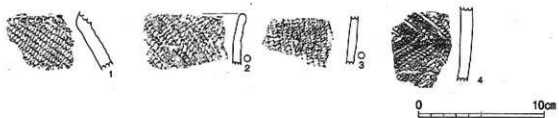
第79圖 J25号竈穴住居跡出土土器(2)



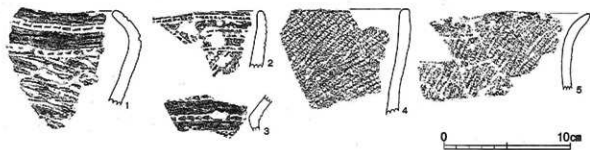
第80图 J26号竖穴住居跡出土土器



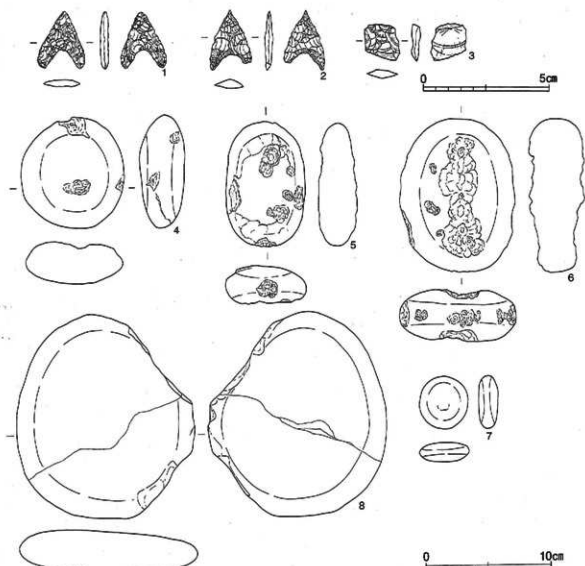
第81图 J27号竖穴住居跡出土土器



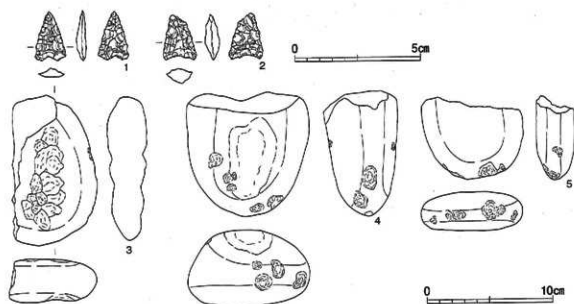
第82图 J28号竖穴住居跡出土土器



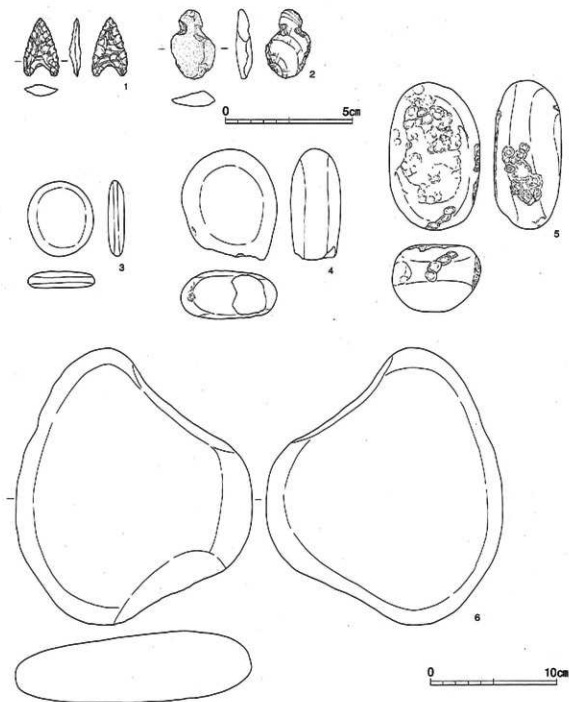
第83图 J29号竖穴住居跡出土土器



第84图 J1号竖穴住居跡出土石器



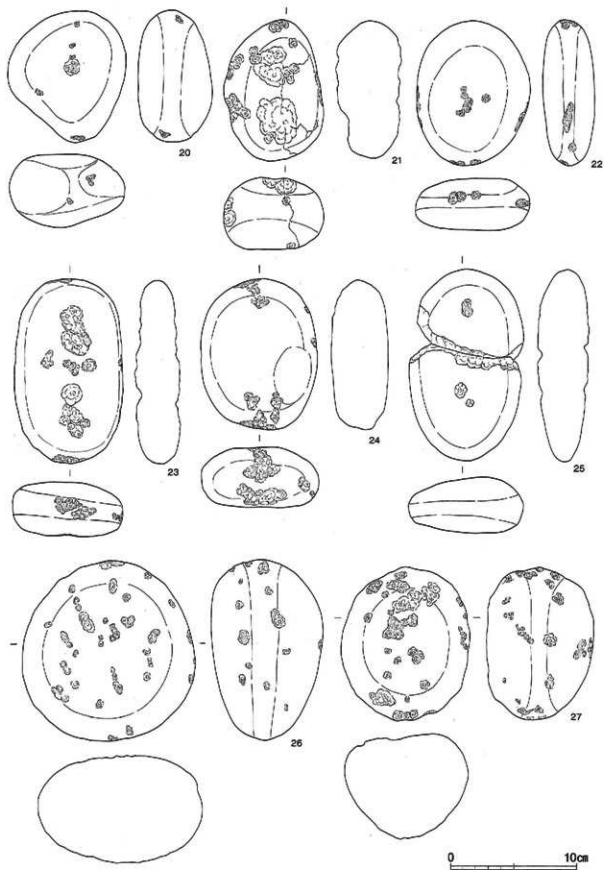
第85图 J2号竖穴住居跡出土石器



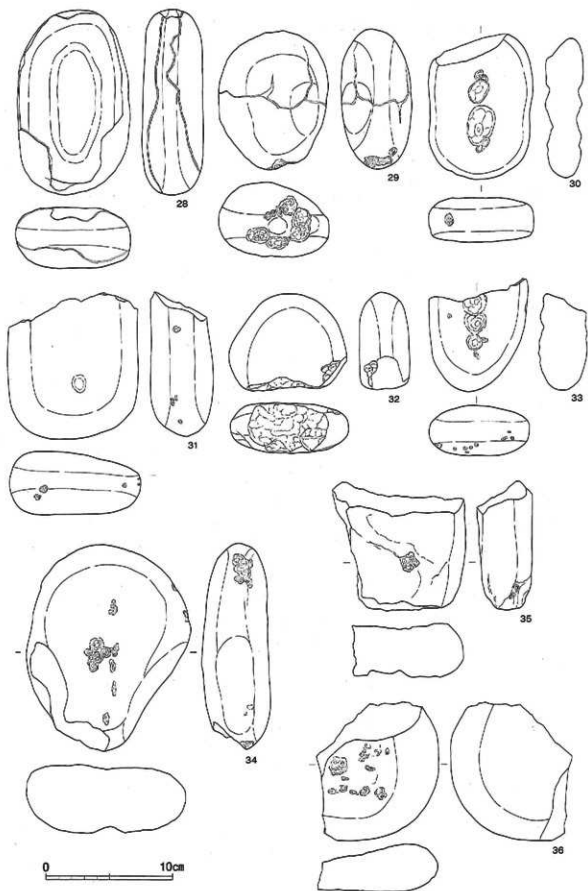
第86圖 J4号竪穴住居跡出土石器



第87图 J5号竖穴住居跡出土石器(1)



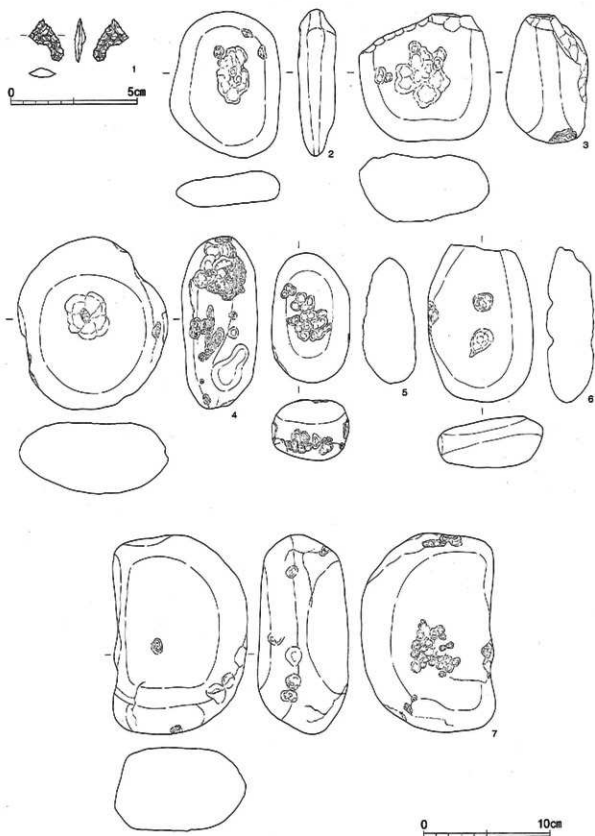
第88圖 J5号竪穴住居跡出土石器(2)



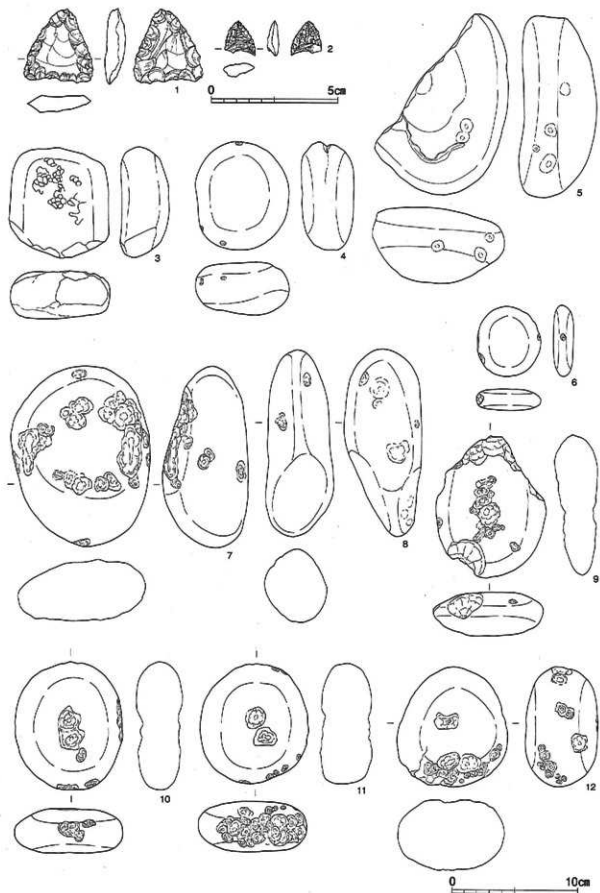
第89图 J5号竖穴住居跡出土石器(3)



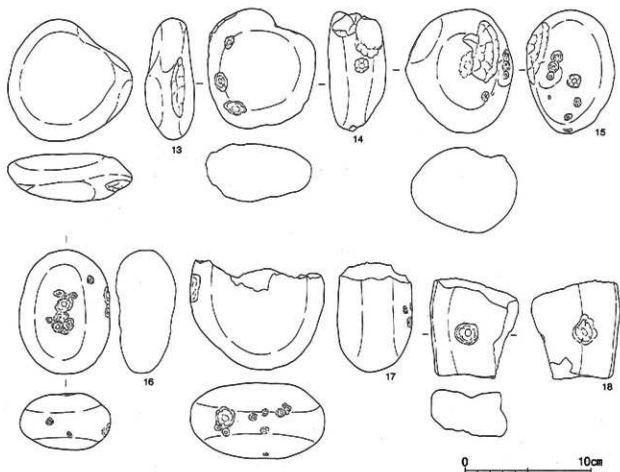
第90圖 J6号竪穴住居跡出土石器



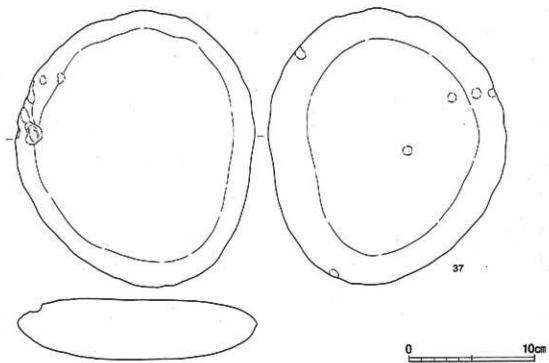
第91圖 J7号整穴住居跡出土土器



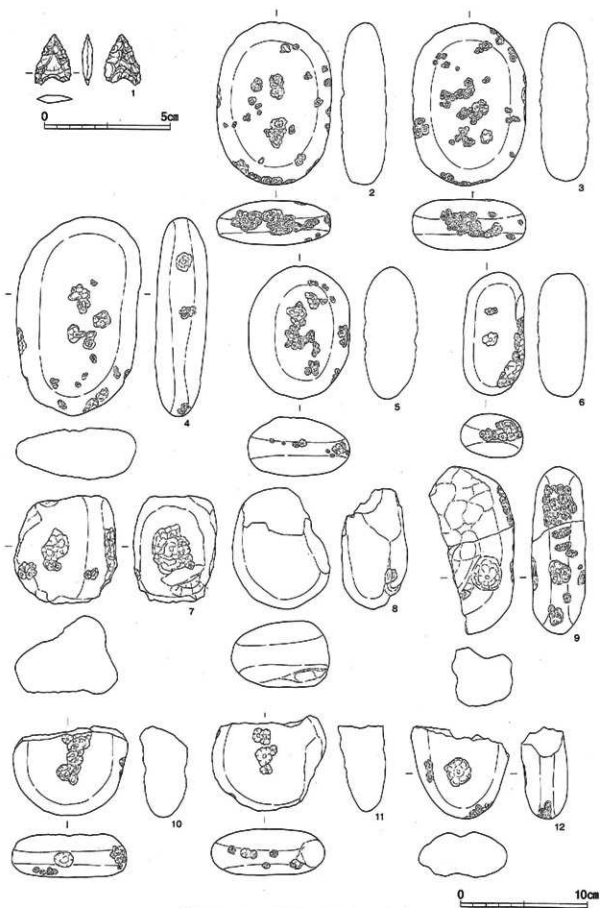
第92图 J8号竖穴住居跡出土石器(1)



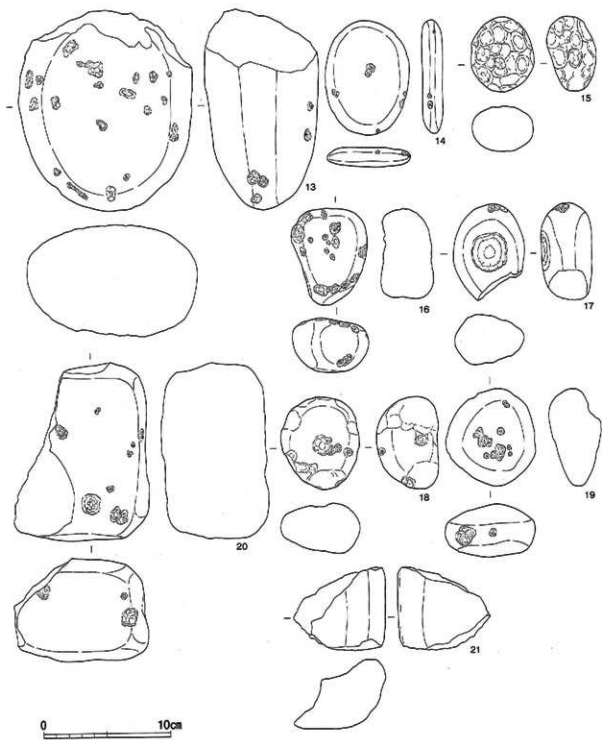
第93圖 J8号竪穴住居跡出土石器(2)



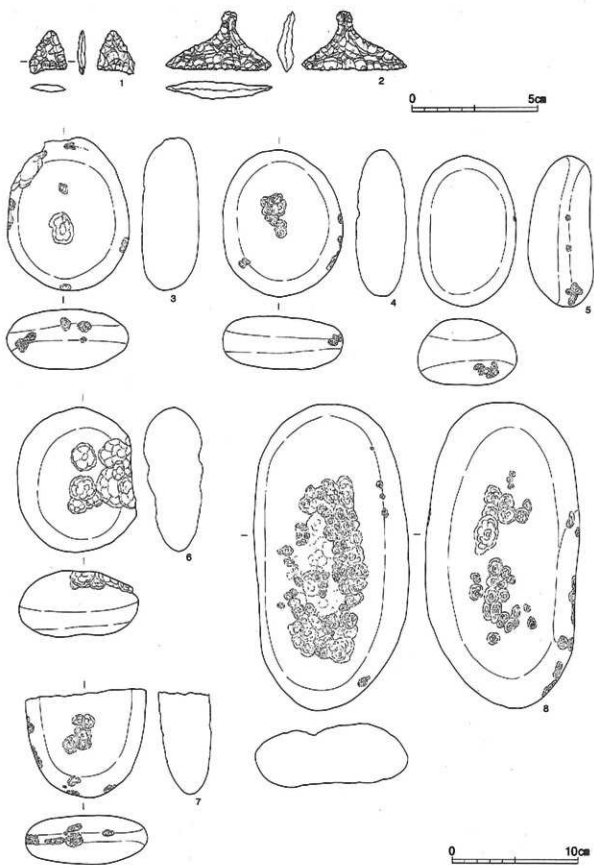
第94圖 J5号竪穴住居跡出土石器(4)



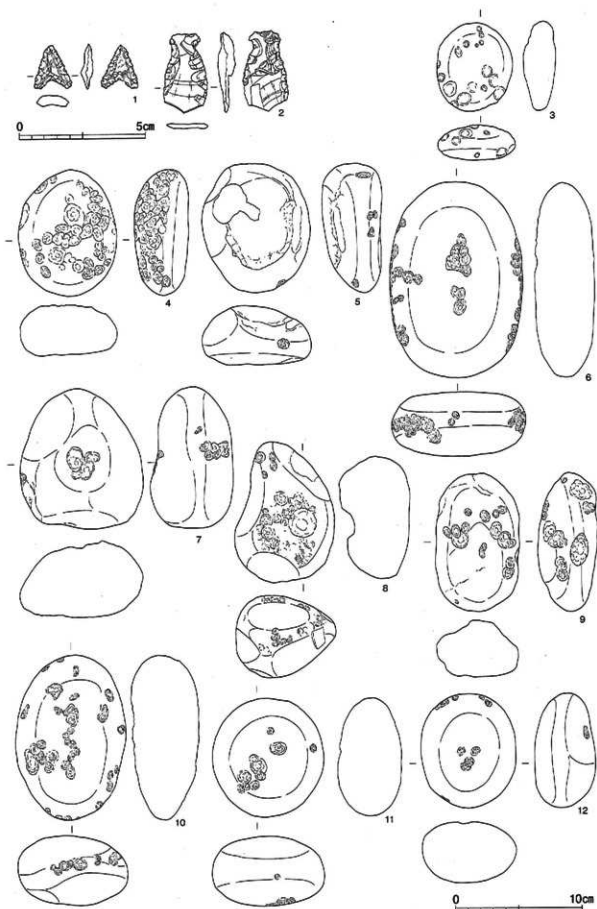
第95圖 J10号整穴住居跡出土石器(1)



第96圖 J10号整穴住居跡出土石器(2)



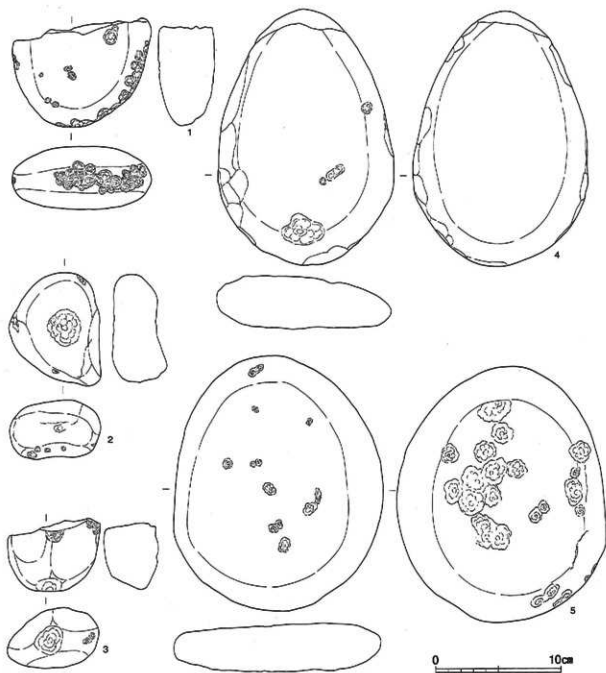
第97圖 J11号整穴住居跡出土石器(1)



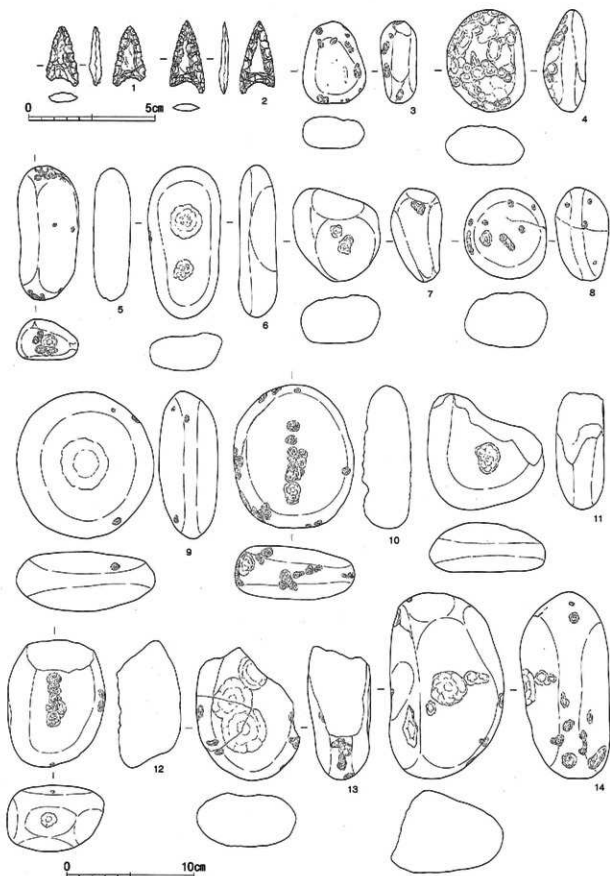
第98圖 J12号整穴住居跡出土石器(1)



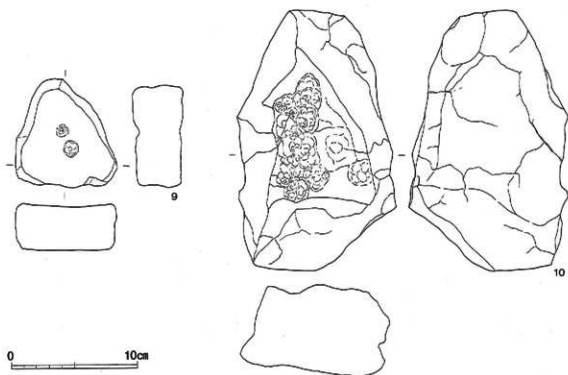
第99圖 J12号整穴住居跡出土石器(2)



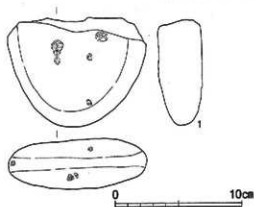
第100图 J16号竖穴住居跡出土石器



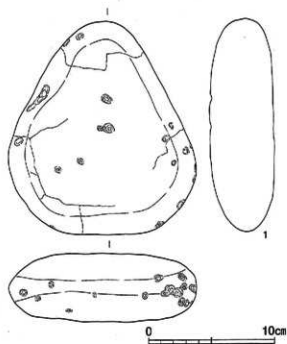
第101圖 J17号竪穴住居跡出土石器(1)



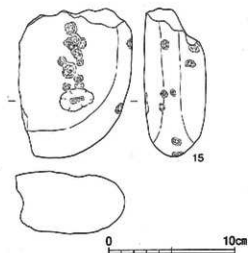
第102图 J11号竖穴住居跡出土石器(2)



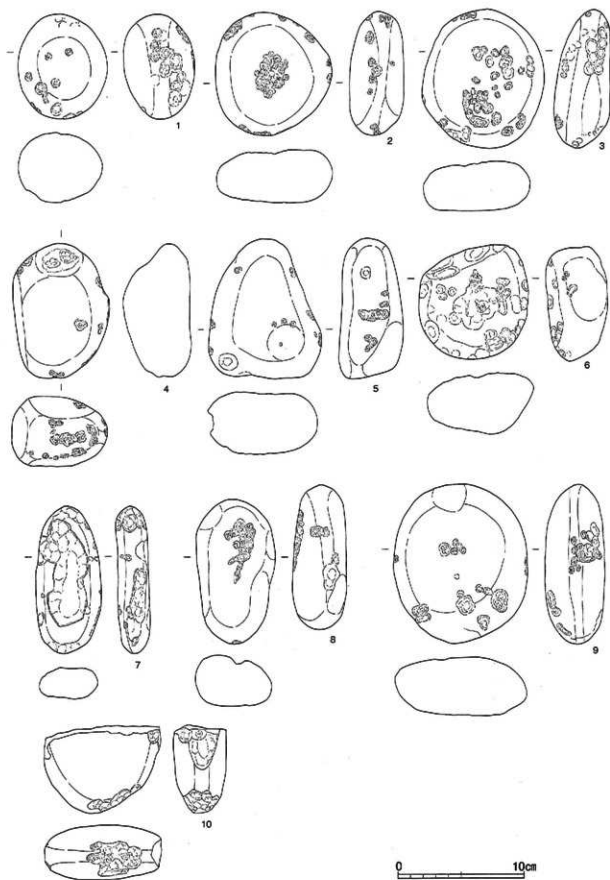
第103图 J13号竖穴住居跡出土石器



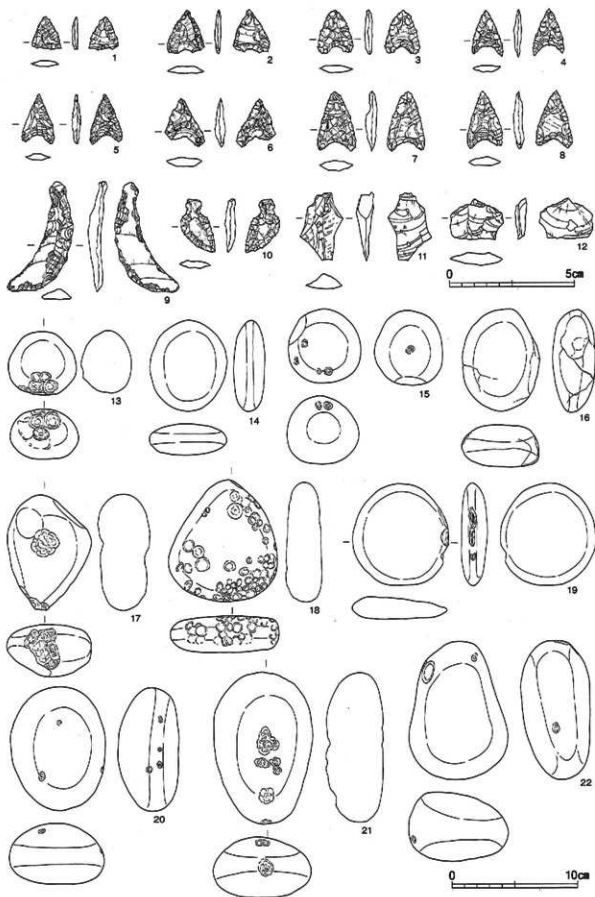
第104图 J15号竖穴住居跡出土石器



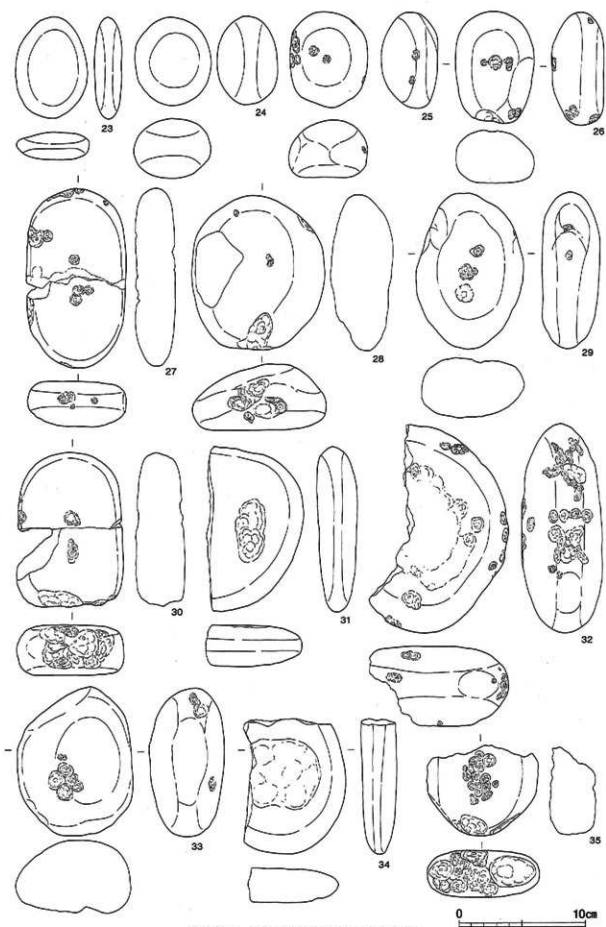
第105图 J17号竖穴住居跡出土石器(2)



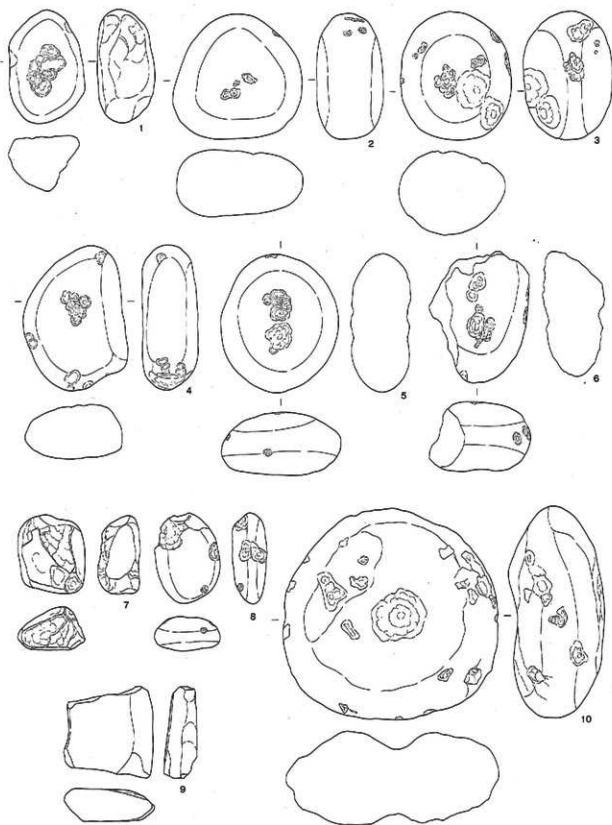
第106圖 J18号竪穴住居跡出土石器



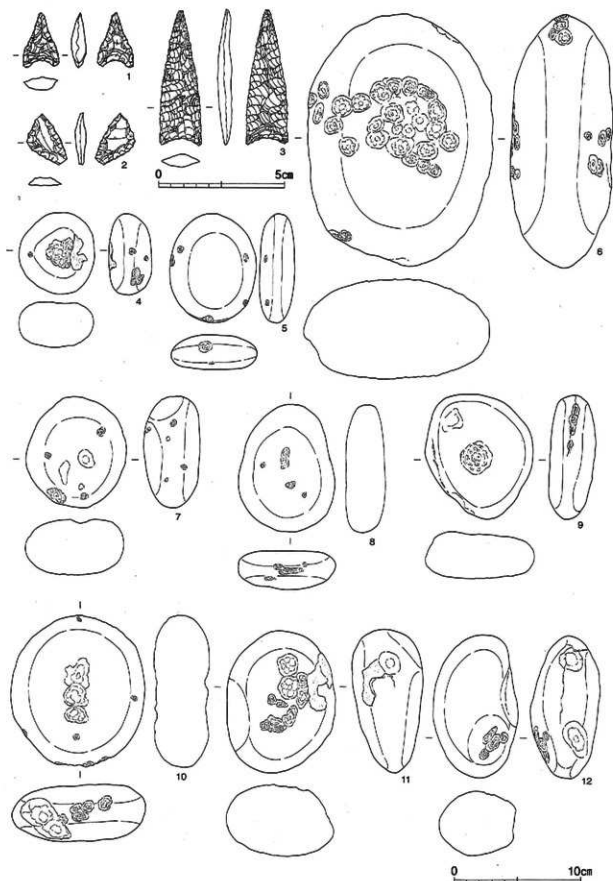
第107图 J20号双穴住居跡出土石器(1)



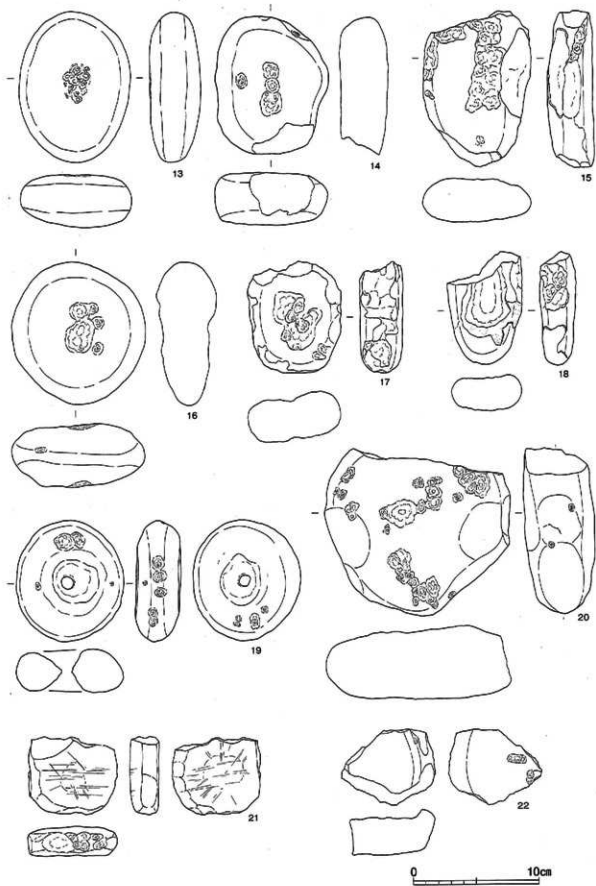
第108图 J20号整穴住居跡出土石器(2)



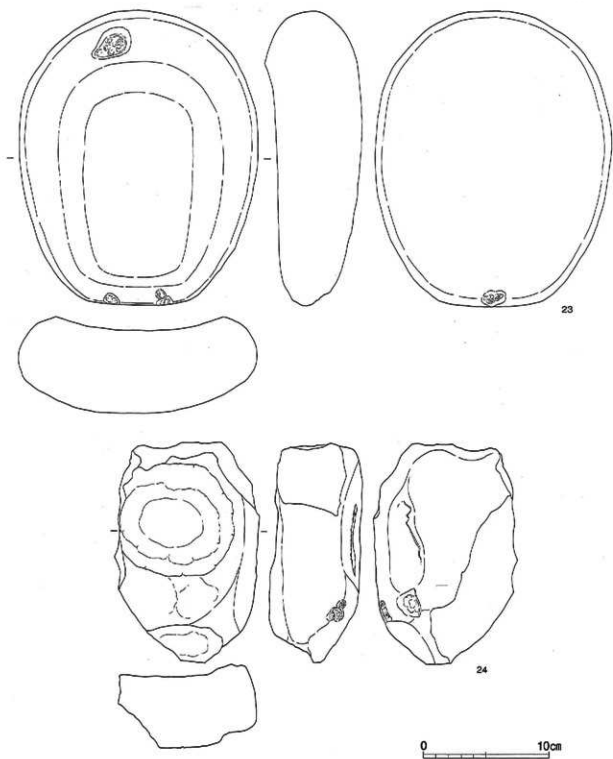
第109图 J22号竖穴住居跡出土石器



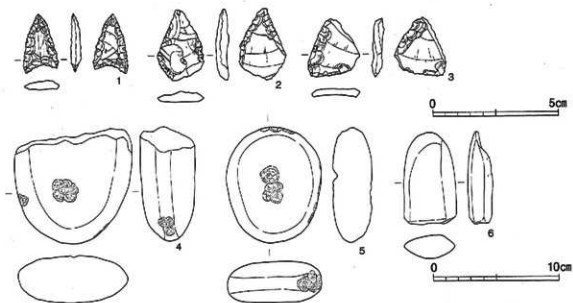
第110图 J23号竖穴住居跡出土石器(1)



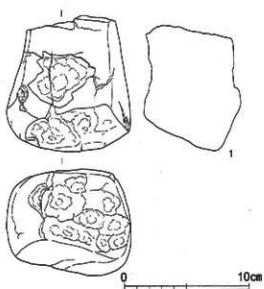
第111圖 J23号整穴住居跡出土石器(2)



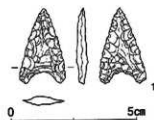
第112图 J23号竖穴住居跡出土石器(3)



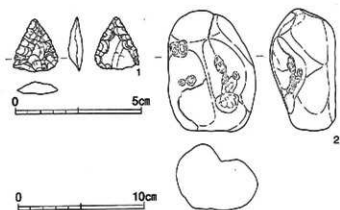
第113图 J24号竖穴住居跡出土石器



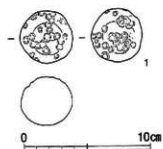
第114图 J21号竖穴住居跡出土石器



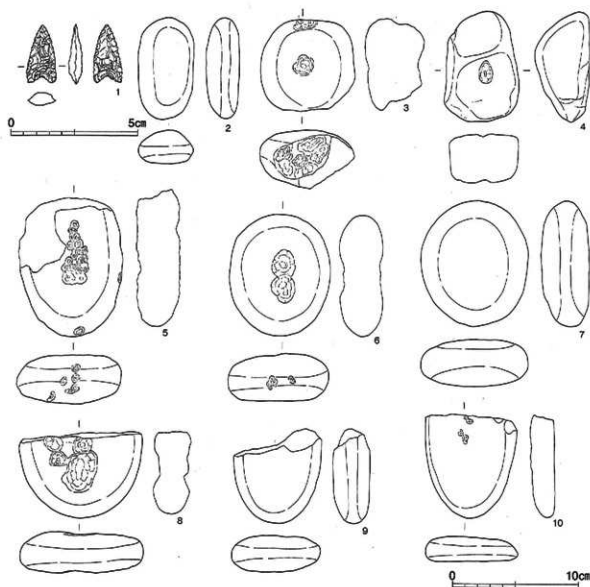
第115图 J28号竖穴住居跡出土石器



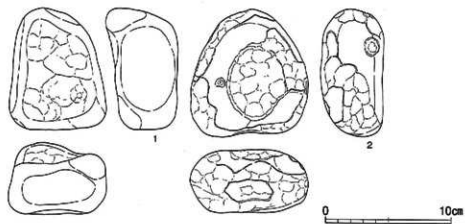
第116图 J29号竖穴住居跡出土石器



第117图 J30号竖穴住居跡出土石器



第118图 J25号整穴住居跡出土石器



第119图 J26号整穴住居跡出土石器

第5表 J1号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.2	1.8	0.3	0.75	流紋岩	5	磨石	9.9	6.2	3.0	300	安山岩
2	石鏃	2.4	1.6	0.4	0.82	黒曜石	6	磨石	12.9	9.0	4.0	550	安山岩
3	剥片	1.4	1.4	0.25	0.47	黒曜石	7	磨石	4.2	3.8	1.5	30	安山岩
4	磨石	8.9	8.1	3.5	290	砂岩	8	石皿	16.2	14.1	3.4	1,200	流紋岩

第6表 J2号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.0	1.2	0.3	0.55	黒曜石	4	磨石	(9.1)	9.4	5.7	750	安山岩
2	石鏃	1.8	1.3	0.5	0.90	チャート	5	磨石	(5.2)	7.8	3.1	240	安山岩
3	磨石	(11.8)	(6.4)	3.5	300	安山岩							

第7表 J4号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.3	1.4	0.4	0.81	チャート	4	磨石	8.5	7.5	3.8	380	安山岩
2	石鏃	2.7	1.7	0.6	1.25	鉄石英	5	磨石	11.7	7.1	5.2	694	流紋岩
3	磨石	6.0	5.2	1.3	52	安山岩	6	石皿	21.9	18.6	5.8	2,650	安山岩

第8表 J5号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.5	1.3	0.3	0.68	チャート	20	磨石	10.4	9.2	5.9	850	安山岩
2	石鏃	1.7	1.5	0.6	0.38	凝灰岩	21	磨石	11.2	7.9	5.4	520	流紋岩
3	石鏃	1.9	1.5	0.3	0.67	チャート	22	磨石	11.3	9.0	3.9	515	安山岩
4	石鏃	1.5	1.4	0.4	0.56	玉髄	23	磨石	14.7	8.6	3.9	675	安山岩
5	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.86	凝灰岩	24	磨石	12.0	9.2	4.5	760	流紋岩
6	石鏃	2.5	3.2	0.35	1.93	チャート	25	磨石	15.2	9.1	4.2	670	安山岩
7	石鏃	2.7	1.6	0.8	1.85	玉髄	26	磨石	14.3	13.5	8.7	2,300	砂岩
8	石鏃	2.5	1.2	0.3	0.93	チャート	27	磨石	12.3	10.0	8.4	1,350	流紋岩
9	刮器	4.1	2.7	1.0	8.69	頁岩	28	磨石	14.7	9.0	4.5	932	安山岩
10	刮器	4.4	2.8	0.6	7.97	ホルンフェルス	29	磨石	11.0	8.7	5.5	580	安山岩
11	刮器	2.8	2.8	0.4	2.75	珪質頁岩	30	磨石	(11.5)	8.3	3.3	420	安山岩
12	剥片	1.7	2.1	0.2	0.66	黒曜石	31	磨石	(11.5)	10.2	5.0	970	砂岩
13	剥片	1.4	1.8	0.3	0.93	黒曜石	32	磨石	(7.7)	9.4	3.7	398	安山岩
14	磨石	9.7	8.9	4.8	450	石灰岩	33	磨石	(8.9)	7.9	3.7	309	安山岩
15	磨石	8.9	8.1	3.8	322	石灰岩	34	磨石	16.4	12.5	5.3	1,450	流紋岩
16	磨石	8.5	8.7	(3.3)	320	安山岩	35	石皿	(11.3)	(10.5)	4.4	620	安山岩
17	磨石	(8.6)	8.5	3.3	355	安山岩	36	石皿	(11.0)	(9.6)	3.7	450	流紋岩
18	磨石	(8.0)	9.1	3.5	364	安山岩	37	石皿	21.3	19.0	5.0	2,400	安山岩
19	磨石	(7.0)	7.6	3.3	260	流紋岩							

第9表 J7号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	磨石	10.1	8.6	4.7	430	安山岩	6	磨石	(8.4)	7.5	4.4	440	安山岩
2	磨石	9.9	8.9	4.8	580	安山岩	7	磨石	7.8	7.8	6.0	594	安山岩
3	磨石	10.9	7.9	3.3	320	流紋岩	8	磨石	(10.1)	6.8	5.3	622	砂岩
4	磨石	10.9	8.0	4.3	512	安山岩	9	石皿	(9.9)	(11.7)	3.9	502	流紋岩
5	磨石	8.4	7.1	3.6	290	流紋岩							

第10表 J7号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.38	玉髄	3	磨石	(10.2)	10.5	6.3	880	安山岩
2	磨石	10.6	8.8	2.6	375	流紋岩	4	磨石	13.7	11.8	5.6	1,240	安山岩

5	磨石	10.3	6.1	4.5	405	流紋岩	7	磨石	15.8	10.6	6.6	1,845	安山岩
6	磨石	(12.4)	8.3	3.7	534	安山岩							

第11表 J8号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	3.0	2.7	0.6	5.34	チャート	10	磨石	10.1	8.5	3.5	460	安山岩
2	石鏃	1.4	1.3	0.4	0.59	チャート	11	磨石	9.5	8.5	4.0	410	砂岩
3	磨石	8.8	7.7	3.8	420	安山岩	12	磨石	9.5	8.8	5.7	640	安山岩
4	磨石	8.5	7.3	4.1	410	安山岩	13	磨石	9.6	9.8	3.7	420	安山岩
5	磨石	14.3	10.2	5.4	1,250	安山岩	14	磨石	9.5	8.5	4.4	495	安山岩
6	磨石	5.6	4.0	1.7	55	安山岩	15	磨石	9.9	8.5	6.8	580	安山岩
7	磨石	14.4	10.8	6.8	1,340	安山岩	16	磨石	9.8	7.1	4.4	420	流紋岩
8	磨石	14.6	5.4	6.0	642	安山岩	17	磨石	(7.9)	10.5	5.8	720	砂岩
9	磨石	11.2	8.8	3.2	350	流紋岩	18	石皿	(7.5)	(6.0)	5.7	220	安山岩

第12表 J10号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.0	1.4	0.3	0.75	チャート	12	磨石	(7.3)	7.8	3.9	210	流紋岩
2	磨石	12.9	9.0	3.5	555	安山岩	13	磨石	(15.8)	17.7	9.1	2,550	安山岩
3	磨石	12.8	9.0	4.1	680	安山岩	14	磨石	14.1	6.6	1.5	140	安山岩
4	磨石	15.7	9.7	4.1	850	閃緑岩	15	磨石	5.9	5.0	3.7	110	安山岩
5	磨石	10.5	8.0	4.6	540	安山岩	16	磨石	7.6	6.0	4.9	240	安山岩
6	磨石	9.8	4.9	3.4	260	安山岩	17	磨石	(7.9)	5.2	4.1	210	砂岩
7	磨石	8.6	8.1	6.4	510	安山岩	18	磨石	7.8	7.1	3.9	300	流紋岩
8	磨石	(9.6)	7.7	5.3	460	流紋岩	19	磨石	7.4	6.3	4.9	280	安山岩
9	磨石	(13.3)	(6.8)	4.1	350	安山岩	20	磨石	14.1	10.6	8.2	1,950	安山岩
10	磨石	(7.1)	9.0	3.7	260	安山岩	21	石皿	(5.6)	(6.1)	4.5	220	安山岩
11	磨石	(7.6)	8.9	3.5	310	安山岩							

第13表 J11号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	1.7	1.5	0.25	0.49	チャート	6	磨石	11.5	9.3	5.6	640	安山岩
2	石鏃	2.4	4.1	0.6	3.27	チャート	7	磨石	(8.6)	9.6	3.8	365	安山岩
3	磨石	12.1	9.6	4.5	760	流紋岩	8	石皿	24.2	12.3	5.2	1,873	流紋岩
4	磨石	11.6	9.5	3.8	530	安山岩	9	石皿	9.3	8.0	3.5	315	安山岩
5	磨石	12.0	8.0	4.9	674	安山岩	10	石皿	(20.5)	(12.3)	7.3	2,440	安山岩

第14表 J12号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	1.3	1.5	0.35	0.64	チャート	10	磨石	13.0	8.8	5.0	696	砂岩
2	石鏃	3.1	1.8	0.6	2.43	チャート	11	磨石	9.5	8.8	5.3	540	安山岩
3	磨石	7.0	6.1	2.6	120	安山岩	12	磨石	9.0	7.5	4.6	430	安山岩
4	磨石	10.5	7.8	3.9	460	安山岩	13	磨石	8.9	8.6	5.3	536	流紋岩
5	磨石	10.2	8.6	4.2	510	安山岩	14	磨石	9.9	(6.8)	3.8	260	安山岩
6	磨石	14.5	10.5	4.9	992	安山岩	15	磨石	10.5	8.2	4.3	510	安山岩
7	磨石	11.2	9.8	6.0	923	流紋岩	16	石皿	(13.6)	11.1	3.8	520	安山岩
8	磨石	11.1	7.9	6.4	705	安山岩	17	石皿	20.6	11.6	6.8	2,180	流紋岩
9	磨石	10.9	6.7	4.6	440	安山岩							

第15表 J13号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	磨石	(8.6)	11.0	3.7	330	安山岩

第16表 J15号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石皿	16.9	14.9	5.2	1,910	流紋岩

第17表 J16号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	磨石	8.7	11.1	4.7	510	安山岩	4	石皿	20.4	13.8	4.0	1,448	流紋岩
2	磨石	9.1	7.3	3.6	350	安山岩	5	石皿	20.8	16.5	3.6	1,745	安山岩
3	磨石	5.8	7.4	4.5	248	安山岩							

第18表 J17号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.3	1.3	0.4	0.96	チャート	9	磨石	11.6	10.9	4.7	868	流紋岩
2	石鏃	2.9	1.4	0.3	1.28	チャート	10	磨石	11.3	9.5	3.9	590	安山岩
3	磨石	6.5	5.0	2.6	122	安山岩	11	磨石 (9.3)	9.2	3.6	390	安山岩	
4	磨石	8.1	6.3	3.1	218	安山岩	12	磨石	10.1	7.7	5.0	550	砂岩
5	磨石	10.8	4.7	3.3	230	安山岩	13	磨石	10.5	8.3	4.6	478	安山岩
6	磨石	12.1	5.8	2.8	305	流紋岩	14	磨石	14.8	9.2	7.0	1,176	安山岩
7	磨石	7.4	6.9	4.0	262	安山岩	15	石皿	(11.7)	(9.0)	4.8	730	安山岩
8	磨石	7.2	6.6	4.2	235	安山岩							

第19表 J18号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	磨石	8.3	7.0	5.5	410	安山岩	6	磨石	9.1	8.7	4.5	470	安山岩
2	磨石	9.8	9.2	4.1	502	安山岩	7	磨石	11.7	5.2	2.3	208	安山岩
3	磨石	11.1	9.8	3.7	609	流紋岩	8	磨石	11.4	6.3	4.1	418	安山岩
4	磨石	10.7	6.5	5.4	572	安山岩	9	磨石	12.7	10.6	4.5	910	流紋岩
5	磨石	11.1	8.9	4.7	670	安山岩	10	磨石	(7.0)	9.2	4.2	376	流紋岩

第20表 J20号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	1.3	1.2	0.2	0.28	玉髄	19	磨石	7.9	7.4	2.1	265	安山岩
2	石鏃	1.7	1.5	0.25	0.54	粘板岩	20	磨石	9.8	7.5	4.6	480	安山岩
3	石鏃	1.8	1.4	0.25	0.64	チャート	21	磨石	12.1	7.8	4.6	560	安山岩
4	石鏃	1.8	1.2	0.25	0.41	黒曜石	22	磨石	11.0	7.8	5.3	682	流紋岩
5	石鏃	2.0	1.3	0.35	0.72	珠寶頁岩	23	磨石	8.1	5.7	2.1	136	安山岩
6	石鏃	1.9	1.6	0.3	0.60	黒曜石	24	磨石	7.0	6.2	4.7	275	安山岩
7	石鏃	2.4	1.5	0.4	1.36	チャート	25	磨石	7.6	6.2	4.4	295	安山岩
8	石鏃	2.2	1.4	0.3	0.90	チャート	26	磨石	8.9	6.2	4.1	330	流紋岩
9	石鏃	4.3	1.2	0.5	1.76	珠寶頁岩	27	磨石	14.2	7.8	3.2	540	流紋岩
10	石鏃	2.1	1.4	0.3	0.87	チャート	28	磨石	12.2	10.6	5.0	662	安山岩
11	剥片	2.7	1.9	0.6	1.40	黒曜石	29	磨石	12.4	8.7	4.6	650	安山岩
12	剥片	1.6	2.1	0.4	1.13	黒曜石	30	磨石	12.3	8.4	3.8	620	安山岩
13	磨石	5.0	5.4	3.9	13	安山岩	31	磨石	(13.1)	7.6	3.0	470	砂岩
14	磨石	7.2	6.1	2.5	14	安山岩	32	磨石	16.6	11.0	6.2	1,158	流紋岩
15	磨石	5.9	5.7	5.4	23	安山岩	33	磨石	11.8	9.2	5.7	840	安山岩
16	磨石	8.1	6.2	3.7	212	安山岩	34	磨石	10.7	(8.0)	2.7	299	安山岩
17	磨石	9.2	6.7	4.0	270	安山岩	35	磨石	(7.2)	8.9	3.5	290	安山岩
18	磨石	9.6	8.6	2.9	350	安山岩							

第21表 J21号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	磨石	(10.6)	9.8	8.3	1,220	安山岩

第22表 J22号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	磨石	9.0	6.0	4.5	295	安山岩	6	磨石	5.5	8.0	5.3	410	流紋岩
2	磨石	9.8	10.1	5.1	790	安山岩	7	磨石	6.3	5.3	3.2	145	安山岩
3	磨石	10.1	8.8	6.9	820	安山岩	8	磨石	7.2	5.2	2.5	90	安山岩
4	磨石	11.5	8.2	4.4	560	安山岩	9	磨石	(7.2)	7.1	2.2	160	安山岩
5	磨石	11.0	9.4	4.7	610	流紋岩	10	石皿	16.6	16.7	7.6	2,160	流紋岩

第23表 J23号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.2	1.4	0.5	1.10	チャート	13	磨石	11.8	8.7	4.1	475	安山岩
2	石鏃	2.1	1.4	0.35	0.80	チャート	14	磨石	10.9	9.0	4.1	610	流紋岩
3	石鏃	2.2	1.4	0.5	1.10	チャート	15	磨石	(12.4)	8.6	3.7	570	安山岩
4	磨石	5.3	1.6	0.6	2.65	流紋岩	16	磨石	11.2	10.5	4.5	570	安山岩
5	磨石	8.9	6.8	2.7	180	安山岩	17	磨石	(8.8)	7.4	3.3	325	安山岩
6	磨石	20.0	14.6	7.7	3,300	安山岩	18	磨石	(9.0)	6.0	3.0	190	安山岩
7	磨石	8.8	7.9	4.5	450	安山岩	19	磨石(凹石)	9.6	8.5	3.7	320	砂岩
8	磨石	10.0	7.7	3.0	350	安山岩	20	磨石	(12.4)	14.5	5.2	1,500	流紋岩
9	磨石	9.8	8.6	3.7	420	安山岩	21	磨石	(6.0)	7.1	2.3	160	安山岩
10	磨石	12.0	10.5	4.5	810	安山岩	22	石皿	(5.9)	(7.4)	3.2	90	安山岩
11	磨石	11.3	8.9	5.5	720	流紋岩	23	石皿	23.3	18.9	6.7	3,710	安山岩
12	磨石	11.3	6.7	5.4	560	流紋岩	24	石皿	17.4	10.8	5.7	1,900	流紋岩

第24表 J24号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.3	1.4	0.35	0.88	チャート	4	磨石	9.0	9.3	4.0	441	安山岩
2	石鏃	2.8	1.9	0.4	2.02	流紋岩	5	磨石	9.2	7.5	3.0	260	安山岩
3	削器	2.3	2.1	0.25	1.63	チャート	6	磨石?	(7.3)	(4.2)	1.8	80	安山岩

第25表 J25号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.3	1.1	0.5	1.05	赤色チャート	6	磨石	9.6	8.0	3.6	389	安山岩
2	磨石	8.0	4.4	2.5	130	安山岩	7	磨石	9.9	8.5	3.6	450	流紋岩
3	磨石	7.3	7.5	4.5	260	安山岩	8	磨石	(6.8)	9.7	3.1	200	安山岩
4	磨石	8.7	5.9	4.0	271	安山岩	9	磨石	(7.5)	6.9	2.8	150	安山岩
5	磨石	(11.0)	8.8	3.4	415	安山岩	10	磨石	(8.2)	7.4	1.8	170	流紋岩

第26表 J26号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	磨石	9.7	7.7	5.0	510	安山岩	2	磨石	10.1	9.3	4.5	632	流紋岩

第27表 J28号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	3.0	1.8	0.3	1.49	チャート

第28表 J29号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	石鏃	2.1	1.7	0.4	1.25	チャート	2	磨石	9.6	6.8	5.2	460	

第29表 J30号竪穴住居跡出土石器計測表

No	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質
1	磨石	4.2	4.2	4.1	62	安山岩